

掌編小説集

掌編小説集

いまのまさし

いまのまさし





掌編小説集

いまのまさし

目次

ゲルマドン	1	ピラミッドパワー大騒動	46
大政策	7	UFO対超現研	55
トントベイ	10	花火	65
レミング	14	お餅を食べたウサギ	68
最後の予言者	21	ある雪の朝突然に	74
ファボも地球に帰る	24	サンタが愚痴にやって来る	88
一歩	32	廃村にて	93
本物の生き物は	41	おつかれさま	104

Happy Xmas	107
誕生パーティーへいらっしやい	111
タフな男	115
宿敵（ライバル）	118
王	123
日本英雄伝	133
認識論的存在論・要旨	143
オヤジの魔法使い	145
蛩二郎、弥生の風に震える	147
最期の夜に	156
黒猫とぼく	159
黒猫と蟬とヒヨドリ	159

猫宇宙	164
ぼく	168
クラインの壺	170
迷った家族	174
流星雨の夜	177
ハッピー軒の夏	193
あとがき	210

装丁・イラスト
いまのまさし

ゲルマドン

(宇宙のくしゃみ)

広い宇宙がほんのまばたきする間のできごと…

1

* * *

ゲルマドン

彼はゆっくり室内を見回した。いつもとかわりなく単調な円形の室内であった。そう、ここはドーム形の研究室なのだ。彼の名は、サイエンス・スコラ。スコラ氏は公害問題にとりくんでいる天文学者だ。近ごろはずいぶん宇宙もよごれてきた。昔、現在のような円盤が発明される前は、何段式とかのロケットで月に飛んだ。そのころのゴミも宇宙空間にただよっている。ところで、最近、有害星というものが発見された。

これは、有害なものを自分で宇宙へほうりだす星だが、こういう星のいくつかは、反陽子爆弾によってもう爆破したがまだそうとうのこっている。

スコラ氏は赤いスイッチをおした。すると、今まで壁だったところが、とつぜんテレビスクリーンになった。パツと、青い星がうつしだされた。ほとんど正確な球形をしていて、厚い雲が気流にのってその星をとりまいている。

「ガタン」と大きな音がしたかと思うと、壁の一部がぽっかり開いた。そこからふとった中年の男が顔を出した。

「やあ、長官」

と、スコラ氏は言った。

「やあ、ミスター・スコラ。資料をもらいにきたよ」

「ゲルマドンのですね」

「ああ、当面はね。しかしそのうち他の有害星のものももらいにくるよ。アツこれが有害星一〇四七番のゲルマドンだな」

「ええ、偵察用無人円盤から送信してきているやつ

です」

「この星には、われわれの星のように森や林もありそうだな」

「その可能性もありますね」

長官とよばれた男は室内の時計を見上げた。

「ヤツもうこんな時間か。じゃ失礼するよ。会議におくれちゃこの資料が大なしになってしまっからね」

長官は笑いながら部屋を出た。

彼は、エアタクシー（エアタクシーとは、エアカー・タクシーのことだ）をよびとめ、チューブカー・ステーション・ビルディングへ向かった。

2

ここで長官とよばれる人物について一言、言っておこう。彼は宇宙省の長官で、又、有害星爆破作戦の作戦長でもある。今、彼は、ゲルマドンの爆破を国に要請しているところで、今日は、これから、そのことについて会議に出席するために、首都へ向かってい

るのだ。

彼は、ビルの一四五階のエア・チューブカー乗り場へやってきた。丸い部屋にぐるりと丸い穴がいくつもあいている。中にはそれがしまっているものもあった。

首都行きのチューブカーは、思ったよりすいていた。

彼は一つの穴の中に入った。中は、円筒形で大型バスくらいの大ささだ。半分くらいの座席はうまっていた。座席はみんな入り口（長官が入ってきた方）を向いていた。つまり進行方向から見てもうしろ向きになっている。万一のことを考えての安全設計だ。内部はけい光灯の光でみちていた。

彼は一つの席につき、安全ベルトをしめた。ブザーがなって後部のハッチがしまり、ホームの入り口の方も安全のためしめられた。かるい振動とともに車は走りはじめた。

エア・チューブカーは金属性の管の中をえんぴつのキヤップのような形の本体が、空気の濃薄によって音速マッハ以上で走るのだ。なんとこの星を一周するのに十時間である。首都までは三時間、それまでやるこ

ともないので、彼が今、趣味にしている歴史についてまとめることにした。

二六〇〇年ごろ、ついに人類は大戦争をおこした。そのころは、人類は星の中にいくつも国を分けていた。なぜ彼らがそんな必要のないことをしていたのか、そして国々を一つにまとめようとしなかったのか？ 彼にはそれが疑問であった。どうも国々が分かれていたのが大戦の原因らしかった。とにかくその後、国々は一つにまとまった。なんとか今のようになったのが五〇六世紀前の四三九〇年代。それから…。

かるい振動があった。出口が開いた。
(どうもねてしまっていたな)

彼は、そう思いながらゲルマドンの資料の入ったかばんを大切そうに持ってエレベーターの前へ立った。このビルは、この国の政治の中心ともいえるビルである。政府の重要な機関が全部入っているのだ。エレベーターはまもなく開いた。彼は中に入り五九階のポタンをおした。アツというまにとびらは開いた。

目の前のドアの上に大きく「国会内宇宙省、公害

問題会議室」と書いてあった。

彼は大きく息をすった。この中に大統領をはじめそのほか首脳部がそろっているのだ。彼は戸を開けた。ほとんど席はうまっていた。彼が席につくとすぐ会議は始まった。

長官は言った。

「さて、みなさん、これから私は有害星ゲルマドンについて、天文学者でもあり、また、有名な公害学者でもあります、サイエンス・スコラ氏に依頼しておきました資料を読ませていただきます」

長官は、ここで一息ついてまたはじめた。

「まず、この星の状態を。この星には、我々の星のように山、川、海や、森などもあり、ごく我々の星にいた星であります

「一言、言わせていただきますと、酸素その他については我星と同じ位であることが、判明しております。

「この星は、ここから四・五光年ほど先にあり、マラス星の内側から三つ目の惑星^{わく}で月を一つもった星です。

「ところで無人円盤からの報告によりますと、この星から大へん大きな量の放射能が出ていることがわかりました。それは、今はこれだけはなれているのですから心配はいりません。しかし、何百年、何千年すればこの星に影響もでかねません。今のうちになんとかしなければ我々の子孫に被害がくるのです。」

「私は、さっそくこの星を反陽子爆弾によって爆破することを国に要請いたします！」

彼は着席してまわりの人々の顔いろをうかがった。

「あの…」

一人が立った。長官はドキリとした。

「そこには生物がいるんでしょう。もちろん」

「ええ、います。しかし、それほど高等な生物はいないというデータがでております」

「じゃ私からも一つ」

大統領が言った。

「そのくわしいデータをみせてくれたまえ」

長官は、それに答えて大きな、数字のたくさん書いてある紙を順に回した。

その後、少し話合った結果、可決したのであった。すぐにゲルマドン爆破臨時特別本部が設立され、二十億メガトンの反陽子ミサイルが用意された。

長官は、コンクリートのコントロールビルの中にいて、ミサイル発射をまっていた。

「スリー・ツー・ワン：ファイア！」

ミサイルは、太陽の光をうけて輝きながら、ゆっくりその大きなからだをうかしていった。その下から出る白いけむりはあたりをだんだんつつんでいったが、ミサイルのもう小さくなった船体はまだ見えていた。

キラッとミサイルは輝き宇宙へと消えていった。そしてこれから二千光速（光の速さの二千倍）でゲルマドンへと向かうのであった。

さて、ミサイル発射一時間後、本部へスコラ氏がおわてふためてやってきた。彼は長官にある写真をわたしながら言った。

「長官、見てください。この生物を…」

「なんだ、これは。怪じゅう映画かね。ハハハハ」

「ちがうんです。ゲルマドンの上空にいる、無人円盤

からおくってきたものなんです。データーによると…」

3

話は、ニューヨークにつうる。ここ、ニューヨークは現在たいへんなさわざだ。いや、ニューヨークだけではなく、世界中とっていいだろう。

ジム・ロビンソンは書きかけの小説をそのままにして、ラジオに聞き入っていた。ラジオは、反陽子ミサイルを、近くの星に打ち上げたことや、宇宙から地球へと接近しているいん石は、今夜九時ごろに地球にくだろうと、そして、それは小さいので大気圏に入ればきえてしまいうだろうことを伝えていた。

「…次は、円盤についてのニュースです。このところ空飛ぶ円盤を見たという人が、だいぶおり、中にはつかまえられて脳波をテストされたなどという人が出てくるしまつて、当局では…」

プツとラジオがぎれた。ジムは時計を見た。九時五分前であった。なぜか彼はせずじがゾーツとしたので、

そのままベッドにもぐりこんだが、それが彼の最後のねむりであった。

4

「それでは、君はなにか、ゲルマドンには、われわれほどの頭をもった生物がいるからミサイルをとめろというのか」

スコラ氏は、やや小さくなりながら、

「ええ、そうです。一匹をつかまえてしらべてみたくですからまちがいありません」

長官は考えこんだ。しかし、

「しかし、とめろという命令はうけとらんし、そのうえ、もうこの速さではとめられん」

彼はそのまま自室へひっこんだ。

(あの二本足のモンスターにはかわいそうだが、オレたちが生きるためにはしかたないのだ。それに、こんな醜いモンスターだ。この世から抹殺したほうがいいのだ)

彼は、そう思って、自分でなっとくした。しかし、何年か後、そう思った自分自身がこの世からいなくなるであらう。

ともあれ、彼は、二本の角をびくびく動かし、四本の腕をくみ、四つの目をかわりばんこにまばたきしながら、大きな口をあけて、白いキバをのぞかせ、わらうのであった……。

自分たちでは地球とよんでいた星、ゲルマドンの生物が打ち上げたミサイルは、自分の星がなくなってもかわらず、ある四本の腕を持つ生物の星へと一直線に進んでいるのも、また、事実ではあった。

* * *

ぼくは、のびをして映画館の外へ出た。

(ちっともおもしろくない映画だったなあ)と思った。

* * *

広い宇宙の、ほんのまばたきの間のできごとでした
…ハイ。

(オシマイ)

一九七二年夏

(「個人誌エム」初出)

中学二年ころに書いた。当時自分で付けたコメントによるとこの作を「処女作」と呼んでいる。高校に入ってから、後に脚本家になる平柳益実氏に読んでいただいたところ、結末でもうひとひねりして映画館の上にUFOを飛ばした方が良いとアドバイスをいただいた。

大政策

(ある少年の記録)

(そう遠くない未来のある国)

「さあ、授業をはじめます」

ミス・ケイが物理の授業をはじめた。しかしぼくは、物理より重大なことがあるんだ：

* * *

おかしいと気づきはじめてのは、実は、ぼくだってほんの数日前のことだ。流行？ この現象をそんなことばでかたづけたいのだろうか!!

毎朝、ぼくはピッタリ六時におきる。なぜならテレビ番組がはじまるからなのだ。しかし、ほんとうはぼ

くだけじゃなく、テレビ局の人と政治家以外の人はすべてピッタリ六時に起きるのだ。

まず、テレビのスイッチを入れると、まずニュース、つづいて天気予報、そしてモーニングショー……。なぜ見るのかって、そりゃみんな見てるし、見てないと話があわなくなっちゃうからにきまってるじゃないか！それが終わるとすぐ学校へ、みなほとんど同時に学校につく。

学校では、まず朝礼、毎日同じようなことを校長が言う。みんなが教室に入るとニュースの発表。でも、そのニュースはみんながもう知っているんだ。なにしろみんな朝のテレビを見てるからね。授業がはじまる。この授業のやり方だけは、昔とたいして変わっていないようだ。

学校は三時半ピッタリに終り、ぼくが家につくのが三時四十五分そしてテレビの歌謡曲をみて、ファッジョンについて……(なにしろぼくはおしゃれであるから)……のテレビを見る。つづいてなんとなく歌謡曲の番組、クイズ、マンガ、そして歌謡曲を聞きながらねる……。

一見文化の進んだ生活のようだが実は、おかしいことだらけだ。ぼくは生まれてからずっと家では読書をしていない。テレビを見るのがいそがしくてそんなヒマがないのだ。

歌謡曲は、カッキリ一ヶ月の間一つの歌に異常な人気。そのためテレビでは、その歌ばかりやってみんなもその歌をうたう。しかし、とつぜんその歌は、ブラウン管から姿を消す。

ファッション番組だって、見ているのは、ぼくだけじゃなくてみんな見ているのだ。そして今まで気がつかなかったけれど、そこで紹介された服を一せいに着る。

マンガやコントも同じネタを何回もくりかえしているだけ。

おかしい！ だれもそれを不自然に思っていない。すべてが同じにすべてが一色にぬりつぶされているのに新しいものをつくらうなんてこと考えてもいない。狂ってる。どこかが狂ってるんだ！

(これではテレビに支配されているようじゃないか!?)

こんなことに気づきはじめてのは、数日前だったが二日前に真そうがはっきりした。みんながみているテレビ番組の視聴率九九%〜一〇〇%なのだ。そしてまた、それはほとんど、いやすべて政府提供だ。これは恐ろしいことだ。これこそ政府の政策、昔一部の人が言った「一億総白痴化政策」だったのだ。

今我が国は、政治家のほんの気まぐれから戦争に入ろうとしている。しかし、国民のだれ一人それに反対しようとはしない。なぜか？ それはみんながばかだから、いや、ばかにされてしまったからなのだ。そりゃあ政治家は、国民がばかなら政治はしやすい。いつの時代でも政治家は人民をばかにしようとしていたではないか！ ぼくは、この政策をこわそうとしたんだが、ドジをふんでしまったんだ。きのう、うっかりミス・ケイにそのことを話してしまったのだ。ミス・ケイは政治家の手先だったのだ。彼女がすぐに秘密警察に電話しているのを、立ち聞きしたのだ。

アッ、足音だ。教室へ入ってくる。…白い服を着

ているが、たぶんあれが秘密警察だ。ウツ、ミス・ケイとなにか話してる。……こっちにくる。もうだめだ。せっかくここまで糸をたぐったのに！

* * *

精神病院の男たちが、テレ・ビジョンをつれて出ていくとミス・ケイはつかれたようにホッとためいきをついた。

「かわいそうに。勉強はできるんだけど、いやにSFにこっちやって……。ついに気が狂っちゃうなんてね。こんなことがあるなんて、この国はどこか狂ってるわ……。」

ミス・ケイはなにごとでもなかったかのように授業をつづけた。生徒たちも別になんとも思っていなかった。その日はとても静かな日だった。ただどこかの家でテレビの音が聞こえている以外は……

一九七二年十二月二十七日

("Ing" No.1 初出)

「¹ing²」は、中学生時代、弟と作った手書きのマンガ雑誌だった。わら半紙に墨汁でマンガを書いたり、文章を書いたりして、マジックと色鉛筆で書いた画用紙の表紙をつけたものだった。

トントベイ

朝。ぼくは、バス停から高校へ向かう長い一本道を歩いている。ぼくの目の前から、遠くの高台の上にくすんでみえる高校の校舎まで、ずっとつめえりの黒い流れがつづいている。ふり返ってみると、ぼくの後ろにもずっと黒い流れができていく。これだけの人間が、あの小さな校舎の中に入ってしまうのだ。蟻の列、いや、これはもっと生気のないもの。

いけない。こんなことを考えてはいられない。今日はテストがあるのだ。英語の単語を、ちゃんと憶えているだろうか。口の中で単語を繰り返し、つづりを空中に書いてみよう……。だめだ。歩きながらでは神経が集中できない。はやく学校について、机の上で書かなければ。

鞆が重たいなあ。なんでこんなに鞆が重たいのだ。手のひらが痛い。うでがだるい。手を持ちかえてみて

もだめだ。暑くもないのにじっとり汗が出てくる。あと、どのくらい歩けばいいのだろうか。

無生物的な流れ、テスト、英単語、教師、クラスメイト、鉛のような鞆。

ぼくは、いったい今何をしているのだろうか。高校へ毎日通うことが、ぼくの人生なのだろうか。宇宙の時間と大きさの中でくらししているというのに、ぼくの生活は、なんてせせこましいのだろうか。宇宙の大きさをからみれば、学校なんて、全く意味のないことじゃないか。ぼくは、今まで、こんなくだらぬことに、固執していたのか。自分のしていることが、ものすごくばからしく思えてくる。

「やめた」

ぼくは、立ち止まって、鞆を地面に放り出す。

そのとたん、世界は変わった。なんて自由なんだろう。ふと見ると、つめえりたちが、ぼくを追いこして、黙々と歩いていく。この流れは、今度は本当に、生きていく自分とは全く違った、無機物であると確信できる。

ぼくは、黒い流れの中からぬけ出し、道路を横切つて反対側に立つ。こうすると、もっと客観的に、流れを「観察」できる。しかし、もう「観察」する気にもなれない。

さて、これからどうしようか。とにかく流れと反対の方向に歩いてみる。と、小型のオートバイが一台止めてある。ためしに、またがってみる。エンジンをふかしてみる。うん、いい調子だ。とうとう、走り出してしまふ。すぐ、バス通りにぶつかる。なんとなく右へまがる。

トントベイ
ぼくは、どこへ行くつもりだったのだろう。気分はとても良い。ふと「トントベイ」という言葉をおもいつく。おもしろいひびきだ。でも「トントベイ」ってなんだ？ 国の名前かもしれない。国の名前にしよう。そうだ、「トントベイ」は、太陽と自由の国なのだ。ぼくは、「トントベイ」に行く途中なのだ。でも、どこにあるのだろう。はっきりとはわからない。ただなんとなく、今走っている道が、まっすぐ「トントベイ」につづいているような気がする。たまには、自分の第

六感を信じてもいい。

しばらく行くと、丁字路になって、道路は終ってしまった。ぼくは、止まって、むこうから歩いてくる中年の男に聞いてみることにする。

「あの、申し訳ございませんが、『トントベイ』へは、どちらの道を行ったら、よろしいのでございましょうか。どうかお教え下さい」

「なんですって。どこ？ ここはKというところだけです。どこへ行くって？」

男はとぼけているのだろうか？

「ト・ン・ト・ベ・イ」

ぼくは、はっきり発音する。しかし、男は不快そうな顔になり、行ってしまふ。ぼくには、男の行動が理解できない。

しかたがない。ぼくは、左の方へ行くことに決心する。

潮の香りがしはじめる。海が近いのだろう。そういうえば、「トントベイ」は海のそばにあったのだ、と、とつぜん思い出す。きたならしい家並をつきぬけると、

砂浜が現れる。どの辺にあるのだろうか。ぼくは止って、そばにいた中年の女に聞いてみる。

「『トントベイ』は、どの辺にあるのか、お教え願えないでしょうか」

聞いたことがないと、女は言った。急に、ぼくは不安になる。ひよっとしたら、通り過ぎてしまったのだろうか。それとも、ぼくの記憶違いだったのだろうか。ぼくは狼狽する。

しかし、ぼくは、自分の失敗に気づく。「トントベイ」は、海のそばではないのだ。「トントベイ」は、山にあったのかもしれない。そうだ、山にあるのだ。ぼくは、山にむかって走る。

どのくらい走ったか。ぼくは、両側に木が繁る砂利道を走っている。「トントベイ」は近づいた。感覚的にそれがわかる。しかし急に、目の前に、白と黒に塗りわけた車が見える。灰色の服を着た男たちが、ぼくを止める。「メンキョ」とか「ジューショ」とか、その男は言うのだが、ぼくには、彼の言っていることが理解できない。

「ぼくには、あなたのおっしゃっていることが、わかりません。」と、ぼくが言うと、灰色の男たちは、わけのわからない言葉でどなりながら、ぼくをとりおさえにかかると。ぼくは抵抗する。

なんとか、逃げなければ。このままでは、自由をうばわれてしまう。えい。くそ。やめろ。ぼくが、どんな悪いことをしたというのだ。ぼくは、「トントベイ」に行かなければならないのだ。しかし、むこうは、容赦なくぼくにかかってくる。いくら抵抗してもきりがない。しだいにぼくは疲れてくる。何発か殴られて、とうとう体の自由をうばわれてしまう。

「なぜだ」

ぼくは叫ぶ。涙が、とめどもなく流れる。くやしさと、悲しさと、怒りと、その他いろいろな感情が、いりまじるが、涙声で叫ぶことしかできない。

「なぜだ！」

ぼくのトントベイは、すぐそこにあるのに。

(一九七七年六月)

落書き個人誌「エム」第十号(1997.10.1)初出

「エム」は中学から高校にかけて出していた
わら半紙袋とじのガリ版の個人誌。第十号は大
学生になって最初の号になる予定だったが頓
挫。この作品は原紙(ガリ版印刷の版)を切っ
たまま二十年間放置されていた。

四十歳近くになってから、自由に創作ができ
る環境とパソコンというツールが使えるように
なり、「エム」の再開を目論んでA5版プリン
ター印刷の復刊号として第十号を刊行した。こ
の作品はその際に原紙を直接見ながら入力し
た。なお、残念ながら「エム」は復刊号が最終
号になってしまった。



高校の美術の授業で校内を描いた油絵

レミング

テーブルの上の薬瓶が、意外に大きな音をたてて床に落ちた。白い錠剤が数粒ころがって、ベッドの下にかくれた。薄暗いスタンドランプが照らしだしているのは、普通の男子高校生の部屋だった。たった一つ異質なものの、ベッドの中の死体を除いては。

K市は、首都圏のベッドタウンとして、最近急速に人口が増加していた。K市の中央部には、南北に数十メートルの落差があつて、K市を数万年前には海であつた南部の沖積平野と、陸であつた北部の洪積台地とに分けていた。落差のあるあたりには、まだつぶされていけない田畑があり、ほんの一部ではあつたが台地の上には古代原生林を思わせるうっそうとした林が残っていた。しかし、この場所も、今は人間の手によつて丘が少しずつ削られ、木が倒されて住宅が建ち並

び始めていた。そのスピードは年々速くなり、はるか太古に海をはじめ多くの動物や森林など、大いなる自然が支配者であつたことや、その自然の力と闘ひ続けた古代人たちが存在していた面影を、原色で塗りたくつた家々の下に埋めていきつあつた。

県立K高校は、そんな新興住宅地を見降す台地の突端に建つていた。そのくすんだ色の鉄筋校舎は、すぐ下に最近建てられた小学校の校舎の明るい色と対照的だった。K高は進学校の割には浪人生を多くだすようになつたが、歴史の古い男子校で、生徒たちは学校にはほとんど関心を持っていない、そんな高校だった。

(ズボンにハネが上がるかな)

その朝は、埃っぽい雨が降つていた。灰色の雲は重苦しく、五月というのに膚寒かった。K高の近くには鉄道が敷かれていなかったので、通学する生徒も教師もたいがいバスか自転車を利用していった。しかも、そのバス停からも八百メートル近く歩き、丘を上らねばならなかった。普段でも面倒なのに、こんな雨で水井

は憂うつだった。

(ズボンは洗わなくちゃならないだろうか)

新任教師には、クリーニングへ出す金も惜しかった。彼は、学校へと黙々と進む傘と学生服の黒い集団の中にいた。

生徒とともに坂をのぼり、校舎の社会科担当教員の準備室に入ると室内は、いつもより重苦しく、陰湿な感じがした。それは、このうっとうしい雨のせいばかりではないように見えた。自分の机に座ると、すでに来ていた岩田という中年の教師が話しかけてきた。

「二―Cの柴っていう生徒が、昨日の晩自殺したんだよ」

「C組っていうと、石山先生のクラスじゃないですか」
水井は驚いて少し声高に言った。

石山は、やはり社会科の教師で初老の無口で繊細そうな人だった。岩田は、今警察が来ていて校長室にいること、石山は早朝から柴の家へ行っていること、柴は睡眠薬自殺で原因は受験ノイローゼらしいという

ことなどを話した。

「そういえば、君はあのクラス持ってたっけね」

水井はC組では倫理社会の授業をしていた。柴という生徒は、成績がよいわけでも、悪いわけでもなく、授業中は消極的でめだたず、特に印象深い生徒ではなかった。「影の薄い生徒」だったのである。それでも、水井は自分が「倫理」を教えている生徒が自殺してしまったことが、自分のせいであるような気がしてしかたなかった。ひょっとしたら、柴はそれとなく自分に助けを求めていたことがあったのかもしれない。このショックは当分消えそうになかった。

「…現代の高校生は、この表を見てもわかるとおり生徒会活動やクラブ活動に興味を失っている」

その日、水井の最後の授業は二―Bの「倫社」だった。一般的な問題をとり上げる時期なので、最近の研究誌に載っていた高校生の意識調査を教材として話していた。いまだに窓の外は灰色で雨が降り続いていて。生徒は、おとなしくはしていたが、皆眠そ

うな顔をしていた。

「三無主義なんていう言葉を聞いたことがあるだろう」

水井は短気な性格ではなかった。しかし、自分を「教師」として見ていないのか、いつもばかにしたような生徒の自分への対応が重なってくると、そんな自分がなさげなく思えて、怒鳴りたくなることもあった。「君たちの中にもそういう人がいるんじゃないのかい」

生徒の反応は無い。

(灰色だ。畜生、みんな灰色だ)

水井は、一人の生徒の名前を呼んだ。

「君はどうだ。何かクラブに入ってるか」

やる気のなさそうな顔をした一人の生徒が立ち上がった。

「クラブに入っている？」

その生徒は入っていないと答えた。

「なぜ。何か興味を持っていないものはないのか？」

生徒は黙ったまま。

(なんで、教師が生徒のごきげんをとらなきゃならぬんだ)

「かったるいんだよ」

生徒はやっとそう言った。

「かったるいって、何か自分のやりたい事はないの」「そんなの、どうでもいいじゃねえか。関係ないだろ」水井が口を開こうとした時、授業終了のチャイムがなった。

学校が終わって水井がバス停まで歩いてくると、学生服姿のK高生でそこはあふれかえっていた。生徒の一人に聞くと、どこかで事故があつてバスがこないのだという。タクシーもこないようだ。まだ雨が降っていたので少しもどったところにある喫茶店に入った。狭い店で、雨宿りの高校生でいっぱいだった。しかたなく、カウンターに掛けてコーヒーを注文した。

ふと気づくと、隣の席に座っていたのはC組の松本だった。目顔であつさつしてきた。

「こんな日じゃ喫茶店に高校生がいても叱れないよなあ」

と水井が笑いかけると、松本は真面目な顔で言っ

た。

「人間なんて、簡単に死んじまうものですね。先生」

「そうだな」

松本という生徒ともあまり話をしたことがなかった
ので、この意外な話題に水井は少し驚いた。しかし、
考えてみれば松本や柴に限らず生徒と人生とか死と
かそんな話をしたことは一度もなかった。

「おれが柴を殺してしまったのかもしれないなんて思
うんですよ。一番近い友人だったんだから、やつと心
の中を打ちあけるような話を一度でもしてたらなあっ
て」

「悩み事とか、そんな話は全然しなかったのかい」

「しませんでしたねえ」

「何か、最近、彼が変わったことなんか気づかなか
った？」

「近ごろはよく学校の左手にある丘に上って景色を
ながめてましたよ。溜息をついてね、疲れた、疲れた
って言ってました」

「そりゃあ、まるで中年の台詞だ」

「新学期が始まってからずっと疲れたが口ぐせになっ
てましたね。あいつ、なんだかやる気が無くなってた
みたいで、そんな姿をみるとこっちまでやる気がし
なくなっちゃうんですよ」

「何がそんなに疲れるんだ」

「さあ、自分にもよく解らなかつたんじゃないですか。
そういえば、おれたちはレミングなのかもしれない
って言ったことがありますよ」

個体数が増えすぎると集団自殺する北欧のねずみ
の話は、水井も聞いたことがあった。

コーヒーカップの中に目を移して、松本はボソリと
言った。

「明日雨が上がったら丘に上ってみようかと思ってい
るんです」

翌日の日曜は雨が上がって、水井は柴がよく来てい
たという丘にやってきた。松本の姿は見えなかった。

丘の南の縁に立つと、後ろには丘にぼちぼち建ちは
じめた数軒の家と畑、そしてやや右側にK高の校舎が

見え、前は家々の屋根の原色と田の緑、アスファルト道路の灰色がそれぞれ少しも妥協することなく混然としていた。下から見上げている時よりもだいぶ高いような気がした。

今家の建っているあたりは昔は海だったのだな、とぼんやり考えたとなんに頭が痛くなり目の前が暗くなった。鼻の奥で金臭いにおいがした。

ふと気づくと水井は海の中にいた。しかし、体にはそんな感じは全くしなかった。視覚だけがあるようだった。

プランクトンが現れた。それは、しだいに数を増しているようだった。多くのプランクトンが死んで海底へ落ちて行き、それ以上のプランクトンが新たに生まれているのだ。なぜ、自分にそれが見えるのか、自分がどうなってしまったのか、水井には解らなかった。

遠くから影が近づいてきた。その影は、しだいに大きくなって魚であることがわかってきた。魚はあつという間にプランクトンを飲みこんだ。この大食漢は、

あたりをゆうゆうと泳ぎながら、どん欲に無数の生命を飲みこんでいった。

突然、衝撃がおこった。今まで泳いでいた魚がもっと大きな魚にのみこまれたのだった。そのうちに、この魚も別の魚に襲われた。こうして、次から次へと食ったものは食われていくのだった。

いつの間にか、水井はあの丘の上から下を見おろしているのに気づいた。しかし、下に見えるのは住宅地ではなく青い海だった。遠くに続く水平線からいつまでも止むことなく永遠にうちよせる波。海は生きていた。何億もの生命を飲み込んで生きている生命だった。水井はその生命力の大きさに息苦しささえ感じた。

その時、浜辺にいくつかの影が現れた。その影は、魚をとって食い、鳥や獣を殺していた。人間だった。彼らは、大いなる自然そのものと闘い始めたのだ。多くの時間が流れ多くの人間が死んでいき、その何万、何億倍もの生命が殺されていった。

しかし、しだいに、海もその色を変えはじめていた。大いなる自然の生命、海が死にはじめたのだ。あたか

も人間は、自分たちの母親を殺し、その束縛から抜けようとしているかのようだった。人間の黒い勝利。

その時自然は怒った。空は灰色に曇り、水平線が消え、海は果てしなく空と交わった。断えることのない波、風、そして雨。水井は自然の怒りの言葉を聞いたような気がした。

人間よ、おまえは何のためにこれだけの生命を犠牲にしてきたのだ。何をしようとしているのだ。生物であることを超えようとしているのか。これだけの生命の犠牲の上に立って自然を裏切ろうとしているのか。しかし、人間よ。おまえは自然からのがれることはできない。おまえは力を持ち過ぎた。自然の節理はおまえを消滅させる。おまえの中にある自然がおまえを滅ぼす。おまえには、おまえが今存在するために死んでいった地球の生命たちの呪いが、種の記憶として蓄積していくのだ。おまえの生命力は、その重みにつぶされる。それが裏切りの代価なのだ…。

水井の前には、いつもの汚らしい屋根が並んでいた。

雨はもう上がっていたが、曇り空の下を、夕方の濁った風が吹いていた。疲労感がした。重たかった。つぶれてしまいそうだと思った。尻のポケットから、くしゃくしゃになったタバコを出して口にくわえた。マツチは、見つからなかった。

「先生」

と後ろから声が出た。松本だった。彼の顔も疲れているように見えた。

「何か：見ませんでしたか」

ゆっくりと水井は首を横にふった。

「ぼくには、何か解ったような気がするんですが」

水井は、今度は少し激しく首をふった。

「疲れた」

水井はつぶやいた。知らないうちに歳をとってしまったような気がした。そして、やって来た道をゆっくりもどりはじめていた。

—了—

一九七七年十月

大正大学文芸部「天壤」創刊号(1977.12.1)初出

高校では文芸部に入りたいと思っていたのだが、ぼくが入学した高校に文芸部はなかった。大学に行ったら今度こそ文芸部に入ろうと思っていたのに、大学にも文芸部が無かった。

そこに文芸部新設の同志募集の呼びかけが貼り出され、ぼくは一も二もなく集合場所に赴いた。ぼくが思っていたのとはかなり違う活動になったが、ともかくもガリ版刷りの部誌が発行されることになり、そこに高校時代から構想していた小説を載せることができた。評価はさほど良くなかった。

最後の予言者

二個の若き宇宙生命体が、地球のそばを通りかかった。

“少しこの辺で遊んでいこうよ”

“そうだな。この惑星の生物の観察でもしていかか”

“君はすぐにそうやって真面目な話になるからいやだよ”

そう言いながらも、片方ははやくも一人の地球人の思考波をつかまえていた。彼らのやり方は生物の肉体から靈魂だけを抜き取って、直接自分たちと意思疎通させるのだ。地球人の方は寝ている間に夢を見ているような感じしか残らない。

“おまえは地球の生物か”

“あなたは？ おお、あなたは神様ですね”

“カミって何だ？”

「私のような一介の牧師のもとへ神がおいで下さると

は……」

“深層記憶をみてみると、カミというのは宇宙創造者のことのようなだね”

“地球の生き物はどんなもんだね？”

「私もは、正しく神との契約をはたしております。キリスト教は今や世界中に広がって、全人類が神の戒律を守っております。長いこと神を信ぜぬ多くの民族がありました。我が国が勝利をおさめ、全地球の支配を確立してからは真の平和がやってまいりました」

“おいちょっとまってよ。なあんかこう、誤解してるみたいだよ”

“おれたちや、創造主なんかじゃないんだぜ”

「しかし、そのお姿は、その神々しさは神としか見えません」

“契約っていうと、そのカミと何か取り引きがあったのかい”

「神は戒律を守るかわりに、人々に永遠の幸福を保証しました」

”よくそんなことを未開種族にふきこむやつがいるんだ”

”いつごろのことだ”

”およそ三千年二百年前のことです”

”すると、ぼくたちの尺度でいうと、去年の夏ごろかな。そういえば君は去年の夏休みにもこの辺へ遊びに来たんじゃなかった?”

”そういえば、そんな気もするなあ。うん。どこかの星でおれ、倫理学初歩みたいなこと言ったかもしれない”

”やはりあなたが神で?”

”おいすっかり君のこと信じきっちゃってるよ。かわいそうに”

”弱ったなあ。冗談だったんだがなあ。まあ、ちょっとした冗談だったんだ。もう忘れてくれてもいいよ”

”じ、じょうだんですって! な、なんなんたることを! あなたはなんということを!!”

”まあそう興奮するな”

”そういえばさっき少し気になることを言ってたね。

勝利とか支配とか。そんなに彼のふきこんだホラはこの星に影響を与えたのかい”

”こりゃあ大変だ。この生物の深層記憶をみてみたら、おれのでまかせが、ひどい殺戮を行わせて、完全に文明を変えちまってる”

”まづいなあ。宇宙旅行者法第八条B違反だ”

”発達段階C級以下の生物への文化的干渉禁止の項か”

突然、牧師と名のつた地球人が泣きだした。

「わたしが、わたしたちが、人類が今まで信じてきたものは何だったのでしょうか…。なんとということだ」

”あのかなあ。泣きたいのはこっちの方なんだよな。いっそのこと証拠隠しに星ごと消しちゃおうか”

”こんな事になる予感がしたから、君とはレブの星域は旅行したくなかったんだ”

”ここはドロクル星域だろ”

”いや、ここはレブだよ”

”なに。本当か。ああ助かったぞ”

”どうした?”

” おれが去年旅行したのはドロクル星域なんだ ”
” なんだ。それじゃ違うのか ”
” 聞いたとおりだ。おれはおまえのカミじゃないんだ
よ ”
「なんとということだ……。なんとという……」
翌日、目ざめたこの牧師は、神など全く信じない
という宗教をおこした。

一九七八年七月一日付
(未発表作品)



ファボも地球に帰る

ファボは居住地区の西にある「岩山」と呼ばれている丘の崖っぷちに座っていた。太陽リジルケントα(＊)は、今まさに地平線に沈もうとしていた。その光景は、生々しく故郷を思わせた。この赤くなった星にとっては、私たちの歴史など、ほんの一瞬にしかすぎないに違いない。自然は、まるで永遠であるかのごとく、静かに、そして巨大に存在しているだけだった。ファボには、それが悔しかったのだろうか。

夕陽の中にかびあがったファボの背中影は、ひどく小さく見えた。しかし、つかえらねばならない。私はやつのことで声を出した。

「なんであんなことをしたんだ」

ファボは答えない。

「すぐに救援隊が来るぞうだ」

今度は、少しの間があつてファボが言った。

「三十時間か……。地球から、ここまで。その太陽の光がむこうまでとどくんだって四年と三分の一かかるんだぜ」

ふりかえったファボの、ほおのこけた目ばかり光るその顔は、今にも泣きそうにゆがんでいた。

「昔は大変だったじゃないか。俺たちはさ……」

昔、三十年前——つまり私たちの感覚の時間でだが——私たちは地球を出発した。初の恒星間植民としてリジルケントへと。しかし、私たちに成功の可能性はほとんどなかったのだろう。この植民は、多すぎる人口をかかえ倒れる寸前の地球政府が、半ば間引き的に失業者たちを宇宙へ捨てたという様なもので、数百年前に打ち上げられた無人のリジルケント調査船が発する微弱な電波だけがたよりの旅だった。

移民は、一般公募によって集められた。望みの薄い冒険ではあったが、地球に残ってただ生かされているだけの一生を終わるよりはと、多くの希望者が殺到した。私もその一人だった。

地球をはなれる日のスペースポート地下のターミナルを、今でもはっきりおぼえている。十代後半の私は、そこで家族と別れ、全く違った人生へ一歩を踏み出したのだった。真白に照らされた広いターミナル。別れと涙と激励の洪水。人間が四・三光年かなたのリジルケントへ行くためには、宇宙船の中でコールドドリープ（人口冬眠）し、宇宙船はその間に目的地にむけて二百年の時間をかけて飛ばねばならなかった。もちろん帰りの分の燃料などは積んでいないし、仮にあつたとしても、再び帰ってくるのには、さらに二百年かかってしまう。私たちは、あの時家族とはもちろんだが、地球そのものに永遠の別れをつげたのだった。

強い決心をしたはずの私も、さすがに母親と最後の言葉を交わした時は、意志がぐらついた。家族にかくれて隊員に応募し、第一期移民先発警備隊員に選ばれて、合宿訓練が始まってから、はじめて事の次第を手紙で知らせた私を母はひきとめようとしていた。母の顔を見ると、私はこのまま家へ戻ってしまいそうになった。しかし、それは、もはやできないことだった。

地球に残ったところで、ロボットを使うよりも安あがりだというだけで何の意味もないような仕事を一生やらされていくという考えは、若い私には耐えがたかつたし、私がこの移住に参加することによって家族は幾許かの補償金を受けてしまっている。それに、なにより今やめるといふことは、この国家最大の事業であるリジルケント植民計画を妨害したとみなされ、反逆者として処罰されることを意味していた。私は集合の合図で母をふりきり、隊列に加わった。

スペースポートから連絡船に乗り、一旦宇宙ステーションに着き、そこで植民船に乗るまで数日間滞在した。ファボと初めて会ったのはその時だった。皆が展望室であかず一日地球をながめたり、家族あてにビデオテープを吹き込んだりしているのに、私と同室になったファボはずっとベッドに寝転んで時を過ごしていた。私はやはり同室の訓練所で友人になった男

(*)リジルケントは太陽に最も近い恒星。αケンタウリ。

と話をしたり、手紙を書いたりして過ごしていたが、たまに二人つきりになるとファボに話しかけることもあった。

「君は、何で行く気になったんだ」

と私が聞くと、彼はだるそうに、おまえには関係ないだろうとつぶやく。それで一度は黙ってしまうのだが、話かけずにいられなくなって自分の身の上を話したりする。私は寂しかったのだ。しかし、ファボは他人のことなんか聞きたくないと叫んで、壁の方に向いてしまうのだった。そんな訳でファボは、みんなから敬遠されていた。私も変わり者だと思ったきりで、それ以上話をしようとも思わなかった。

その次にファボと話をしたのは、私たちの乗った一号機が太陽圏をはなれ、いよいよ数時間後にコールドリープに入るという時だった。私はファボと二人で倉庫の一つの点検作業中だった。十メートル四方のかざりけのない部屋の中で私はつい独言を言った。

「もういっぺん、地球を見たいな」

すると、すかさずファボは皮肉な声で言った。

「ここからながめたって、他の星と区別はつかないぜ。

いやあ、もう見えないかもしれねえな。里心なんかおこしたって、戻れねえよ」

チラリと家族や友人の顔がうかんだ。

「君は地球が恋しくくないのか」

「おまえみたいに、いつまでも子供じゃない」

「もう戻れないんだなあ」

「そんなことあ、わかっていたことじゃねえか。それを承知で志願したんだらう」

「それはそうだけど」

「泣く位ならはじめから来るな。おまえなんかとつきあっちゃいられねえや」

ファボは、人をばかにした口ぶりで倉庫を出ていった。コールドリープ準備の黄色いランプが点滅しはじめた。

人々が眠っている間に、宇宙船は二百年間、暗く無音の世界をひたすら飛び続けた。そして、ある日、私たちは目ざめたのだった。

なれない畑仕事を終えて、仮組立のままの宿舎へもどってくると、もうどうしようもなくつかれてしまふ。それでいて、暗い寝室の中では目がさえてなかなか寝つくことができない。他の人たちはもう寝入っているらしく、いびきの音が聞こえる。私も彼らのような強い神経があればと思ったが、しかたがない。少し外へ出てみることにした。

開けはなしにしてあるエアロックを通りぬけて資材置場へ向かった。資材置場とはいっても、ただ、使いものにならない中途半端な部品を放り出している広場にすぎなかったが、そこに行くとき空がよく見えるのだった。半球型の仮宿舎がいくつも白くぼんやりとみえた。照明はエネルギーの節約のため極端に制限されていたので明かりのついていない宿舎はなかった。

私たちがリジルクセントα星の第二衛星に着陸して三年が経っていた。無人探査船の報告のようにほとんど地球と変わらない大気組成の惑星だった。しかし、到着したのは私たちの船だけだった。通信機の自動記

録装置によると、他の船はゴールドリプ直前になにか事故のため地球へ引きかえしたらしかった。私たちは広い宇宙の中でたった二百人の男女だけで取り残されてしまったのだ。元々私たちの船には、私のような先発警備隊員と、二十組の技術者夫婦しか乗っていないかった。とにかく当面は、予定通り後続隊の受け入れにかりはしたが、結局、何もやってこなかった。

私たちは、本格的に居住地を作ることでもできず、新しいエネルギーも開発できず、専門知識も機材も持たずに乏しい資料にたよって耕作を始めなければならなかった。もちろんうまくいくはずもなかった。比較的悪環境に強いだろうと思われた作物だったが、いざ作ってみると、いくら地球に似ているとはいっても土壌が違うらしく、やっつとので守り育てた数種が残っただけだった。何人か生まれた子供たちはもちろん、大人の隊員たちも次々と倒れていった。誰も、私たちの未来を予測できる者はなかった。

空はよく晴れていた。置かれてあった箱の一つに腰かけて空をながめた。星空は、ほとんど地球にいた時

と変わらなかった。私たちにとってあまりにも長い距離だった四・三光年も、宇宙全体から見ればまったくとるに足らないものでしかない。私はいつものように、無意識に太陽を探していた。ゆがんだアンドロメダ座と、ペルセウス座の間あたりに、心なしか暖かそうに光る星。太陽だ。

「おかあさん、今どうしてるんだ」

そうつぶやいたとたん、大きな笑い声が聞こえた。

私はビクツと体をふるわせた。誰かがいたのだ。

「また、かあちゃんか！ いいかげんにしてくれよ」

それはファボの声だった。彼はがらくたの山のむこうから姿を現した。せっかく一人で地球をしのんでいった私は、懐かしい気分をこわされて少しいらだった。

「今ごろどうしているだろうって？ いったい、いつの今のことを言ってるんだ。二百年前の今のことかい。それとも俺たちが出てきた二百年後の地球のことかい。それなら教えてやろう。今ごろあなあ、皆んな死んじまってんだぞ。地球で知ってたやつあ皆んな。おれたちが眠りこけてる間によ」

私は自然に手が上がってくるのを感じた。

「俺たちあなあ、なんでもないんだ。地球人じゃあねえ。プロクシマケンタウリ人でもねえ。ここに捨てられてる機械みてえにな、親機がとどかなきゃガラクタにすぎない端末機みてえなものだ。え、見てみるよ。地球の最高技術の粋なんだぜ。どれもこれも。それが、メインコンピュータが着かねえってだけで使い物にならなくなっちゃってたんだ。地球にいればこそ俺たちは人間だ。だがな、ここじゃ人間でもなんでもねえ。いいか、もうなにもかもなくなっちゃったんだ。歴史も、文明も、自然も、そして俺たち自身もさ」

ずっとファボは笑いながらしゃべっていた。私は、彼に飛びかかった。

「ばかやろう。なんで、四光年、二百年はなれたからって、ぼくたちが地球人でなくなるんだ」

「目をさませ、ばか」

ファボのパンチがほおにあたった。私は、うしろにひっくりかえった。

しかし、すぐに私はファボにくらいつき、組みふせ

ながら殴った。むしように悲しくて、涙が流れた。そして、ファボは、ファボも泣いていた。やがて、リジルケントの二つ目と三つ目の太陽が上がってきた。それでも二人は泣き続けていた。

それからの三十年間は苦しかった。エネルギーは底をつき、文明は全くの原始時代へもどってしまった。死者も多かったし、子供も育たなかった。それでも、私たちは生きていた。目的は、ただ明日生きるために今日生きる。それだけだった。私たちは、自分たちも驚くほどしぶとく生きのびた。隊長を中心とした移民隊の秩序はいつの間になくなり、代わって生きるための新しい秩序が生まれた。いったい何が私たちを、ここまで生きぬかせたのだろうか。

そんなある日、居住区の上空に、一台のきゃしゃな宇宙船があらわれたのだった。

宇宙船は地球の救援隊だった。私たちが出発してから地球では二百三十年が経過していた。ちょうど私たちの宇宙船がコールドリープに入った直後に地球

に革命が起こったのだ。恒星間植民センターを掌握した革命勢力はすぐに他の各船をよび帰したのだが、私たちの船を含めて数機は飛び続けてしまった。その後、地球の再建がはじまった。

「決して、皆さんを忘れていたわけではなかったのですが――と地球から来た薄い宇宙服の男は言った。「当時は、あなたがたを連れ戻すだけの力がなかったそうです。」

「私たちはやっと超光速船を作る事に成功したので、さっそく、前政府の犠牲者であるあなたがたを救援にやって来たのです」

彼らは、リジルケントと太陽の間を光よりも速く、たった三十時間で移動することができると言った。

彼らは、イメージを直接、人の頭に再生することができる技術を開発していた。それによって私たちは、現在の地球とはどういものであるか、まのあたりにすることができた。それは、白い清潔な一つの巨大な建造物であった。地表すべてをおおいつくしているのは、建物なのか、それとも舗装された地面なのか、そこに

穴が開いたり、とび出したりしている塔、豊かな生活、人間がこれほどの事をしようとは、私には信じられなかった。私たちは、すでに五十人前後に減っていたが、すぐに翌日帰ることを決定した。

その夜、地球の宇宙船が何者かによって爆破された。地球の乗員が私たちのささやかな歓迎パーティーのために宇宙船を留守にしている間だった。点呼をかけると、ファボだけがいなかった。幸い超星間無線というやつは無事で、地球へ連絡を取るとすぐに迎えの船が来ることになった。犯人についても、こういう異常な状態に長くいた人間のおこした事件だということ、特に罰しないでくれるという話だった。私たちは、一日中ファボを探したがみつからなかった。おそらく、居住区の周囲に無数にある洞窟のどれかにでもかくれているのだろう。夕暮れ時に最も地球を思わせる場所、ファボがよく行っていた場所だった。

「さあ、帰ろう。別にあなたをどうしようってわけじゃないんだ。地球へ、帰るんだ」

「おめえ、うれしいのか？ 地球へ帰れて。本当にうれしいのか！」

ファボは泣きそうだった。私は何も言えない。

「あれが地球か。あの真白い、あんなものが地球なのか。いいか、あそこは、俺たちの地球じゃない。俺たちが夢にみた故郷じゃない。あの、こぎれいで、明るくて、楽しそうな所は地球はさあ……」

「じゃあ、あなたの地球は、どこにあるんだい」

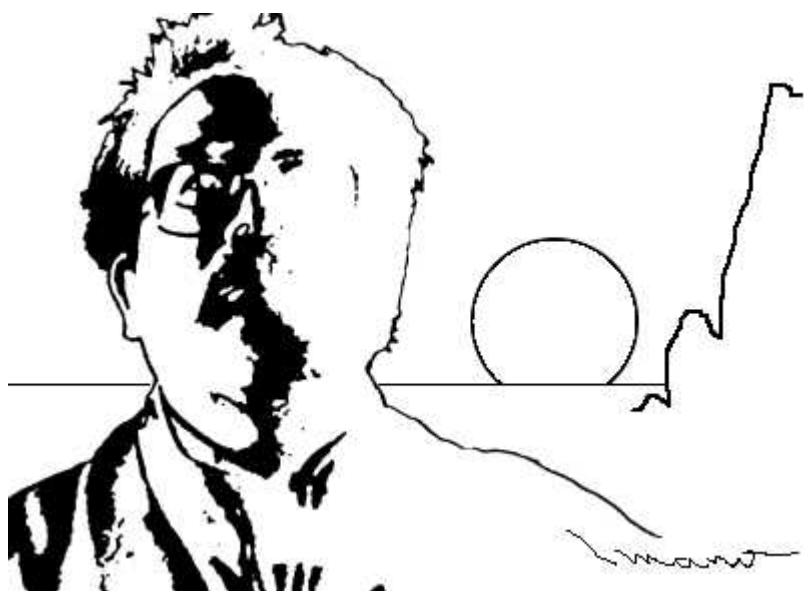
ファボは悲しげに地面を見た。

「俺は残る」涙が流れた。「俺たちの二百三十年は、どういふことになるんだ。俺の三十年は、いったい、どうなっちまうんだ！」

明日、私たちは、地球へむかうだろう。そこが、私たちの地球でないとしても、この、これからも絶対に私たちをうけ入れることのない大地でくらすことはできないのだ。私たちは地球へ帰る。ファボも地球に帰るのだ。

大正大学文芸部「天壤」第二号(1978.10.28)初出

一九七八年九月



一 歩

教室の中は暑苦しかった。七月に入ったためではなく、生徒たちの勝手な私語がたちこめていたせいである。村岡は飛びかっている言葉の中をkarouうじて通ってくる中央委員の松本の声を聞きとろうと努力していた。松本は、にやにや笑いながらメモを見て何か言っている。

「…だからあ、文化祭の日どりと、実行委員と、文化祭のテーマとお…と…と…」

ほとんどわからなかった。

それで村岡はふと窓の外をながめた。彼の席は窓際にあった。真白に輝くコンクリートのたたきや、きらきら光る木々の葉、バンパーをざらつかせてきのこの雨でぬかるんだ坂道をのぼってくる自動車など窓の外は、平和で静かで狭い世界のようにだった。しかし、もう一度教室の中に目をやると、自分が今いる場所は

いっそう暗く不健康で外部とは全く断絶した世界に見えた。

今の時間、月曜の五時間目のホームルーム討議の時間には、担任の教師はたいがいやって来ない。先生が来ていればもう少し静かになるだろうに。村岡はそう思った。このK高校に入ってからの三ヶ月、村岡はなにかにつけて教師のたよりなさが不満だった。六月に行われた生徒総会でもそうだったし、授業でもそうだった。体育館に集められた生徒たちは、会場に入ってから、役員が発言し、会が終わって退場するまで一度だって静かにしていることはなかった。笑い声、どなり声、雨音のように室内に響くざわめき。中学ならば教師がまわって来て一々注意したりしていたが、ここでは数人の監督の教師が壁にもたれて見ているだけだった。授業中のざわつきというのは、中学時代も変わりはしなかったが、本当のところ村岡は高校ともなれば授業中に不真面目な生徒など教室から追い出されてしまう位のきびしきがあると思像していたのに、教師は生徒が聞いていようがいまいが自分一人で

授業をすすめ、ひどい時は後の端近くに座っている村岡まで声のとどかないことさえあった。はじめのうちこそ驚いているだけだったが、やがてそれは失望になり怒りになっていった。しかし、授業中に名前を呼ばれただけで舌がもつれるほど気の小さな村岡には、教師や他の生徒たちにはっきり不満をぶつけることはできそうになかったし、だからと言って自分が学校をやめてしまうなどという考えは——そういう空想を持つことはしよっちゅうであつても——とても現実味のあることには思えなかった。それどころか、他の生徒から浮き上がりがたくなって、かえって授業など聞きたくないというそぶりまでしてみせることもあつた。

村岡は、もう一度松本の声に集中しようとした。今日の議題は、文化祭の実行委員を各ホームルームから一名ずつ出すということらしかつた。

「：誰か立候補しねえ？…それじゃあ…」

松本は一年生に入つてすぐに担任から指名されて中央委員になつた。中学時代に学級委員長でもやつていたのかもしれない。しかし、彼はしかたなしに今

の仕事をしているようでほとんどやる気はなさそうだった。合間に一番前の席の生徒となにかしゃべって冗談をとばし笑いあつている。ざわざわした教室の中に生暖かい風がふきこんだ。小さな蠅が一匹、教室の中をあっちへ行つたり、こっちへ来たりして飛んでいた。

村岡はいらいらしてきた。こいつらは「自分でやる」ということができない。大きな流れに流されるだけで、決して自分が流れになろうとしない。こんなやつらの中に俺はこれから三年間居なければならぬのか。俺はこいつらとは違うんだ。でも…。何もしないで心の中で自分の異質さを感じているだけでよいのだろうか。心の底では村岡は、結局自分が嫌っている人間たちとたいして違わないことに気づいていた。自分が他の生徒たちと違うことを証明するのには、今、立候補するべきだった。青春に自分をぶつけて生きてるのだと証明するのには。けれども…。そう思うと急に鼓動が激しくなるのがわかつた。

その時、松本の一段と大きい声が聞こえた。

「：じゃあさあ。帰りのホームルーム時まで立候補か推薦を考えておいて下さい」

松本は教壇をおりて自分の席に戻った。教室はいっそう騒々しくなった。村岡は大きく息をついた。少し椅子をひき、軀の重心をずらして教室を見まわすと、ワイシャツ姿の生徒たちがあちらこちらでかたまつて好きな事をしていた。ホームルーム中でトップと目されている高瀬は自分の席をはなれて、教室のすみの比較的静かそうな誰かの席で問題集を開けていた。まだクラスのほとんどの人間と口をきいたことがないらしいやせて小柄な柴も、廊下側の自分の席にひとりきりでぼんやり座っていた。ひとかたまりの生徒たちが声をたてずに笑いながら教室を出ていった。横山を中心としたグループだった。リーゼントやパーマをかけ、遅刻、欠席の常習犯、それでも同時にクラスの中を明るくさせている、そんな連中だった。おそらく学校の外へ出て買い食いでもしてくるのだろう。他にも、ノートや筆箱を持って図書室へ行く生徒たちもいた。

村岡は立ち上がると必修クラブで知り合った中谷

の席に近づいた。三、四人がてんでのかっこうをしなからダベっていた。

「エリック・クラブトンっていうの、すごいじゃねえ」

丸顔の吉田がしゃべっていた。

「なに。それ」

誰かが聞く。

「知らねえかなあ。村岡君なら知ってるかな」

村岡に気づいて吉田が言った。

「知らない」

「歌謡曲の方がいいよ」

今度は原が言った。どこかで、わぁという大きな歓声があがった。トランプを始めたらしい。村岡がふり向くと窓いっぱい白い雲が見えた。窓のそばで見ると、よりもずっと大きく見えた。

「それなら原田真二だな」と吉田。

「うんうん。あれはいいよ」

今まで聞いていただけだった中谷も身をのり出してきた。村岡は最近読んだ週刊誌の記事を思い出して言った。

「あいつ青学だつて?」

「うん、青学」

そこから、話題の方向は大学に関するものに変わった。村岡は、ぼんやり話を聞きながら、さつき感じていた不満を誰かに話すきっかけを待っていた。不満を話すことによって、いくらかでも自分が他のやつらと違うことを他人に知ってほしかった。そうでもしないと自己嫌悪がひどくなるばかりだった。

「高瀬みたいにがんばってりや、いい学校に入れて当然だよ」

「やっと、高校受験が終わったつてのにもう大学受験かあ」

「まあ、おまえの頭じゃ、何やったつてだめだよ」

「ばか。俺は全然受験勉強しなかったからK高へ来ただけで、本番になりや…」

「一年の間はうんと遊んどいて、二年になったら始めないとな」

一歩
トランプの歓声が一段と大きくわいた。ここにいる人間たちは、皆、大学への予備校としてしか高校を

見ていないらしかった。あらためて、村岡は自分はいつらは違うのだと思った。それでは、自分の目的は何なのだろう。「今」を懸命に生きることなのだ。また村岡の空想がはじまっていた。トランプをやっている連中のもすごい歓声が、またおこった。

突然、すごい勢いで教室の前の扉が開くと、隣のホームルームの担任が首を出して、静かにしろとどなった。教室内はとたんに水を打ったようになった。どこか遠い教室でさわいでいる声がかすかに聞こえた。

二言、三言何か言っつて首はひっこんだ。前ほどの騒々しさではないものの、教室の状態はもとに戻った。

「なんだ。あのじじい」

教室のどこかで隣の担任の悪口を言っているのが聞こえた。

「あいつ、ほんとに頭にくるやつだなあ」

吉田が顔をしかめながら、はき出すように言った。「あいつ、ひとりだけけうるさくつてよ。こないだも、

うわばき踏んづけんなどか、ウダウダ言いやがつて」
「ハゲみたいに、何も言わねえやつの方がいいよ」

ハゲというのは、村岡のホームルームの担任の山田のことで、スポーツ刈をしているのでそう呼ばれている。うるさいことを言わないので、生徒から特に嫌われることもなかった。しかし、村岡には、この三十近い教師は無責任なのだと思えなかった。担任が悪いから、こんなにしまりのないホームルームになってしまうのだ。中谷たちにそう言ってやろうかと思ったが、とうとう口には出なかった。

六時間目の授業が終わり、入れ替わりに山田が入ってきた。

「今日はなんかあるのかあ」

松本が立ち上がって五時間目の持ちこしの件を話した。室内の方々から不満の声があがった。

「じゃあ、はやく決めろよ」

と、山田は教壇の上にあった椅子を引っ張っていった窓際に座った。松本が教壇の上上がった。明日にしようよという大きな怒鳴り声がとんだ。

「それでは、さっきの実行委員だけど、立候補、誰かいる?」

誰も名乗り出る者はなかった。ぶつぶつと不平を言う声だけだった。鞆をわきにかかえて、いまにも立ち上がりそうなかっこうをする者もいた。村岡は自分の机を見つめていた。立候補しなければならぬと思う一方で、家に帰るのが遅くなってしまふとか、どんな失敗をしないでかすかわからないなどと立候補できない理由を一所懸命に考えていた。すぐ、動悸が激しくなった。指先が震えているようだった。誰か立候補しないだろうか。行動力のある人が先に立候補しないだろうか。そうすれば少なくとも、自分は三無主義に侵されているのではなくて、ただ決断が遅かっただけなのだと思うことができる。村岡は自分が逃げていることに気づいてしまった。

「それじゃあ、推薦かな」

松本の声につられるように村岡は手を挙げた。

「ぼく、やります」

終わったと誰かが叫んだ。皆、がたがたと椅子をずり動かした。山田が中央に戻ってきた。

「よし、やるか。ん。その意気度ががんばれよ。じゃあ、

今日は終わりっ」

生徒たちはいっせいに立ち上がり教室を飛び出していった。村岡はなにかひどくあっけない気がした。それでも、足はふるえていた。誇らしげな気分もした。嫌いな山田にでも、ほめられてうれしかった。いつもよりゆっくりと帰り支度をした。中谷が近づいてきた。何か言われるかな、と少し緊張した。ばかにされるにしても、激励されるにしても、それは他のやつらと違うのだということを認めてくれることになるのだから、何を言われてもいいと思わねばならないのだと思った。ところが、中谷は村岡にいつもと替わらないあいさつをして通り過ぎてしまった。村岡は拍子抜けしてしまった。結局、自分のしたことはまるで他人にはたいしたことだと思われていないのか。

村岡は学校を出て坂道を下りていた。すると後ろで自転車の止まる音がした。そして肩をたたかれた。驚いてふりかえると、同じホームルームの石井だった。それほど親しくはないが、石井はひょうきんな、よくめだつ生徒で、村岡は割合に親近感を持っていた。

「やあ、君すごいねえ。立候補して」

「そんなことはないけど」

村岡はうれしかったが、実際に口から出た言葉はぶっきらぼうになってしまった。

「やっぱり君みたいに、やる気のある人がいないとダメなんだよね」

恥ずかしかったが、いい気分だった。

「君は歩き？」石井が聞いた。「それじゃあぼくと途中まで一緒じゃない」

石井はゆっくりと自転車をこいでいた。

「ぼくも協力するからさ。がんばってよ」

西の空の雲が赤く染まってあたりは黄色に輝きはじめていた。

いい友人ができたんだと、村岡は思った。

— 未完 —

一九七八年十二月

大正大学文芸部「天壤」第三号(1979.2.15)初出

異端者

1

六月にしては、その日はむし暑かった。巻口は、イライラと、額を手でぬぐった。まどをあけてもちっとも涼しくならない。少なくとも、これが、今、巻口をイライラさせる原因の一つだった。一つというのは、つまり、もう一つの原因、彼のまわりの人間のとりとめもない雑談も、巻口の思考力を弱めるのに少なくない役割を始めていたからである。

議長は今しも、文化祭のクラス責任者の立候補をあきらめて、推薦にうつろうとするとところだった。この県立K高校一年B組の教室はいつものごとくうるさかった。だれも議長の言っていることなど聞いていないし、議長さえもやる気をなくして、形式だけで

動いていた。巻口は静かに手を上げた。議長はよろこんで言った。

「よう、巻口、おめえやるのか。…ほかに立候補は、いないだろう。じゃあ決定だ。異議あるか。異議はないね。ではこれで終わり」

議長は、思っていたよりも、意外と簡単に終わったことをよろこんでいた。そして、クラスの人間は、ほとんど、しゃべりつづけていたのでなにかあったのか、知っている者もあまりいないままにホームルームは終わったのだった。ただ一人巻口は、ばつぜん、満足な体の内に感じていた。

巻口は、なにも責任者になろうなどとは、少しも、思っていないかった。いつもは彼は消極的な人間であった。ただ彼は、今のクラスの中があまりにも、生徒会、もしくは団体行動ということに、無関心なのが気になっていただけだった。彼の行動は、その不満が爆発したといえた。

教室は、さわがしく、そしてむし暑かった。

ガランとした図書館で、一人本をよんでいるのは巻口だった。きのう、文化祭責任者になって、家へ帰り、ふとんの中へ入ったとたんに、彼は、ものすごい不安を感じた。自分の考える文化祭の理想像を考えれば考えるほど、その責任の重さが、厚くのしかかってくるのだった。

もう、窓の外は、赤くそまっていた。

「コラ。その生徒。もう閉めるぞ。早く出ていけ」

図書室管理の先生がドラ声をあげた。

「すいません」

巻口は、本を二冊、クラスの名前でかり出し、図書室を出た。背後で、図書室の戸をしめる音がしていた。

重たいカバンをさげて、歩きながら巻口の考えていることは、文化祭のことだけだった。

一歩 次の日、朝のホームルームの時間に、巻口は、立ち上がった。

「文化祭についてですが、何をやっていいか、意見をのべてもらいたいと思います」

いつものことだが、ほとんどの人間が無関心にすきなことをしていた。巻口が、意見がでるのをまってだまっていると、さわがしきは、ますます大きくなっていくようだった。数分間がずいぶん長く感じられた。巻口は、イライラはじめていた。

「静かにしろよ!!」

巻口は、大声をあげた。一瞬、クラス内が、静かになった。次の瞬間、ヤジが一斉にとんだ。

「オウ、カッコイイぞ」

「キマッテンじゃないか」

巻口は、頭に血がのぼってなにがなんだかわからなくなってしまった。

「オイ、静かにして。うるさいよ！ オレの言っていることを聞いてんのかよ」

「聞いてないよ」

ヤジが、またとんだ。教室は爆笑につつまれた。

「まじめに聞いてくれよ」

しかし、クラスは、前よりも、もっと騒がしくなっていてしまっていた。巻口は、議事を進めることを、あきらめた。

「では、明日までに考えておいて下さい」

そうそうにきりあげてしまったが、この言葉も明日までには、ほとんどの人間の耳からは、消えてしまっているだろうことは、彼にもよくわかっていた。こうなれば、あとは、自分一人の力だけでやるしかないとなつた。つかれた頭のすみで、くりかえし考えていたのだった。

つかれていたし、ねむくもあったが、巻口は、勉強部屋の机にむかって、文化祭の案をまとめていた。時計は、十二時を、さしていた。

(原稿ここまで)

当時の文芸部内での評価は非常に悪かったが、実はある程度長い小説の冒頭部分にするつもりで書いたもの。このあと主人公は周囲に振り回されて苦しむという展開になるはずだった

が、結局これ以降を書くことはなかった。付録の草稿はこの作品の前に書いた初期プランである。

本物の生き物は

保存室の扉を開けると、とたんにドラキュラは快活におしゃべりを始めた。

「おまえには手をつけないから安心しろ」

と、黒いマントに身をつつんだ男は言った。ぼくはアルバイトで血液銀行の夜間警備をしていた。仮眠をしていた警備員室で息苦しくなって目を開けたら、彼が立っていたというわけだ。とっさにぼくは金めあての強盗だろうと思った。

「ここは血液銀行ですよ。金なんかありません」

「俺は、ドラキュラだ」

血液銀行などに入る間抜けな泥棒がいるわけがないと気楽に始めたバイトだったが、まさか吸血鬼が来るとは思わなかった。

「血を保管してあるところへつれていけ」

「でも……」

ドラキュラがちらりと冷たそうな牙を見せたので、ぼくはしぶしぶ地下の血液保存室へ案内していった。

「ずいぶん長いこと眠ったなあ。今は？……もう二十一世紀になってるのか。速いもんだ。ま、吸血鬼といつてもね、昔みたいな野蛮なことはやらないさ。多少味は落ちるけど、こうやって保存血液なんかでがまんするようになってね。人間との平和的共存が望みなんだよね。俺の主食が人間の血液だからって、人は俺を悪者にするけど、本当は心やさしき一個の生命なんだ……」

べらべらしゃべりながら、ドラキュラはうれしそうに血液パックの口を破り、一息に飲んだ。

「あの……」

ぼくが声をかけるのと、ドラキュラがむせかえり、苦しそうにごぼごぼと今飲んだ血を吐き出すのが同時だった。

「なんだ、こいつ！俺を殺そうって気か。下手にでてりゃなめやがって！何を飲ませたんだ」

「だって、いきなり飲んじゃうんだもの。あのねえ、

ここには人間の血は一滴も置いてないんですよ。よく見てごらんさい。全部人工血液なんだから」

ドラキュラはうす気味悪そうに今飲んだパックをながめた。

「なんでえ。ろくでもないものを考え出しやがったな」

「大学病院へでも行けば、たぶん本物が置いてあると思っけど……」

「そうか、じゃましたな。若いの」

そういうとドラキュラは、意外にあっさりど、マントをおおってくるりとふり向き、扉を押した。それから、もう一回押して、今度は引いて、こぶしでどんとたたき、満身の力をこめて蹴とばして、顔を真青にしたが、それでも扉は開かなかった。

「きつと防犯用自動シャッターが閉まっちゃったんだ」

「はやく開ける」

「ぼくバイトだから開け方知らないんですよ。明日の朝んなりや、誰か来てくれるでしょう」

「朝の陽にあてて俺を殺す気だな。人間のやり口はいつもそうやってきたないんだ」

「そういうつもりじゃないけど……。吸血鬼なら壁くらい通り抜けられるんじゃないの？」

「どういうわけか、この部屋は完全気密になってるんだ。はい出るすきもない」

そういうえば、この保管室は本来核戦争の時に備えた、避難用シェルターで、平和時の施設利用として血液銀行が使用していたのだ。

ドラキュラは、悲愴な顔で再び無駄な努力を始めた。ぼくは何かばからしくなって、床の上に横になった。ともかくも、ドラキュラ出現のおかげで今晩は仕事をせずにごっすり眠ることができる。

目をさました時、ドラキュラは、棚のかけで死んだみたいに眠っていた。たぶん朝になったのだろう。ぼくは外部と通じる電話をみつけ出して、さっそく警備室にかけてみた。長い呼び出し音の後に、出勤してきていた主任の声が聞こえた。

「おまえ、そんなどこにいたのか。運が良かったな」
「どうしたんです。元気が無さそうですね。とにかく扉を開けて下さい。くわしいことは後で話しますから」

「いや、開けない方がいいよ。十年くらいは出てこない方がいいだろう」

「まさか」

ぼくがドラキュラと保存室にいる間に、地上では核戦争がおこったらしい。直撃はまぬがれたものの、放射能はそろそろ致死量を超えるところだと主任が言った。

「その様子だと、防核システムが全部自動作動しているようだ。さがせば食料もあるだろう。いざとなったら、人工血液飲んでも生きてけるよ。運がよけりや死なずにすむだろ。くそ。俺はシエルターにはいる間もなかったんだぞ。朝テレビ見ておきやかったんだよな。戦争が始まったことを知ってりや、逃げこめたのよ。新聞にや何んにも出てねえんだもの……」

それで、電話は切れた。

「まいったな」

ぼくは、そうつぶやきはしたが、本当のところ、この事態がどのくらい「まいった」事なのか、よくのみこめなかった。

夜になってドラキュラが目をさましたので、状況を説明してやった。ドラキュラは、半狂乱になった。

「人間ってやつは、どこまでばかなんだ。なんで人間のために俺がこんな目に会わされなきゃならない？」

「もう腹が減って死にそうだ。(もちろん、ぼくはこのころにはドラキュラは死なない妖怪であることに気づいていたので、それほど同情はしなかった。)これだけの血があるってのに、俺には一滴も飲めんのだぞ。こうなったらおまえの血をもらおう」

ドラキュラの顔が、ぼくの目の前にアップになって迫った。苦しまぎれにぼくは叫んだ。

「ぼくを一度襲った後は何を飲むんだ。ぼくも吸血鬼になっちまうんだぞ」

ドラキュラは牙をひっこめて真顔になった。

「とも食いはぞっとしないな」

結局、ぼくを襲わないかわりに、ぼくは毎日注射器で自分の血を少しとって、ドラキュラに与えるという提案をして、どうやら彼を納得させた。

何ヶ月か過ぎた。ぼくは保存食を食べ、人工血液

を飲んで元気だったが、ドラキュラはかわいそうに、骨と皮ばかりになってしまった。今では完全に立場が逆転して、人間であるほうが、当然の秩序として、妖怪である彼の優位に立っていた。

そんなある日、電話が鳴った。信じられない気持ちでぼくは受話器をとった。

「もしもし、誰か生きているのか」

電話からは、はっきりした人の声でした。

「私たちは、月植民地からやって来ました。地球の残存放射能を調査にきて、偶然、作動しているシュルターを発見したというわけです。これから無人救援機を降ろしますから、一緒に月へ行きましょう」

ドラキュラとぼくは抱きあって喜んだ。涙が流れた。人間は生き残っていたのだ……。ぼくは一瞬我にかえった。ドラキュラがキスをしようとしてきたのだ。

「おい、やめろ」

「あなたの体はとっても魅力的ですね……。何度血を吸っちゃまおうと思ったことか。へっへっ。これで何もお前にへいこうする必要は無くなったって訳だ。今日

の救援を記念して、お前の血で乾杯させてもらおう。

「よくも今まで俺を見下してきやがったな。人間が本物で妖怪がにせものだと。人間は、俺を怖がっているふりをしながら、本当は俺を見ることによって自分たちが本物の生き物なのだと確認して安心していただけだ。俺は俺なんだ。人間のために生きてるんじゃない」

「こら、やめろ」

「はは。お前も吸血鬼となって、一緒に月で我が種族を繁栄させてくれ。月世界の吸血鬼か。これはいいネーミングだ。吸血鬼は不滅だ。永遠に人間たちを恐怖させてやるのだ。人間が妖怪と自分を比べることで自分の存在を証明したように、吸血鬼は人間を襲うことによって、自らの存在を肯定していくのだ」

その時、天井を壊して救援機が降りてきた。風がおこらないところを見ると、エアカーテンで外の空気が入らないようにしてあるのだろう。

二人は動きを止めて、銀色に光るその円盤状のものをみつめていた。するすると潜望鏡のようなものが

のびて、あたりをぐるぐる見回した。

潜望鏡の目がぼくに止まると、やおら機械の手が出てきて、あつという間にぼくを内部に取り込んだ。中からは外の様子が、自分の順番を待っているドラキュラの姿がよく見えた。しかし、潜望鏡は、何も見えないように一まわり回転してひっこんでしまった。ドラキュラは不安そうに、救援機に向かって何か話しかけた。救援機は彼を残したまま、低いうなりをあげて上昇をはじめた。

狂ったように吸血鬼はとびついてきたが、もうどきはしなかった。泣き顔のドラキュラを下に見ながら、状況はどうあれ、地球に残った唯一の生き物―ドラキュラが、これでついに人間の影であることから抜け出して、本物の生き物となったことを、一応祝福した。吸血鬼は、潜望鏡の鏡にうつらなかつたのだ。

e n d .

大正大学文芸部「天壤」第四号(1979.11.4)初出

自分の原点とも言えるSFショートショート。文芸部では純文学的な小説を書いても評価されなかったが、これは面白いと言ってくれる人がいた。

ピラミッドパワー大騒動

講義が終わってから大学近くの喫茶店「UFO」^{ユーフォー}へ行くと、メンバーはまだ誰も来ていなかった。このごろ部員の集まりが特に悪い。週にたった一回の例会にもかかわらず、全員が集まることはめったになくなってしまった。

ぼくは新しく入った高校生らしいアルバイトのウェイトレスにココアを注文すると店の中をぐるぐるっとみまわした。

「UFO」などといっても、別に普通の喫茶店とたいてい違うわけではない。天井からプラモの円盤をぶらさげてあったり、壁に有名な円盤の写真をかけてあったりしているだけだ（もっとも最新の科学成果の結果、写真の方もつばら偽物らしいということと評判なのだが）。開店のころはキンキラキンの円盤型ライターなどを各テーブルにおいてあったのだが、あつと

いうまに何個かが次元の間に消え去ったため、それも今ではカウンターの奥にまつられるだけになってしまった。だからもちろん別にそんな子供だましにつられてぼくたちT大超常現象研究会が例会に使っているわけではない。たまたま大学から一番近いというだけのことだ。念のため。

しばらくすると、メンバーがぞろぞろ現れた。

「ねえ。このごろUFOの目撃例が減少してるってニュース聞きました？」

その巨体を二人分の席にドシンと落としたのは、超現研一の情報通・八ツ田蘭造氏。彼は今年四年生なのだが、UFO文献学に頭のてっぺんまでドップリつかり、まだ数年間学校に居続けるだろうというのがもっぱらの噂である。彼の知識はあふれるほどで、一説によると情報がたまりにたまってその身体がふくれているのだと：まあこれはあてにはならないが、その知識によればこの喫茶店の名前はまちがっているのだそうだ。UFOは『ゆーえふおー』と読むのが本当で現にアメリカでは一般にユーフォーという発音はない

のだと、ハツ田氏はこのところ広まってしまったこの誤りを訂正するのに懸命である。

「いいえ。初耳ですな」

と答えたぼくは、なにをかくそう、別にかくす必要はないが、二年生の身でありながら超現研のリーダーを立派に務めている八方美人の芋野政治。超常現象一般にわたって広く浅く首をつっこむ、頭が良くして器用で気っぶが良く分厚いメガネのよく似合う男前である。もちろんこれは主観的な観察によるものではない。あるが。なお当然のことながら金も力もない。

「ぼくはその話聞いたことありますよ」

ハツ田氏の後から入ってきた長髪の二年生は、靈魂研究の星島君だ。彼はどういうわけかひどく正當な血筋の家に生まれてしまった因果で大変な名前を背負わされてしまい、本当のフルネームは歴史ある立派な名前だそうだが、とても長くて難しく、それを全部言うと十人が十人吹き出すというわけで普通はススムで通っている。

「へえ。誰から聞きました？」

とハツ田氏が、少しくやしそうな顔をして聞くと、カン高い声がひびいた。

「なアンの話してんの」

我が超現研の紅一点、二年生の憑依靈研究者、上月美子女史の登場である。星島君は女史の声を無視して

「出二軒さんから、おととい会った時に」

「なあんだ。おれが話したんだよ」

と満足げにハツ田氏。

今日の出席率はすこぶる良いようだ。来ていないのはあと一人だけ。と言えはおわかりになるように、お恥ずかしい話だが、我が超現研は部員が全部で五名だけなのだ。昨今のあの白痴的 S F の悪影響で正しい真の超常現象をしっかりと見すえようという学生が減ったためである。だいたいあの手のばか話は：いや、話の方を進めよう。

「それでは、出二軒さんが来てないけど、今日の例会を始めましょう」

さっそくハツ田氏が今月のテーマである「UFO写

真の光学的分析による真偽判定」という話をし始めたのだが、皆んなのノリが悪く、話は尻切トンボになっちゃってしまい、いつの間にかさっきのUFO目撃例減少の話になっていた。

「それからさ、これはできるだけ秘密にしといてもらいたいんだけど、あのUFO旅行会の荒梨さんから直に聞いた話だよ。二三年前から信憑性のあるUFO目撃例がほとんどなくなってるね。荒梨さんの話だと、アメリカやヨーロッパなんかでも激減してるらしいんだ。それでね。おもしろいことに、それと一緒にトリック写真や誤認例を持ち込んでくるやつのが、今までの三分の一くらいになってきてるらしいよ」

こういう新情報、怪情報になると八ツ田氏の独壇場である。今までやる気のない顔をしていた部員たちの目も少しは生気をもちはじめてきたようだ。

「でも、トリック写真は超常現象とは直接的には無関係じゃない」

星島君が口を出した。

「だけど…」

「だって、ここは真面目に超常現象を研究するグループなんだから」

「でもなんか感じるわねえ」

と上月女史が割って入った。

「そうだ。それでね。俺も調べたんだ。ネッシー連絡会の方をさ」

「ネッシーと円盤とどういう関係があるんですか。証明されていないそういう、超常現象をなんでもかんでも結びあわせてしまう幼見的な態度を、研究者がマスコミに踊らされて…」

星島君がどなった。

「君は何で、そういういちいち俺の言うことをじゃまするんだ」

「そういうわけじゃないですけどね」

「まあまあ、星島君、ねえ一応、八ツ田さんの話も聞いてみようよ」

ぼくがなだめた。この二人、以前、八ツ田さんが借りた星島君の「コズモ」創刊号が行方不明になって、返した返さないでもめたことがあり、それ以来、

思いかえたように衝突が繰り返されるのである。そうなる、止めに入るのはいつもぼくの役目と決まっている。もっとも、ドーユーわけか、その問題の「コズモ」はぼくの本棚の奥の方にしまわれてあるのだけだ……

星島君は、しぶしぶ口をつぐみましたというポーズで腕組みをして黙ったが、なに彼だって今の話に興味がないわけではないのだ。

「で、ネッシーがどうかしたんですかと、ぼくはうながした。

八ツ田氏は再びうれしそうに話し始めた。

「ネッシーの目撃例がさ、もう一年以上途絶えてるんだそうさ」

「そういえば、ここんとこ、超能力少年のニュースも出ないみたいね」

「イエティの新しいニュースもないね」

「ブームが去ったということじゃないのかな。マスクミの超常現象ブームが。日本人がみんなあきちゃったと」

「それなら、かえっていいことじゃない」

「今年は、あのくだらんSFがブームだった。それとピラミッドパワーね」

「そういえば、ピラミッドパワーはまだ人気があるみたい……」

その時、喫茶店の入り口の所でばたばたと大きな音がして、ぼくたちの目はついそっちの方を向いた。

やつれた顔の出二軒さんがふらふら入ってきて、近くのいすに倒れこんだ。その姿があまり異様なのでぼくたちの声は一瞬止まった。

「どうしたんです。出二軒さん」

ぼくたちは出二軒さんのまわりに飛んでいった。ほのおこけた顔にはよく見ると、細かいキズが無数にあつて、赤くはれていた。ウェイトレスがこわごわ運んできた水を一口飲むと出二軒さんは突然ものすごいスピードで話はじめた。

「おかしいんだ。なにか狂いはじめているぞ。おれはいつも、かみそりの刃を小型ピラミッドの中に入れて保存しておくんだけど、昨日使おうとしたらまるっき

り切れないんで、これはおかしい、ピラミッドの位置がずれたのかと思っていろいろ調べてみたんだがなんでもなさそうなんで、無理してそのまま髭を剃ったんだが、痛くて痛くて、それでもってそのあと夜食代わりにピラミッドの中に保存しておいた卵を飲んだら、今度はひでえ下痢おこして…」

「ちょっと、それいつ買った卵なんですか」
「一ヶ月前」

丸い目をして聞いていた上月女史が吹き出した。「それじゃあ、あつたりまえよ」

「いやあ、そんなことは無いはずなんで。ピラミッドパワーがある限り、絶対に腐るはずは無いんであって、そりゃあ水分が失われることはそれはあるけど、これは、ピラミッドに何かが起こったんだと思って、一晩中調べてみたんだが、わからなくて、そしたら、朝んなったら髭剃ったあとがびりびりしてくるし、体はふらふらだし、学校へは出て行く気力が無くて下宿で寝ながら考えてたんだが、これは、何か恐ろしいことがおこる前兆かと、世界が終わるとか…。世界の

…何？ 世界の終わり？ 世界が終わるのか。本当に終わりか。世界が減ぶぞ。減ぶ減ぶ。わー、ぐう」と言ってお出二軒さんは血走った目を開いたまま失神した。上月女史はよほどおかしらしくケラケラ笑っている。しかし、男たちは黙って真剣な顔を見あわせた。日ごろ冷静な出二軒さんがこれだけ取り乱すということは、何かがあるのだ。

「こっくりさん、やってみようよ」

と星島君が言った。すぐにぼくは反対した。

「よせよ。ばからしい。君の感覚は古いんだよ。今どきこっくりさんなんか、流行るか」

「いや、こっくりさんというのは降霊術の初歩的なものなんだ。自分の守護霊と話すには一番いい方法ですよ」

結局、他にたいした方法も思いつかなくてやってみることになった。星島君が靴からレポート用紙を出しているいろいろ書き込み、彼とぼくと八ツ田氏が十円玉に指をのせた。星島君が何かぼそぼそと口の中で唱える。

霊はすぐに降りてきた。

「このごろのおかしなことは、なにか一つの原因があるのですか」

星島君が目をつぶったまま質問する。十円玉がするすると動き出した。

ジ・ン・ル・イ・ホ・ロ・ブ

人類滅ぶ！

「おい、誰かいたずらしてんじゃないんだろうな」

八ツ田氏が叫んだ。星島君は質問を続ける。

「なぜ滅ぶのですか」

カ・セ・イ・ジ・ン・シ・ユ・ウ・ラ・イ

火星人襲来。

「八ツ田さん。ふざけないで下さい」

「俺が動かしているわけじゃないぞ。星島家の御曹司

殿！君だろう。こんなSFみたいならばかなこと」

「他人のことを時代劇みたいに呼ばないで下さい」

「霊に聞いてみたら」

「本当のことですか」

ウ・ソ

一度静かになっていった上月女史がまた笑いはじめ

た。

「俺たちをからかっているのか」

と八ツ田氏が言うのと、「ソ」の字の上に止まっていた十円玉は、また「ウ」の字へ戻った。

「なんだこれは」

上月女史が椅子の上を転がるほど笑いながら答えた。

「『そう』って言ってんのよ……」

女史は椅子の上で苦しそうに身をよじり、声も出さないうで笑い続けた。

「ばかにしやがって。君の守護霊はダレてんじゃないのか」とぼくが怒鳴りかけた時、八ツ田氏がこわばった声を発した。

「おい、様子が変だ」

見ると女史、笑いすぎて口から泡をふいてそのままぼったり椅子に倒れこんでしまった。

「大変だ！」

「なんとかしろ」

「例のやつが始まるんじゃないのか」

言う間もなく上月女史はやおらテーブルの上へ立ちあがって叫んだ。

「おろかなる人間どもっ！」

目がすわって顔つきががらりと変化していた。彼女は、憑依霊研究家を自称しているが、実のところ本物の神つきなのである。精神状態のバランスをくずした時、時々突然神がかりになってしまうのだ。こういう時は、さわらぬ神にたたりなし、下手^{したて}に出て発作がおさまるのを待つしかない。ぼくたちはいつもの条件反射でガバと床にひれふした。マスターが青い顔をしてカウンターのなかから飛び出してくる。

「困るんですよね。こういうことはね。あんたたちね。そりゃね、粘るくらいはいいよ。あたしだっていつも大目に見てるけどね。これはね。店の中をかきまわすこういうのね困るんだよね…」

「しいっ黙って静かにして下さい。怒らせると何をするかわかりませんから。うまい具合に、今、店にいるのはぼくたちだけなんですから、少し見逃してください」

「うるさいぞよおっ」

「ははあ」声の迫力に押されてぼくたちは床に頭をこすりつけた。マスターもつられて、ペッタリ座りこんでしまった。

「この度の超常現象全般の衰退の原因についての質問じゃが…」

誰もおまえなんか聞いてない。

「おろかなるおまえたち人間自身が、原因なのじゃ。そもそもいったい超常現象とは何だと心得ておるかあ。これは全て、おまえたち人間の精神エネルギーの結集なのだよっ」

精神エネルギーの結集？　なんだそりゃ。

「いわゆる超常現象というのは、人間の精神エネルギーが実体化した現象なのだ。しかし普通の状態であれば、その規模も火の玉どまりだ。ところが古代人たちは、精神エネルギーを人工的に集結し、超常的な力を利用しようと考えた。その精神エネルギー集約装置が、ピラミッドなのじゃ」

ぼくは思わず首を上げた。そうか。その話が本当

ならば、ピラミッドパワーというのは、ピラミッドそのものが作り出す力ではなくて、ピラミッドによって集められた人間の精神エネルギーの力だということになる。そんな説はあまり聞いたことがないが。

「ピラミッドの作用によって国は栄え。ピラミッドは文明の中心地となった。しかし、人間どもは、そのピラミッドの恐ろしい秘密を知らなかった。そのため、それらピラミッド文明は結局は滅び去ったのじゃ。人々がピラミッドの周辺からいなくなるにもなつて、ピラミッドは人間たちから遠く離され、遠い地のかすかなる精神エネルギーによってわずかに動きつづける石の塊にすぎなくなった。そのわずかな働きが、たまにUFOやネッシーやイエティとして実体化する現象をひきおこしているのだ」

すると、超常現象というのは、すべてピラミッドによる人間の精神エネルギーの実体化ということになる。しかし恐ろしい秘密ってのは何のことだ。

「恐ろしい秘密とは何か。それは、ピラミッドによって集中放出される精神エネルギーの量が多くなつてく

ると、人間の活動力が悪くなつて無気力化してくるということなのじゃ。同時にピラミッドの力も低下してくるようになる。昨今の超常現象の衰えは、おまえたちが、ブーム、ブームとさわいでピラミッドを作りすぎたせいなのだ」

なんと、ぼくたちはピラミッドパワーを使っているつもりが、自分たちの精神力をすり減らしていたのか。水がうまくなるといっては小型ピラミッド、元気が出るといってはテント型ピラミッド、そういえばアメリカなどでは痛みどめと称して、天井にピラミッドをつるしていた歯医者もいた。それらピラミッドの使い過ぎによって、超常現象そのものはおろか、現在のこの人間の無気力状態をまねいてしまったのか。恐ろしいことだ。ふと横をみると、八ツ田氏も星島君も、マスターやウエイトレスまでもその場でうつらうつらしはじめていた。

「ピラミッドが人間の最後の気力をしぼり取っているところじゃあ」

ぼくも急に疲れを感じはじめた。もうどうでもいい。

力が抜けていく。もうとてもこれ以上は耐えられそうにない。しかし、おかしいじゃないか。うすれゆく意識の中でぼくは必死に考えた。出二軒さんはともかく、ピラミッドにめったに近づかないぼくたちまで精神エネルギーを使い果たすなんて。それに社会の無気力化はなにもピラミッドブームになってから始まったものではない。それ以前からあったことじゃないか。どうなってるんだ。

「これを見よ」

その時、ぼくの頭の中に一つの絵がはつきりうかんだ。そうだったのか。どうもおかしいと思っていたんだ。ぼくはごろんところがあった。気力がしだいに引いていく。あまりにも運が良すぎた。そんなに力がある国でもないはずのこの日本が、世界を相手にして大戦争を互角に闘ったということが、それに負けたあとの繁栄が、急激な発展が不可解だったのだが。ピラミッドの力があつたのだ。古代の滅亡してしまった都市群のように日本中の精神力を集めて国力に振り替えたピラミッドが。それが今、日本人の活力を吸い尽く

して日本を滅ぼそうとしている。あの国会議事堂の屋根が。

(未発表作品)

たぶん一九七八年か九年に書いた未発表原稿。最終的な推敲がされていなかったので今回全体的に手を入れた。当時の社会状況をパロディにしてあるので、ピラミッドパワーやSFのブーム、高度経済成長、学生の三無主義などの背景を知らないとわかりづらいかもしれない。

UFO対超現研

「なあんか、つまんない所ねえ」

駅を降りると開口一番、神がかりの、ミ、コ、ことシャーマニズム実践研究家の上月美子嬢（こうづきよしこ）が嬌声を上げた。

ぼくたちは、うんざりした顔を見あわせた。今日も女史のこの声は、男性軍のロマンチックな憧れをしぼませてくれるらしい。もちろん憧れと言っても別にこれ上月女史に対する憧れなどではない。ぼくたちの憧れはまだ見ぬUFOへのときめきである。

ぼくたちT大超常現象研究会は、前回のピラミッドパワー脱力騒ぎのショックをいやすためもあって、最近、UFOがよく目撃されるといふこの富士山に近いF市に夏期合宿にやって来たのだ。

「やっぱりつれて来たのは間違いじゃないの」
まずぼやいたのは、靈魂研究の星島君。

「しょうがないじゃないか」と八方美人の部長ことぼ

く芋野。

「そうぼやくほどでもないよ。あんな美人がついてるんだもの」

ちよっとアレな目で、上月女史とおしゃべりしている山緒悠子嬢を示しながら小声で言ったのはUFO文献学の巨漢、八ツ田氏。この山緒嬢というのは、上月女史が、今度の合宿の前に男性陣から、女性一人でこの旅行に加わるのはまずいという理（こじつけ）由で参加を拒否されかけた時、それではというので引っぱり出してきた女史の友人なのだが、これが、また、なんとその、我が校にこんな美女がいたとは、誰も考えなかったようなすっごい娘（ご）で………かえってあぶないような気もするんだよなあ。

こんな場合でも冷静に黙っているのは、長身の古代宇宙史研究家、出二軒銳利氏。

と、まあ、こういういつものメンバーがF駅前降り立ったわけである。が、上月女史の言うとおり、それまでぼくたちがいっていたイメージ、つまり、人里はなれた富士のすそ野に不気味に輝く円盤が飛び

ちがう、っていう雰囲気とは少し違っていていることはたしかだった。駅前には白い三々四階建てのスーパーがあり、洒落たづくりの喫茶店、広い舗装道路とバスターミナル、その向こうにはビルや広告があきるほどつづいていた。東京と違っていているのはビルの間の青い空に富士山が大きくくっきり見えていることくらいだろうか。

「八ツ田さん。ちょっとイメージ違いますよ」

とぼくもおもわず言った。「これじゃ大都市だ」

「まあ、そういわないでくださいよ。私だって情報が混乱することもあるよ」

一応ぼくが幹事ということになって雑用をやっていたのだが、本当に情報を仕入れメンバーを焚きつけて、ここまでひっぱってきたのは、八ツ田氏なのだ。

「ここまで来たんだ。とにかく宿へ落ち着こうじゃないか」と出二軒さん。

「どのバスに乗るの」

と、上月女史が言ったので、皆んながいつせいにぼくの顔を見た。

「いや、その、ぼくはまだそこまでは……」

「幹事がしっかりしなきゃだめじゃない」

「でも、駅降りればすぐわかるっていうから」

「どおすんのお」

すると助けるように山緒嬢が優しいまなざしでぼくを見た。

「あそこに交番があるわよ。聞いてらしたら」

「はーい」

ってえんで、ぼくはすっ飛んでいった。

バスに乗る必要はなかった。ぼくが予約しておいたFホテルというのは、なんと、あの駅から見えた大きなスーパーマーケットの裏側にあったのだ。木造二階建ての日当たりなし……というのもまわりに大っきなビルが建ったもので一日中日があたらないきつたならしい宿屋だった。

案内されてみしみしきしむ狭い階段を二階に上がると畳の茶色くなった六畳と四畳半の続き部屋へ通された。

「俺の下宿と変わんねェな」と出二軒さんが叫んだと

おりに、いや実はそれ以上に、ホテルどころか、人の住むことをあえて否定しているかのようなそこはまさに、荒野であった。風こそ吹きぬけないものの、そこは生の影をまるで失った死の世界であった。畳は雑草が生えているみたいにポロポロとけば立ち、窓ガラスには泥がこびりつき、ところによっては欠けたままガラスのかわりにベニヤが貼ってあった。この分ではおそらく窓は開かないだろう。むし暑い。じめじめとすえた臭いがこもっている。メンバーの冷たい視線をぼくは背中に十分感じていた。これだけ冷たいと夏かぜをひかなければならない。もっとも、それだけですめば幸いなかもしれないが。

「い、いやあ、いい部屋じゃないか。ねえ、ね。なんなんとも人間味があるというか、や、ぼくなんか、もつとすごいとこに泊ったこともある…いやあの、だからさ、だって、わかんないじゃない、ホテルっていうだもの、あのさ、あのまさか、あつ、こつ殺さないでくれ、たのむ、うわあ、ぼくはまだ若いんだー」
と、と、とり乱してはいけない！ 話題を変えな

くては。ぼくはむりやり笑顔をつくり、仲居さんに質問をした。

「あは、あ、あの、もう一つの方の部屋もみせて下さい、さいっ」

「ここだけです」

「なに。だって、二部屋たのんどいたんですよ」

「だから、こちらの六畳とそちらの四畳半とで二部屋です」

冷や汗が流れた。これでは、ぼくはもう二度と東京の土が踏めないかもしれない。無口になったメンバーほど恐いものはないのだ。必死で頭をめぐらせる。そう。まだ手はあった。ぼくは星島君の方に向きなおった。

「こういう陰気な旅館っていうのは、地縛霊の一つや二つはいるかもしれないねえ。え」

思った通り、星島君の目はキラキラ輝きはじめた。なんとなく口元のしまりがなくなってくる。よだれが…。ぼくは少し落ち着いた。

「ねえ仲居さん、ぼくたちは幽霊だのおばけだのが好

きな連中なんで本当のことを言ってもらっていいんだけど。ここにも幽霊話の一つや二つあるんでしよう」

今度は本物の笑みを浮かべてぼくはたずねた。

「いいえ。お客さん。うちは、ずうっとそういう陰気な話が無いんで有名くらいなんですよ」

ぼくの笑みは凍りついた。

「幹事さんは責任をとりたがっていらっしやるようね」
なにげない風に山緒嬢の美しい口もとから恐ろしい言葉がもれた。目のはじめに意外にもあっさり開く窓が見えた。次の瞬間メンバーの人たちは、ぼくを二階から地上へとテレポルトさせてくれたのだった。

夜、ぼくたちは細心の注意をはらって静かに宿を出た。注意をしたおかげで、新幹線沿線程度の音で廊下を通りぬけ、八ツ田氏が階段を踏みぬいて前に下りていたぼくと星島君をまきぞえにして転落し、誰かの手がさわったといつて山緒嬢が悲鳴をあげ、台所のナベ・カマが全部床におっこちて、ついでに同宿の人たちに「ばかやろう」「何時だと思ってるんだ」「死んじ

まえ」という叫び声を上げさせた程度で、外へ出るこ
とができた。

外へは出た。F市の繁華街はまだまだ活気があって、ネオンサインや車のヘッドライトが派手に輝いていた。

「あつまきちゃんわね」

と、早くも上月女史が不平を言い、「飲みに行っちゃおか」と、星島君はダレ始め、山緒嬢はあくびをし、出二軒さんはぶすっとした顔で黙り込み、ぼくは、
またもや、はらはらしながら歩いていた。八ツ田氏
と見ると、彼だけは目を輝かして、UFO仲間から送られてきた情報地図を片手に持ちながら、いきいきとした笑顔をうかべていた。

八ツ田氏の後にくっついて訳もわからぬ路地を次々ぬけると、さすが情報通の八ツ田氏、いつの間にか畑が広がる場所に出てきた。いかにもUFOと遭遇することが出来るような暗い一帯で、内心心配していたドライブインとかUFO見物客相手の夜店とか、UFOのおもちゃとか、名物UFOまんじゅうなんてのは無いようだった。まだ一般のマスコミで取り上げられてい

ない、いわば穴場だったのだ。なんだかんだ言ってもそこはやはり好きな連中なので、すぐやる気を取り戻し、ぼくたちはさっそくカメラやテープレコーダー、双眼鏡などの準備をした。

すばやい観測体制構築にもかかわらず、それから四時間の間、UFOはもちろん、飛行機も人工衛星も、鳥さえ飛ばなかった。もっとも真夜中に住民との協定を破って飛行機が飛んだ方がニュースになるかもしれない。今どきUFOだなんてのは、ガキも喜ばない古い流行ということになってしまっている。

「なにをやっておられるのですか」

突然、男の声がした。驚いて振り向くといつの間にやって来たのか、ふちの黒いめがねをかけ髪を七三に分けた男が立っていた。一見土地の人のようだった。

「UFOをね、観測しているんですか」

ぼくが答えた。

「いつばい見えますか」

「いや、全然だめですねえ」

ぼくは苦笑いをうかべた。

「あの、少し困っておるんですが」

「なにか」

「ここにゐられるとね。少し困るんですよ」

「これは、ああ失礼しました。どこか他の場所に移らなければならぬようだ。考えてみれば他人の土地にかつてに踏みこんでいるわけだから怒られてもしかたがない。おい、みんなここにいちやだめだつて」

「でも：」星島君がおもわず声をあげた。

「あなたがたは、空飛ぶ圓盤の専門家ですからね」

男は、齒をむき出して笑いながら答えた。

「私たちの圓盤を発見されると困るんですよ」

ぼくたちが、男の言葉の意味をはかりかねていると、さあつとあたりが明るくなった。

「出たぞお！」

八ツ田氏が叫んだ。空を見上げると頭の真上にズームアップで一面イルミネーションに輝く、なんとSFみたいな馬鹿なかつこうをしたUFOが、あった。

気づくと、ぼくは身体中ぐるぐる巻きに縛られて

冷たい地面の上ところがされてた。あたりは薄暗かったが、なんとかまわりを見ることができた。メンバーが全員、おそらくぼくと同じかっこうでころがされている。目をこらしてみると……うわお、ぼくは一瞬血が逆流するのをおぼえた。あの星島の野郎がこともあろうに山緒嬢のおなかを枕にして寝ているのだ。こんなこと許しておいて良いだろうか。いや断じていかん！

「皆さん、起きて下さい」

あの男の声でぼくは我れに返った。そうなのだ。そんなことに思考力を裂いていられるほど悠長な状態には無いようなのだ。メンバーたちも次々に目を覚ましているらしい。

「おい、これはどういうことなんだ」

出二軒さんのやや上ずった声が出た。

「ここは、富士山の内部にある私たちの圓盤基地です」

そう言われてみると、あたりの暗さは夜のそれではなく、闇のむこうにかすかに荒削りにした岩肌が見え

る。洞窟のようなどころらしい。広さは、ひよっとすると小さな野球場くらいあるかもしれない。訳のわからない機械やキンキラキンの円盤や人の姿がみえる。

その片すみにぼくたちはころがされている。ぼくたちの前にはさっきの男が、椅子に座って、膝をくみ、歯をむきだして笑っている。首と体を最大限に動かしてやっとそれだけのことがわかった。

ぼくは、よろけながらも立ちあがり、しっかり男を見すえ苦笑いを浮かべながら、

「映画の宣伝にしちゃあ少しばかり大げさすぎるぜ。俺にはこんな茶番は通用しない。こうみえてもハードボイルドに出来てるんでね」なんて、堂々と敵とわたりあう役をやってみたかったが、身体がほとんど動かなかったので、唸っただけで済ませておいた。

「まさかと思はれるでせうが、本當です」

「日本人が円盤を飛ばしていたなんていうんじゃ、夢がこわれるよ」

八ツ田氏が悲しげに言った。

「いいえ、私は地球人じゃあないよ。おまへたちの言

葉でアンドロメダと言はれる所から来たのだ」

たしかに、他の星系に高度な知能を持つ生物がいるとしたらヒト型の生物であろうというのは、今日の常識ではある。しかし、このめがねをかけた大口笑い男が宇宙人だというのは、どうしても許せない気がする。せめて銀色の宇宙服でも着てくれればいいのに。その上まるでSFみたいな安っぽいUFOと、アンドロメダなどという陳腐な設定では、八ツ田氏ではないが泣くに泣けない。

「なんのために地球へやって来たのですか」

出二軒さんが少し下手に出して聞いた。

「地球を征服して植民地にするためだよ」

「なあんか、古くさいわねえ」

今度は上月女史が口を出した。「おんなじ高等生物同士でしょ。人権を尊重するってことくらい知らないの！」

男の顔色が変わった。笑い声が消え、ぶすつとした顔で静かに言った。

「おまへたち下等生物と、私とは違ふのだ。アンドロ

メダのアノバ星人以外は人間ではないのだ。おまへたちは人権など持つてはいない。それが自然の節理なのだ。そう思った方が樂だらう。そんなものはあきらめて黙つて家畜になれ」

「ちよつとお、なんか、この人のセリフおかしくくない？」
そういうえば、どうもさっきから気にかかっていたのだが、彼は旧仮名遣いでしゃべっているらしい。いたい作者の良識はどうなっているのか疑いたくなる。

「私のしゃべり方がおかしいといふのか」

「古いのよね」

と、山緒嬢が言うと、上月女史が問髪をいれず

「ほんと、カビくさいよお」

「センス無いわね」

「なつ、なにを！ この地球人のぶんざいで私をばかにするといふのか！」

「あんまりこのおじさんを怒らせない方がいいよ」

八ツ田氏の心配をよそに二人は攻撃を続けた。

「日本語を憶えたのがだい昔なのかしら」

「そうじゃないな。きつとおぼえが悪くて何十年も前

の教科書が終わらないんじゃないの」

「うぬ。言わせておけばしやらくせへ!! こうなつたら…:」

今回の作品では、ぼくは身の危険を感じることも何度もあったが、いよいよ今度こそ本当に殺されてしまう。いやだ。死にたくない。

「いいか、よつく聞け。作戦を早めることにした。名づけて『關東大震災パート2作戦』」

「名前のお、怒つた。東京地下の地震帯に特別な力を与へて關東地方全域に震度七以上の大地震を起こしてやる」

「そんなことをすれば、ここだってあぶないぞ」

出二軒さんが叫んだ。

「ははは。この基地だけは大丈夫なやうに作つてある、當然」

「ま、いくら作者がいかげんでもそう馬鹿な話にはならんと思つてたけどね」

「これがそのスキツチだ。見ろっ」

男はどこからとり出したのか、スイッチが一本とびだしている小さな金属製の箱を手にしていた。

「スイッチを入れなさい!」

山緒嬢がそう叫んだので、ぼくはあわてた。いくら勝目がないにせよ自暴自棄になられてはこっちが迷惑だ。

「よし入れてやる」

「だけどね」上月女史が口をはさんだ。

「今あなたがスイッチを入れると、けがらわしい地球人の命令を聞いたことになるんじゃないかしらね」

スイッチにかかった男の指が止まった。

「なんだと」

「さあ、どうしたの。スイッチを早く入れなさい!」

「地球人の命令が聞けないの!」

ばか。こんな子供でも鼻で笑いそうなパラボックスに引っかかるわけがないじゃないか。そんな間抜けな宇宙人がいるはずがない。

「はやく私の命令に従いなさい!」

「どうしたのよ。命令よ」

本当にどうしたのだろう。男の顔は苦痛にゆがんでいる。ひよっとすると成功するのか。女のやけっぱちほど恐ろしいものはない。

その時ぼくの身体に誰かが触れた。出二軒さんの低い声がした。

「わりと縛り方がヘタなんですすぐほどけた」

やがてぼくの身体は自由になった。そういえばメンバーは皆んな縄を解いたらしい。男はまったく気づいていない。真剣に悩んでいるのだ。ぼくたちはそっと逃げはじめた。ごつんと音がして小さな悲鳴が聞こえた。

「わぁ。どうしたんだ?」

どうやら星島君だけは、ずっと目を覚まさずにいたらしい。山緒嬢が立上がった拍子に放り出されたのだ。その声で男が気づいてしまった。

「下等生物のくせに、私をだまさうとしたな!」

ぼくたちはいっせいに駆け出した。その背中に男の
声が、

「これより拾秒後に地震作戦を發動する!」

ぼくらは出口を探しながら無意識に秒数をかぞえた。10・9・8……。

とうとう日本も終わりか。いやだ、いやだっ、いやだぁ!……………

「ねえ、起きなさいよ」

上月女史の声でぼくは目を覚ました。

「じ、地震は?!」

「なに寝ぼけてんのよ」

「寝ぼける?」

「大丈夫か、芋野。さっき頭を打ったのが悪かったか? おまえがすぐくうなされてるんで気味悪くなって起こしたんだが……」

あたりを見まわすと宿舍の旅館の中だった。寝間着姿のメンバーが心配そうにぼくの顔を……、いや、心配そう、ではなくてなんかものすごくしらけた様子でぼくのことを見ていた。

「これ、本気い?」

不満そうな声でパジャマ姿の上月女史が言った。

「今どき夢オチを小説に使うっていうのはどーなんだろうーな」

天井に向かって、たばこの煙を吐きながら出二軒さんが言った。ぼくだってばかばかしかった。作者はどういう神経をしているんだ。

「ちえっ。寝ちゃおう、寝ちゃおう」

星島君は自分のふとんにもぐりこんだ。女性たちも隣の部屋に戻りかけた。と、その時。

「おい、何か聞こえるぞ」

八ツ田氏がささやいた。

「地なりだ！」

「来るぞ！」

「まさか」

「きゃあ」

「うお」

「だあっ」

その直後ぼくたちは、大きな地割れを感じるとともに、もみくちゃにされるような激しい揺れに襲われた。ぼくはこの世の終わりを悟った。まさに今、作者

がこの作品のあまりの出来の悪さに自分で腹を立てて、原稿を引き裂き丸めて捨てるころなのであった。

（未発表作品）

『ピラミッドパワー大騒動』の直後に書いたラフな草稿。今回（二〇一五年）小説として読めるように全体的に整理し、また、終わり方がわかりづらかったので末尾の数字を書き直した。前作と同じく当時の時代的な雰囲気を知らないとわかりづらいかもしれない。今では時代が一回りして「黒縁メガネ」や歴史的仮名遣いがむしろ流行しているが、七〇年代末には古くさいものの象徴であった。

花 火

子供が、息を飲む。

あちこちで、ではじめたガスの固まりは、凝縮し、発光し始めた。……星。

星々の集合はまるで液体のように流れ、渦を巻き、銀河を形成していった。

銀河集団は、時として、集まって壁を作り、泡構造を構築し、衝突し、ねじれ、離散した。

あらゆる波長の、「ひかり」が飛び交い、また、吸収されていった。

その間にも、なお、巨大に膨れ上がった宇宙のボールは、ガラガラと輝きながら、勢いを落とすことなく、ぐんぐん膨張し続けた。

「きれい……」

思わず子供は、乾いた声をもらす。

「……静かに、しているんだよ」

父の、ささやく声。

その父に、黙ってしがみつく子供。

暗黒。

父と子は、息を詰めたまま、寄り添って、虚無の暗闇を見つめる。

「その時」が、近づく。

突然、その瞬間、なんの前触れもなく、全てのエネルギーが解放された。

数万分の一秒の間に、宇宙の核は一兆度の熱を暗黒の中に放出し、光と時間が音も無く誕生した。

煮えたぎるプラズマの固まりは、爆発、膨張し、その始原の熱球の中で、激しく反応しながら、物質が創造される。

花 火

赤や金の光で照らし出される父と子の^{おもて}一面。

星々は、生まれる毎に、次々と青白く光り始め、やがて黄色く輝きを増し、次第に赤く膨れ上がって、破裂した。いくつも、いくつも、星は、消滅し生成した。光のあぶく。

そして、銀河もまた。

その星々の周囲には、目には見えないほどの、微細な粒子が回転する事もあった。

その粒子の上に、水が生まれ、植物が生まれ、動物が、人類が生まれていく。人類は、文明を生み、そして破壊する。

しかし、そうした全ても、やがて、いつか、星の破裂とともに、その終局の炎の中に飲み込まれていくのだ。

「父さん……」

父の顔をうかがう子供。

「あれがきれいなのはね、」

父の、かすかな声が応える。

「そこで燃えているものが、美しいからなんだよ」

静かで、確信に満ちた声。

キラキラと輝いては燃えつきる星々。

いつの間にか、宇宙はその拡大のスピードを落とし、収縮へ向かっていこうとしている。

黙りこくったまま、夜空一面に広がった花火を見つめ続ける父子。

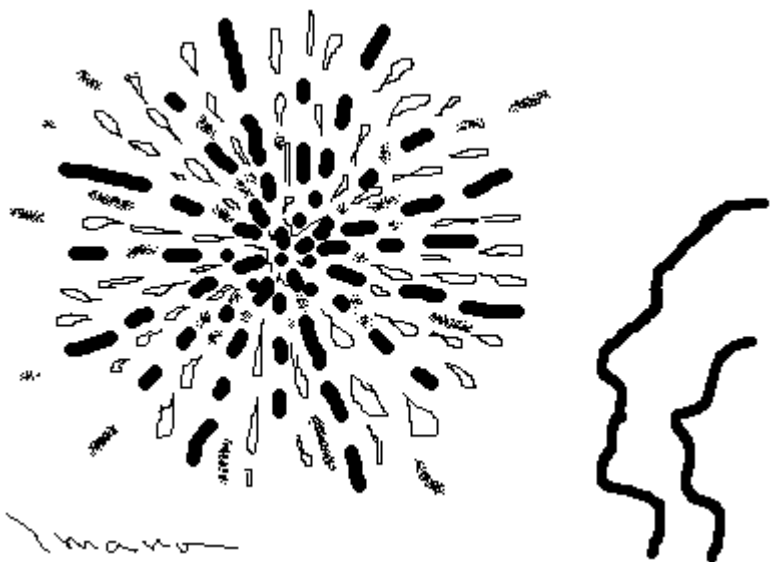
その背後には、なお、花火を包み込もうとするかのように、ただ無限の暗黒。

(了)

(Creative Synapse 1996.8.23 版)

大学卒業後は家を出たのだが、その十数年

間は小説を書く余裕が（物理的にも、精神的にも）ほとんどなかった。その後、それなりに色々な経緯を経て、やがて親と再び同居するようになる。その際ウインドウズ・パソコンを買ったので、パソコン通信を始めようとしたのだが、クレジットカードの審査が通らず、当時最
大手であったニフティサーブに入会することができなかった。そこで電話で直接結ぶことのできる草の根BBSを探し、出会ったのがネット文芸同人「星街通信／Creative Synapse」であった。その後数年間は、この草の根パソコン通信サークルが、多くの主要な作品発表の場となる。



お餅を食べたウサギ

昔のことじゃったと。

山に、いたずら者の若いウサギが、一匹住んでおった。

このウサギ、村の百姓がせっかく作った畑は荒らす、仕掛けてあった梁やなは壊すと、手が着けられん。しかも、人が困るのを見るのがおもしろくてするのだから、なおさら始末が悪い。

そういうわけで、村里の者達からは、すっかり嫌われ、今では、山の一軒家に住む、じい様とばあ様の他は、誰も相手をせんようになってしまったんだと。

そんな秋の、ある夕暮れ時のこと。

山の峠の道ばたの小岩の上で、ウサギは寝ころがり

ながら、サラサラ鳴るススキの音を、退屈しながら聞いていた。

すると、里から帰って来る途中らしい一軒家のじい様が、峠の道をやってきた。

じい様は腰に小さな包みをぶら下げ、杖を突き突き、よっこ、よっこと登ってきた。

ウサギは、鼻をククンと一つ鳴らすと、びよんと、じい様の目の前に飛び出した。

「じい様、じい様。その腰に吊してあるのは、そりゃ、なんだ？」

「何じゃ。ウサギか」

じい様は、ちらりとウサギを見ると、いったん足を止めて、うーんと、背伸びを一つしたけれど、ウサギの質問には答えずに、黙って、脇をすり抜けた。

「これは、じい様、いよいよ耳が遠くなったわい。それとも、ぼけてしまったか。棺桶片足つっこんでるか」

かまってもらえないとなると、ウサギは、今度は腹立ち紛れ、しつこく、はやし立てながら、うるさくじい様の周りを駆け回る。

「まったく、しようのない悪ガキじゃ」

じい様は、あきれて、ついつい立ち止まった。

「よう、じい様。その腰の包みは何なんだ。いいものならば、俺にもおくれ」

「ウサギにゃ、用のないものじゃ。お帰り、お帰り」

「そんなこと言わず、教えておくれ」

しょうことなしに、じい様は、ウサギの相手になつてしまった。

「これか。これは、餅じゃ」

これを聞いたウサギののどが、ゴクリと鳴った。どういうわけだかこのウサギ、餅が好物。こうなると、こいつを食いたくて食いたくて、たまらなくなった。

どうしたものか。と、すぐ胸の中で、ポンと手をひとつ打った。

「ほほお、餅とな。して、餅とはどんな物だ」

「餅を知らんか。餅と言えば、白くて丸い食い物んじゃ」

「なんと、それなら、お地藏さんにおそなえしている饅頭だ」

「何々、そうではねえ。餅は米で出来てるで」

「それなら、お月見のお団子だ」

「そうではねえて。餅はもつと粘るんじゃ」

「そんな食い物、聞いたことが無え。悪いがちよっくら、その中身、見せてくれ」

「ならん、ならん。これは、大切な餅じゃでな」

「あはは。解った。どうりで爺さん、見せられんはず。さだめし、俺をたぶらかそうとしているんだろ。いや

いや、そうではないか。これは、爺さん、もうろくしてるに違いない」

「なんと、何も知らん子ウサギが！」

じい様の怒るまいことか。

「よおし、そんなら、これでどうじゃ」と、おもわず、じい様、腰の包みを広げてしまった。

ウサギはぴょんと近づいた。

竹皮の中に、ついたばかりの真っ白いうまそうな餅がのっている。キビだのアワだのではない、本物の餅米で作った餅だ。

「どうじゃ、これが餅と言うんじゃ」

「そうか、これが餅とのか。そういえば、少うし
思い出してきたような……」

ウサギは、も一度びよんと近づいた。じい様が持つ
餅に、鼻を近づけてはクンクン動かす。

じい様が思わずその手を引っ込めようとした、その
時。ウサギはふいに餅をパクツとくわえ、すばやくび
よびよん逃げ出した。

「あー、こら、ウサギ。それはおまえにやれねえぞ。
返してくれろ。返してくれろ」

じい様はあわてて、大声をあげる。

「ふふんだ。じい様、やっと思い出したぞお。餅は俺
の大好物の食い物じゃった」

ウサギは捨てぜりふを投げつけると、草むら深く逃
げ込んだ。

そこでむしゃむしゃ、じい様の餅を食らってしまっ
たんだと。

その晩のこと。

ウサギは、よっぽどじい様が悔やしがっておろう、
その姿を一目見てやろうと、夜道をびよんびよん、じ
い様の一軒家へと出かけていった。空には、まん丸の
お月様が出てござった。

じい様の家は、山の中のあばらやで、明かりもつけ
ずに、ひっそりしていた。虫の音だけが、響いていた。
ウサギは、板壁の隙間から、そうっと中を覗いてみ
た。

窓から差し込む月の明かりで、じい様がばあ様の枕
元に座り込んで、なにやら、もぐもぐ言っておるのが
見えた。

「ばあ様や、すまんのお。今日も餅を買ってこられん
かった。明日まで、待っておれよ。里の茶店で売っと
る餅は、ほれあのお月さんみたいに丸くて白くてうま
いぞ。これを食えば、おまえもうんと精が付いて、す
ぐに元気になるじやろうて」

見れば、ばあ様はやせ細って、息もせいぜいと苦し
そうだった。

じい様は、ふらふら立ち上がると、土間の隅の瓶かめ

の中をのぞき込んだ。

「来年の種^{もみ}粉にと^{もみ}思^{もみ}って取^{もみ}っておいた米じゃが、これを売^{もみ}ったら餅の一つも買^{もみ}えるであろ^{もみ}うて」

じい様は、一度、^{もみ}粉を両手ですくい、それをまたサラサラと、瓶^{かめ}の中に戻した。手元が心許なく、ふるえていた。

ウサギは、その時、ふと見渡して、家の中から、いつも見慣れた、釜^{かま}だの蓑^{みの}だのツヅラだのという、道具のたぐいがずいぶん無くなっているのに気がついた。

さては、あの餅は病気のばあ様に食^くわせるために、じい様がやっとの事で買^かってきた餅だったのか。ウサギは腹の奥の方が、急に重く冷たくなった気がした。長い耳から血の気が失せて、しおしおと倒れてくるようじゃった。

ウサギは、ばあ様がいろいろ優しくしてくれたことを、いっぺんに思^{おも}い出した。もちろん、じい様だって嫌いな訳ではない。今日のことだって、ちょっとからかうだけのつもりだったのに。

「これはえらい事をした」

ウサギは、さっきまでの元気はどこへやら、さすが自分の巢^ね穴へと戻^{かえ}っていった。

けれども、一晩中、ばあ様の看病をするじい様の姿が浮かんできて、眠^ねることは出来なかつた。

さて、翌朝ウサギは、びよんびよんと、たいそう跳んで里へ出た。里に来るのは、久しぶりだ。

いつもなら、そこら辺の畑にもぐり込み、ほじくり返して、水気が多い甘い人参^{ごぼう}なんかをかじって回るのだが、今日は、どんどん人の家のある方へ近づいた。

村の衆に見つからんように、あちらこちらの茂みの陰や、木立の陰やらを、ごそごそ走り回っているうちに、たまたま大きな屋敷の裏庭に出た。

なにやら、表の方がやけに騒^{さわ}がしい。なんだか、祝い事でもあるようだ。

しめた、と、ウサギは喜んだ。

開^{ひら}けっ放^{はな}しの縁側に、弾^{はじ}みをつけて跳^はび上がったみると、仏間のようだ。思^{おも}った通りに、仏壇の線香の

前に、うまそうなつきたての真っ白い大きな餅が、供えられておった。

「なんの祝い餅かは知らないが、どうせ位牌が食うものでなし、ここは俺にひとつつくれろ」

と、ウサギは座敷に上がり込み、一つ大きく息をして、供えた餅に飛びついた。

と、ちょうどその時、ふすまがばあっと開かれた。

紋付きを着た男たちが、赤い顔をさせながら、がやがや言って、入ってきたのだ。

先頭にやってきた髭の男が、

「それじゃあ、みなさん、先代に報告を……」

と、仏壇の方を見やると、折しも餅をくわえたウサギと目が合った。

男とウサギは、お互い思わずパクリまばたきしあう。ウサギは、挨拶がわりに、小首をちょこっと曲げてみた。

「こらっ、ドラ猫だ！ いや、ありゃ野兎じゃ！」

我に返った髭男が怒鳴ると同時に、ウサギは餅くわえたまま、ポオンと仏壇から飛び降りた。拍子に、

灯明だの線香だのがバラバラ倒れた。

「こらあ！」

追い込もうとする男達を、巧みにかいくぐって、ウサギはびよんと庭へ出た。男らもそれを追っかけて、飛び出して来る。

ウサギに向かって石やら、棒やら飛んできた。がつんがつんとウサギの背中に固いものがぶつかった。

けれども、ウサギはくわえた餅を落とさぬように、叫び声が出そうになるのを何度もこらえて走って逃げた。

ウサギが、やっとの思いでじい様の家にたどり着いた頃には、日はもう山の端にかかっていた。

夕焼けが、遠くの山を染めていた。

「じい様、じい様、開けてくれ」

ウサギが、戸口で声をかけると、しばらくたって、板戸がギンギンはずれるように開いた。

「なんじゃ。ウサギか。すまぬが今は、おまえにくれ

るものは何にもないんじゃ。悪いが、今日は帰っておくれ」

「そうではねえ。今日はおまえのばあ様にこれ食わそうと持ってきた」

ウサギは庄屋の家からくすねてきた餅を差し出した。

じい様は、それを見ると、目を細くして、なんとも優しい声で言った。

「そうか。そうか。それは本当にありがたい。いたずら者とばかり思っておったが、どうして優しいところがあった。

「じゃけれど、どうか、それはおまえが食ってくれ。うちのばあ様には食えぬでの」

そのとき、ウサギはじい様の後ろに寝ているばあ様の顔に、白い布がかかっているのに気がついた。

ウサギは、餅をその場に取り落とすと、わんわん泣きながら、山の中へと駆け込んでいった。

それから、ウサギは草もくらわず、根もかじらず、巣穴でじいっとしていたと。夜になったらぼんやりと月を見上げておったのだと。

ススキの原が広がり、やがて木の葉も皆落ちた。その目は赤く腫れ上がり、だんだんやせていったのだと。いつの間やら、ウサギの姿が消えたことに、誰も気づくものはおらんかった。

けれども、満月になったら、月を覗いてみるといい。ウサギは今では、ばあ様のために、そこで餅をついている。

(了)

(Creative Synapse 1996.9.23 版)

昔、父が寝る時に話してくれた「お話し」を
原型にした作品である。

ある雪の朝突然に

彼女は、復讐に現れたのだ……。

その朝目覚めてみると、この二階にある狭い自室のベッドの上に、久しぶりに、窓から日が射していた。

しかし、ひどい冷え込みようだ。ヒーターは時間通り忠実に始動したのだろうけれど、布団からはみ出した肩のあたりがだいぶ冷たかった。私は決意を固めると、一気に布団を跳ね上げてベッドから飛び出し……、ヒーターにかじりついた。

「あー、さぶ、さぶっ」

窓の曇りを手のひらで拭いてみる。やはり。

昨晚、一晩中降り続いたのだろう、私が初めて経験するようなドカ雪だった。見える範囲すべてが純白の柔らかなフォームに包まれている。無音の銀世界……。

すぐ下を走っているはずの県道も、駐車場も、車も、何も見えなくなっていた。まあ、とはいっても、そもそも、この山の中の峠道では、いつだって杉の木立に囲まれているので、見晴らしが良かったことはないのだけれど。

今日は、その目の前の林でさえ、まるで、西洋の幽霊が集団で押しかけてきたような姿になって、その白い表面をきらきら輝かせていた。朝の光の中で、すでにまぶしいほどの景色だ。軒先からは、早くも溶けだした雪の滴が、窓ガラスの外をポタリポタリと落ちていった。

美しい。

ここに住み込むようになって五年だが、やはり、こういう眺めは、いつ見ても美しい。ただし、この自然の芸術品の鑑賞料は、ちょっと高い。この後待っている重労働で、たっぷり支払わなければならないのだ。

私は、昨日脱ぎ捨てにしておいて、冷たく冷え切ってしまったズボンとシャツと、セーターを手早く着込むと、ヒーターのスイッチを切って、一階の店へ降り

ていった。

ここは、山のレストラン、といえればちょっとは聞こえがいいが、要するに、峠をドライブに来る観光客相手の、喫茶店に毛の生えたような小さな店だ。もちろん、私がオーナーで……あるはずがない。実のところ、雇われマスターですらない。マスターは調理師免許を持っているオーナーのいところで、私はただの管理人兼ウェイターにすぎない。とはいえ、客の少ないウィークデイなど、ほとんど私が一人で切り盛りするのではあるが。

アルプス風の、鋭く上がった屋根を持つ店の二階の、いわば屋根裏部屋が私の住まいで、たまの休みにふもとの街か、(時には)車で二時間半ほどかかる県庁所在地の街に出かける以外、二十四時間、三百六十五日、私はここで暮らしている。

夏は、涼しくて過ごしやすく、文句無くいいところだが、一年の半分ほどある雪の季節ときたら……。雪というのは、面倒くさくて、やっかいで、始末に

困って、その上、恐ろしい。地元の人がそういうくらいだから、まだこの土地で日の浅い私などはなおさらだ。とにかく、今日は、県の除雪車がやってきて、道路の雪かきを終わるまでに、店の駐車場の方の雪を何とかしなければならぬ。

こんな雪の深い日に、やってくる客もないだろうとは思うけれど、県道脇の店に車が停められないんじゃ、掴まえられるお客も掴まえないというもの。それに、雪に慣れない東京の人間は、こんな日だって平気でやって来たりするのだ。哀れに立ち往生した都会の人を暖かく迎えてやれば、東京都内の三倍の料金を請求したといって、くっつかかってくるやつもないだろう。

もともと、私が東京を離れた直後発生した、あの東京神奈川大震災によって、首都圏が大打撃を受けてから、お客の数はめっきり減ったと言われているが……。

いずれにせよ、まずは、駐車場の雪かき(というより「雪ほり」だけれど)、これが今日の最優先の仕事

に決まった。ああ、また、筋肉痛に苦しまなけりやならないわけだ。

などと、ぼんやり考えながら、私は店の中のストロブを付け、「凍結防止のために」冷蔵庫に入れてあったペットボトルの水道水を、やかにあけてガスを付けた。同じく冷蔵庫に入れてあった食パンを、自分のためにトースターに入れ、こちらは昨日から商売用のビーフシチューの鍋を載せっぱなしにしてあったレンジにも火を付ける。

と、その時、入り口のドアが、がたがたとなった。思わず、そちらを見やると、ドアの磨りガラスの向こう側に、明るい雪の照り返しに浮かび上がった黒い人影が見えた。

さすがに、一瞬、どきりとする。こんな日に来訪者があるとは……。いや、しかし、オーナーかマスターが心配して様子を見に来たのかもしれない。もう一度、いらだたしげに、ドアが震えた。

「あー、ちょっと待って」

外にいる人物に聞こえないだろうとは思いつつも、声をかけて、私は玄関へ走り寄った。

がたがたと、なおも外の人物はドアを揺さぶる。

「ちょっと、ちょっとお」

私が、ドアの鍵を開けると、勢いよく入り口が開いた。そして……。

そこにいたのは、全く予想もしていなかった一人の女性だった。その人は、よくある安手のスタジアム・パークのフードを頭からすっぽりかぶったまま、赤い頬の笑顔で、こう、まくし立てた。

「あー、よかった。いないんじゃないかと思っちゃった。何よ、この雪！ クルマが走れなくなっちゃって。もう死ぬかと思った。あ、ストロブ！」

彼女は、私の脇をすり抜けて、ばたばたと店の中に走り込み、大きな据え置き式の石油ストロブに駆け寄った。

フードの中から半分のぞく、その顔。その唇。しなやかなその身のこなし。

頭の中が、瞬間、空白になった。

なぜ彼女が！

口もきけず、体も動かず、目を離すこともできずに、私は、硬直した。

「君が……、どうして」

やっと出すことのできた声は、自分のものでないかのように、しわがれていった。

彼女は、フードを脱ぐと、こちらを見てほえんだ。

そして、今度は落ち着いた声で、ゆっくり言った。

「覚えていてくれたのね。ありがとう」

忘れるはずがなかった。

彼女は、叡子は、五年前「別れた」、いや、正確に言おう、私が「捨てた」、かつての恋人だったのだから。

彼女に求められるまま、私は夢遊病者のように、カウンターに入ってコーヒーをいれた。他にどうしたら良いか、思いつかなかったのだ。

しかし、不思議なもので、いつもと同じ仕事をして

みると、いくらか動揺も収まって、彼女の様子を観察することもできるようになってきた。本当のところ、信じられないことだが、彼女は実際に目の前にいる。そのことは認めるしかない。

彼女は、カウンター正面のテーブル席に座り、頬杖を着いて、右手に大きく開いたガラス窓から、熱心に外の景色を眺めていた。

その横顔。ふっくらした頬。涼しげな瞳。無造作にポニーテールにしたロングヘア。ひとけのない薄暗い店内に、窓から差し込む光を浴びた彼女の顔だけが、妙に生き生き浮かび上がる……。

不意に、彼女は笑顔を私の方に向けた。

心臓が、びくと鳴った。

「変わらないわね、あなた」

そんなことはない。私はこのごろずいぶん腹が出てきていた。この数年、急速に歳をとってきたような気がする。変わらないのは、彼女の方だ。

なぜか、人を引きつけずにおかない、その魅力。彼女こそ、全く変わっていないかった。

「おまちどう」

私は、コーヒーを二杯、両手に持ってテーブルに行き、彼女の正面に腰を下ろした。

彼女は、黙って、コーヒーに口を付けた。普通りのブラック。

「おいしいわ」

でも、叡子はそんなにコーヒーが好きではなかった。この一言を言うために、彼女は、私にコーヒーをいれさせたのかもしれないと、ふと思った。

「あー……その、元気そうに見えるね」

「ええ、何とかね」

二人とも、互いの目を見なかった。

彼女はぼつり、という感じで言った。

「ずいぶん探しちゃった……」

「……すまなかったと思ってる」

「ううん、いいの。会えたから……」

私は、五年前、誰にも告げずアパートをたたみ、全く知り合いないこの土地へやってきた。幸い、すぐにこのレストランの住み込みの仕事が見つかって、

以来、この田舎に半ば閉じこもる生活を続けてきた。過去の人生をすべて捨てたというわけだ。

彼女は顔を上げて、もう一度ほほえんだ。けれども、その笑顔の下には、一言一言を慎重に選ぶとする。緊張感が見て取れた。

「学校がどうなったか、知りたい？」

私は、黙り込んだ。

そう、かつて、私は、中学校の教員だった。そして……、若くもあった。

子供と学校をめぐる、陰惨とも言うべき様々な話は、いまさら私が語るまでもない。いじめ、暴力、薬物、体罰、詰め込み教育と、キーワードならたくさんある。

結局、問題は、私のような人間が、あえてそのまった中の世界に、職を求めてしまったことの方にあろうのだから。

私と同期くらい多くの教師達は、不思議なことに、いつの間にか（それとも最初からなのか）こうい

うキイワードに「慣れて」しまおうらしい。私だって、気にしないで済ます方法を知らなかったわけではない。しかし、私はどうしてか、こだわりを捨てることができなかったのだ。

それは、いじめられっ子だった私が、いつの間にか身に付けた「力に対する嫌悪感」の発現であったのかも知れない。

まだ、学校には、かつて「日教組の闘士」だったような先輩教師が若干は残っていて、そうした一人に誘われるまま、私は教員の自主的な勉強会などにも参加したし、自分で考えた独自の教材を使ってみたりして、「よりよき」教師たらんと努力をしたのだった。

しかし、それは残念ながら、現在の学校においては、校長を筆頭とした管理体制と、有形無形の様々な軋轢あつれきを生み出すことを意味する以外なかった。

「そうよね。学校のことは思い出したくないよね。いの、本当はそれも。ただ、話題がなかったから、聞いてみただけ」

彼女は、なんのために現れたのだろうか？ やはり、復讐？

彼女、織布叡子は、そんな私の学校に赴任してきた、新任の英語教師だった。

叡子を勉強会に誘ったのは私だった。まず間違いない、当時の私たちのような「反抗的」な教師グループに関わりうとするものはいない。断られるに違いないと思いつつも、とにかく声をかけてみた。

意外にも、彼女は至極あっさりとして、勉強会に加わった。しかも、すぐにわかったのは、彼女のその頭のよさだった。

メンバーが直面している具体的な問題を討論すると、彼女はその深層にある本質を的確に洞察したし、そして、それをまた、極めて原則的な立脚点から論理展開して、柔軟な解決策へと導くことができた。

少し頑固ではあったが、物怖じせずに見聞を述べ、しかも明るい、私は、そんな彼女に急速に引きつけられていったのだった。そして彼女もまた……。

「あたしね、あなたがいなくなったことが納得できなかった。なんて言ったらいいの、とても不条理なところのような気がしたの」

レンジの上のシチューが、煮立ちはじめコトコト鳴った。

彼女がなぜ私を愛したのか、私には今もってよくわからない。しかし、お互いの感情は、ほとんど物理的と言って良いほどの激しさで、急速に増幅していった。そのうえ、彼女は私を頼りにしているらしかった。私には彼女ほどの論理性も直感も行動力すらなかったのに。

「あなたはあたしを支えてくれた」

「そんなことなかったんだよ。僕は自分を支えるだけで精一杯だった。でも君の前では、強い人間を演じているしかなかったんだ。君を失わないために」

私たちはそのころ本当に良く語り合った。政治のこと、小説や映画や音楽のこと。それだけでただ楽しかった。もちろん話題の一番の中心は、当然、学校と教育のことだった。仕事は苦しいことも多かったし、困難な問題も山積みだった。そんな中で、私たちが、お互いを支え合っていたことは間違いない。

ただ私は、心の奥底にしまい込んでいたが、ひとつの後ろめたさを常に感じざるを得なかった。彼女が私に求めたのは、仕事を前向きに進めていくための活力であったが、私が彼女に求めたのは、仕事のつらさを忘れさせてくれることだったのだから。

「ここは、きれいなところね。きれいすぎるくらい……」

ふと、観子は窓の外の景色に目をやって言った。その声にかすかに感じられるのは、不安？

それは、四月の平凡な人事異動から始まった。私たちのグループのリーダーだった古参教員は、ずいぶ

んと離れた学校に転勤させられ、校長も替わった。この新校長こそ、学校関係者の間では特に有名な超保守派で、これまでいくつもの学校で、管理強化を「成功」させてきた男だった。明らかにこれは、わずか四、五人しかいない我々の活動をつぶすために敷かれた布陣だったのだ。

他の仲間達より少し年長だということ、私は突然リーダー格になってしまった。当然、私は校長からの攻撃の矢面にさらされることになった。これまで、リーダーに寄りかかるばかりだったのに、今度は一転してメンバーを守る立場に立たされることになったのだ。

きびしい管理体制は、実に巧妙にかつ執拗に実行された。表面的には、露骨な差別や選別はしないが、職員室の内外では私たちのグループに対して、悪意のある噂がばらまかれた。一方で、研修に名を借りた思想統制が強まった。自主勉強会のメンバーは他の教師からの孤立感に苦しみ、校長から押しつけられるあまりに過剰な仕事量の重圧の下で、次第に追いつめ

られた気持ちになっていったのだった。

しかし、叡子は、その中でもよくがんばった。彼女が学校当局に反論するとき、その論理は、論理そのものとしては全く正しかった。しかし、古ダヌキ達相手には、貫禄負けというのか、小娘の戯言ざれごととして、簡単に一笑に付されてしまふのだった。

彼女は私の前では、よく悔し涙を見せるようになり、時には、ヒステリックになった。

もちろんそのころには、私も、自分自身を守ることで精一杯になっていたが、彼女とメンバーの前では常に強そうなふりを続けた。本音で話しあうことが何よりも大切だったのだろうけれど。そのことが頭でわかってはいても、ついにそんな風にはできなかった。

「あのことは、あなたのせいじゃないわ。誰もあなたを責めてない」

もちろん、彼女は一度だって、私を責めたことはなかったが。

事件が起こったのは、そんなさなかだった。私のク
ラスの生徒が、事故死したのだ。その生徒は大雨で
増水した川に落ちて死んだ。遺書はなかった。警察で
は、自殺か事故か判断することができなかった。

しかし、PTAから、はじめによる自殺であるとい
う声があがってきたのだ。担任に責任があるという非
難の声が、一斉に私に向けられた。何か信ずべき根
拠があったのか、それとも、裏に校長の策謀があった
のか、それはわからない。しかし、自分の生徒が死ん
だというショックにくわえて、連日の校長やPTA役
員との拷問に似た話し合い、もしかしたら自分のやり
方に問題があったのではないかという自責の思い……
ストレスは限界に達した。

夜眠れなくなった。一日中頭が混乱した。もう授
業どころではなかった。叡子だけが私の支えだった。
しかし、彼女自身も目の前の自分の問題が重いこと
は明らかだった。結局私は最後の最後まで、彼女を
支える役を演じるしかなかった。

その前後のことを今ではなぜか、はっきりと思い出

せない。私は、とにかくここから逃げ出せれば、他は
どうでもよいという気持ちになっていたのだろうと思
う。ある日私は学校を休んで、下宿の数少ない家財
道具と、大量の本を一気に処分し、アパートの大家
に解約を申し出、辞表を書いて学校に郵送した。

しかし、それ以外は、叡子にもメンバーにも書き置
きすらできなかった。彼らを見捨て、自分の責任を
放棄することをどう説明したらよい？ 何も言うこと
などできなかった。何を言ったところで、自分が許さ
れるなどとは思えなかった。

どうするというあてはなかった。できることなら、
静かに消えてしまいたいという思いで頭の中はいっぱ
いだった。

私は、責任の重さに押しつぶされた。いや、自分自
身に押しつぶされたと言ったほうがよい。

「僕は君を守りきれなかった。他のみんなのことも。
自分一人で勝手に逃げ出した卑怯者だ」

「あたしの方こそ、謝らなきゃ。あたしもあなたを守

ってあげたいと思っていたのよ。でも、結局あなたにばかり負担をかけちゃったんだよね」

彼女は、無理矢理作ったような笑顔を向けた。

「でも、もういいんじゃないの？ あなたはもう充分苦しんだ。あたしはこたわってないよ。もう、そんなこともどうでもいいの」

冬の日差しは、店の中程まで、差し込んでいた。

シチューのにおいが、かすかに漂っていた。

「……今日来たのは、何か目的が？」

「別に、なんにも。ただ、帰ってきて欲しいとは思ってる。あたし、あなたにすっかり嫌われちゃったのかもしれないけど。あなたの重荷になっちゃったから。」

「だから、なにも、あたしのところに帰ってきてと言ってるわけじゃないの。先生をやるのがいやなら、学校に戻らなくてもいい。でも、こんなふうに隠遁するような生活はおしまいにして、もう一度、元のあなたに戻って欲しい」

もちろん、私は彼女を嫌ったことなどない。ただ……

「もう僕は昔の僕じゃない……、いや、というよりはこれが本当の僕なんだと思う。この生活に満足しているし、ここでは何の進歩もない代わりに、何も起らないし、平和に暮らすことができるんだ」

「そんなの、そんな言い方、悲しいよ……」

「僕なんか、もともと教師なんて向いてなかったんだ。そもそも人間嫌いだし、他人とまともにつきあうこともできない。ましてや、子供の気持ちも分からなかったし、君にとっても良い相手じゃなかった。そんな人間なんだ、僕は。だからこういう生活でいい……」

「もうやめて！ あなたは、そうやって自分を傷つけることが、他人も傷ひとつけることになるということが解らないんだわ。どうして、そんな風に、自分の目からしかものを見ないの？」

彼女は、私の言葉をさえぎって、叫ぶように言った。私は口をつぐむしかなかった。それに、私にはまだ、彼女の真意がつかめなかったし。

しばらくの沈黙があった。ドサリと、どこかで、雪が落ちる音がした。私はおもいきって、口を開いた。

「……もしかしたら、君は、僕が君のことを忘れることを許さないために、ここへ来たんじゃないの？ それも……。」

「それも、僕には二度と君に懺悔することができない、いや、会うことさえできないことを承知の上で。僕に一生、君にした仕打ちを後悔させるために。これは復讐なの？ こんな事言う資格なんかないかもしれないけど、君のやり方は残酷だ。だって君は……」

あの日、あの東京神奈川大震災の日。私が東京から逃げ出した数ヶ月後。

私は確かに、この店のテレビに、その名前が映るのを見た。翌日には、手に入る限りの新聞を買いあさった。実をいえば、彼女の実家にまで電話さえした。

しかし、最初のテレビの報道を誤報だと言ってくれるものは、どこにもなかった。

彼女は……。

彼女は、その時、火にまかれ始めた校舎の中に、最後に残った生徒を助けに、飛び込んでいったきり……

…、帰ってこなかったのだ。

アナウンサーの表情のない声が「オリフ・エイコさん」と読み上げたのを、私は、確かに聞いた。私の懺悔の機会を、永遠に奪う言葉を。

そう。

彼女は死んだのだ。

「だって君は、死んだはずだ……」

私は、やつのこと言葉押し出した。

彼女は、とまどった表情をして、私を見た。

「何を言ってるの？」

彼女は、こわばった声で笑おうとした。

私は、怖くて今まで見られなかった光景を見るために、ぎこちなく、表側に向いた一番大きい窓に近づいた。

凍りつき、抵抗する窓を、ぶちこわすような気持ちで、開けはなつ。冷気が、一気に吹き込んでくる。

そして……。

降り積もった雪は、午前中の太陽に照らされて、キラキラ輝いていた。しかし、どんなによく目を凝らしてみても、県道があるはずの方向からも、裏道の方からも、そして、玄関のすぐ前にさえ、……何の踏み跡も無かった、兎のものさえ、全くないにも。

私は、窓を閉めた。

自分の声が震えるのがわかった。

「君は、君はやっぱり幽霊なの？」

彼女は、悲しそうに、ため息をついた。

「あなたは、いつもそうね。自分の立場からしか考えられない。良くも……悪くもね」

叡子は、いや叡子の亡霊は、泣きそうな顔をして、私を見据えた。

「なぜ、自分の方が生きてるといえるの？　こんな……」

彼女は、両手を広げて、店内を指し示した。

「こんな、完璧に美くて、あなた一人しか存在しない世界が、本当にあると思っているの。」

「あなたにとって最も理想的な、平和で穏やかな世界。でも、これじゃまるで母親の胎内じゃないの。」

「これが、みんなあなたの夢の世界の出来事かもしれないと、疑いもしないの？」

なんだと？

「ねえ、もしかしたら、あなたがここで暮らした五年間なんて無かったかもしれないじゃないの。あなたは、確かに、あの時アパートの部屋を整理した。でも、それは、あてのない旅に出るためなんかじゃなかった。」

「あなたは……、あなたは、薬を飲むために、部屋を整理した。すべての後始末をして。そして、今、あなたは病院の集中治療室にいる。あたしが見つけたから」

今度は、私の方がとまどう番だった。

こいつは何を言っているのだ。私は無意識に、もう一度、外の雪景色を眺めた。

「その真っ白い雪は、あなたがかすかに感じている病院の壁の色。そのシチュー鍋の音は、生命維持装置の音。あたしはあなたの枕元で呼びかけている。そして、あなたは、長い夢を見ているの。夢の中では五年もたったと感じるほど」

もちろん、これは夢ではない。あまりにもはっきりしている。ほら、林の下の方には、野兎が現れて、まぶしそうに、あたりを見回している。

「大震災なんか無かった。あたしも死んでない。あなたは、まだ何も失っていないの！ ねえ、そんな風に考えることはできない？」

「あなたはちょっと自分の世界に逃げ込んだだけ。必ず戻れるわ。あたし信じてるもの！」

「お願い、ここにはだめ。どうか帰ってきて。もう、時間がないの。この世界にとらわれたままでいたら、あなたは……！」

シチューの鍋の煮える音が、静かな店内に、心地よく響いた。

振り向いたときには、彼女の姿は無かった。ただ、コーヒークップが二つ、もう冷え切って残っているだけだった。

私は、二、三度強く瞬きをして、頭を振ってから、カウンターの中间に戻った。もうすっかり冷めてしまったトースターの中のトーストを、飲みこむように腹におさめると、身支度をして外に出た。

天気は本当に良かった。サングラスをしてもまだ、この一面の雪景色は、目にまぶしい。自分以外に人間が存在する痕跡は何も見えない。

空を見上げる。

雲一つなく、どこまでも深い、美しい空。なんの音もしない。

さっきのは、私の幻覚だったのか。それとも、叡子は本当にやってきたのだろうか。彼女は、私を励ましに来たのか、やはり、復讐に来たのか。そうだとすれば、彼女は目的を達成したのだろうか。なぜなら、最

おもい出し
も思い出さなくなかった感情を、私の胃の奥の方に、
おもり
錘のように固めてしまったのだから。

彼女をまだ愛しているということ。そして、彼女
が永遠に手の届かないところに行ってしまったのだと
いう喪失感を。

でも、しかし、彼女は去り際に、気になることも
言っていた。それは、もしかしたら……。

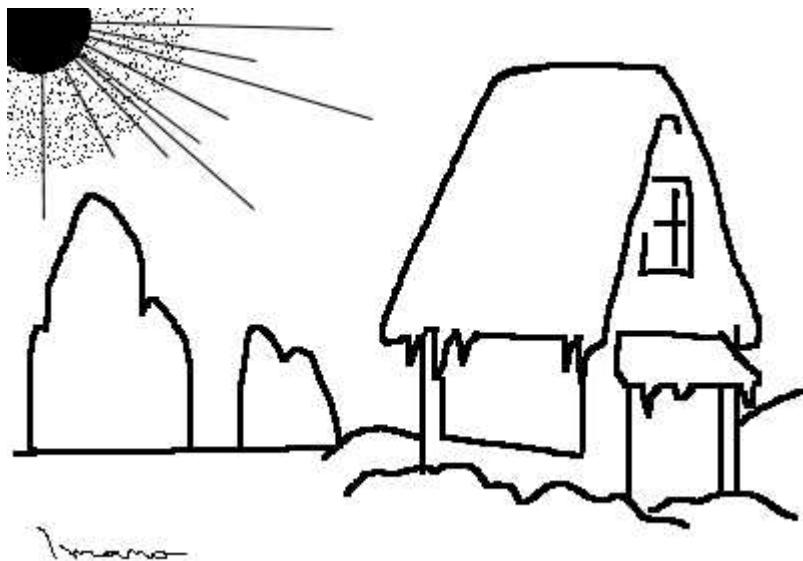
「いや、いや」

私は、気持ちを切り替えて、スコップを目の前の
雪に突き立てた。雪の固まりをひとかたまり掘り起
こす。その下には、また純白の雪。とにかく、はやく
駐車場をえるようにしなければ。

それが、今の私にとって、唯一の責任なのだから。

(了)

(Creative Synapse 1997.1.2 版)



サンタが愚痴にやって来る

作・JUNK-O

えー、毎度ばかばかしいお話を、一席。

クリスマスの日に、人間達から神様に、大量の苦情が届きまして。なんでも、サンタクロースが、プレゼントを配り間違えてるてえんで……。

ほおっておくわけにも参りませんので、神様が、サンタクロースを呼び寄せました。

白い雲の上に、サンタクロースがひれ伏しております。と、

「神様のおなりーっ」

ってんで、一段高くなった板敷きに、神様が、さっと奥のふすまを開けて、長袴を引きずりながら、おで

ましにな……ったかどうだか知りませんが。

(神)「これ、サンタクロース。おもてを上げい。

「その方、今年のクリスマス・プレゼントを配りおる際、忍ペンまん丸とピカチュウの人形を入れ間違うはまだしも、ケーキと燃えるゴミを間違うなど、職務に、はなはだ怠慢であったと申すが、しかと相違ないか？」

(サンタ)「へーっ。面目ございません。誠にその通りでございます。かくなる上は、いかなるお裁きでも、ご存分をお願い奉ります」

(神)「うむ。殊勝である。しかし、それにしても何故、なにゆえかかる間違いをなした？ 苦しゅうない申して見よ」

(サンタ)「いえ、それがね。えー。だから……」

(ミカエル)「これこれ、何を申しておるか、さっぱりわからん。神様もああおっしゃっておいでだ。いいたいことがあるば、存分に申し上げよ」

みかねました大天使ミカエルが、おもわず、うながします。

(サンタ)「そうすか？ そんなら言っちゃいますけど

ね。なんていうか、ばかばかしくなっちゃってね。…
…そうでしょ？ クリスマスでえと、たいていの人は、
好きな人と仲良く、楽しくやってるのにさ。こっちは
独身ひとりものの、ひとりぐらし。話をする相手といやあト
ナカイばかりで。いっつも、一人っきりで。クリスマス
スったって、一日中働きづめで働くだけですからね。
「え？ わざと？ いえいえ、滅相もねえ。わざとじゃ
ありませんや。ただね、労働意欲ってのか、やる気っ
てのがあんまり出なくなっちゃってね」

(神)「なるほど。話を聞いてみれば、わからぬ事も
ない。ううむ、どうしたものか……」

「おお、そうじゃ。こうしたらどうじゃ」

(サンタ)「そりゃあ、いいや」

(神)「これこれ、まだ何も言っておらん」

(サンタ)「道理で何も聞こえない」

(神)「何を申しておる、ふざけるでないぞ……。で、
どうじゃ、その方、妻をめとる気はないか？ いや、
だから、結婚をする気はないかというのじゃ」

(サンタ)「結婚？ 結婚てえとあの嫁さんをもらうっ

てんで？ 参ったな、こりゃ。参ったな。参った、参っ
た」

(神)「一人で、降参しておる。で、どうなんだ？」

(サンタ)「……えへへ、欲しい！」

(神)「そうか、よし。ミカエル、すぐに、サンタの
相手を見つけて参れ！」

(ミカエル)「へへっ」

ってんで、神様、サンタも可愛い奥さんがいたら、
もう一度、しっかり働くようになるだろうと考えまし
て、大天使をサンタの花嫁探しに飛ばしました。

まあ、そこは、天使ですから、「愛のキューピット」
は本職で、すぐさま手頃な娘を……、手頃なんて言
っちゃいけません、サンタに似合いの娘を探して参
ります。

もちろん、ハートに矢を射かけてありますから、一
目会ったとたんに、サンタと娘は熱烈な恋に落ちまし
て、とんとんと結婚ということに相成ります。甘い新

婚生活が始まりました。

ま、神様の思惑がびたりと当たったということ、その次のクリスマスには、サンタは実によく働いたそうです。勢いに乗りすぎて、見そびれた子供に、「ポケモン」の爆発シーンに入ったビデオを届けちゃって、大騒ぎを引き起こしたてえくらいで。

それから、数年がたちまして。

神様、このところサンタがよく働いてるってんで、お褒めの言葉を下されようと、ひさびさにサンタを呼び出しました。

(神)「おお、サンタか。よく参った。このところよく働いているようじゃな。余はうれしigeぞ」

(サンタ)「ははー。ありがたきお言葉、痛み入ります」

(神)「ところで、妻とはその後、うまく行っておるか。苦しゅうない申して見よ」

(サンタ)「いえ、それがね。えー。だから……」

(ミカエル)「これこれ、何を申しておるか、さっぱりわからん。神様もああおっしゃっておいでだ。いいたいことがあれば、存分に申し上げよ」

みかねました大天使ミカエルが、おもわず、うなげします。

(サンタ)「そうすか？ そんなら言っちゃいますけどね……」

(神)「ちょっと待て、余はデジャ・ヴュを覚える」

(サンタ)「神様とミカエル様の前でこう言うのもなんですが、あれはひどい女ですわね」

(神)「何？ そんなにひどいか」

(サンタ)「ひどいものにも……。初めはよかったですよ。新婚の時は、いろいろと、あれがこれだったりして、ねえ……。この、すげべ！」

(神)「さっぱりわからぬ」

(サンタ)「ところが、毎日顔を合わせてるんで、おたがい生活に新鮮味が薄らぐんですね。そのうち、『あなたは何なんだって、この家計の苦しい時に、毎日家でごろごろしてんだいっ。一年で一日しか働かないじゃ

ないか。ちょっとは、アルバイトにでも行ってごらんっ!』なんてね、あつしを責めるようになってきたんですよ。

でもね、あつしだって、遊んでるわけじゃない。子供達からのファンレターの返事を書いたり、トナカイの世話をしたり、まあ、一日……30分くらいは、仕事をしてる」

(神)「そりゃ、少ないよ」

(サンタ)「で、まあ、最近は何方ないんで、宅急便のアルバイトを始めたんですよ。『トナカイ急便』での始めたんですが、神様、あれですね、世の中には空飛ぶトナカイよりも速い生き物があるんですね。飛脚だとか、猫だとか、鶴……」

「でもね、カカアのやつ、そう言っておいて、自分は一月中、テレビ眺めて、寝っころがってるんですぜ。もう、あつしは、情けなくて」

(神)「ううむ。それはすまぬことをした。まったく、余の見込み違いじゃ。許せ」

(サンタ)「何とか別れさせてくれませんか」

(神)「それは……、神の立場としてはちょっと」
(サンタ)「じゃね、また新しくって、ピチピチしたのを二、三人見つくるってくれねえかなあ」

(神)「な、なんと言う不謹慎な」

(サンタ)「でも、アラア様の方じゃ、何人も妻が持てるって言うじゃありませんか。あつち、行っちゃおうかな」

(ミカエル)「これっ! 不遜な奴。神の御前で、何を申すか! ひかえろ、成敗してくれるっ!!」

(サンタ)「すみません、すみません。いや、ちょっと、言ってみただけで。お許しを。た、助けてえ。」

(神)「何か、頭が痛くなってきたぞ。まあよい、ミカエル、許してやれ。」

「それはともかく、サンタ、仕事はずいぶんと熱心に行っておると聞いておるがな」

(サンタ)「そりゃあ、もう、仕事は一番楽しい」

(神)「夫婦仲が悪くても、仕事に支障はないのか。意欲は落ちないのか?」

(サンタ)「いや、仕事は楽しくて、待ち遠しくって

仕方ないんです。いや、だってね。イブの日だけは、
カカアの顔を見ずにすむ」

お後がよろしいようで……。f(「」)m

(Creative Synapse 1997.12.23 版)

「Creative Synapse」の
ハンドルネームでもね。

ウィットを教えてくれた星新一氏に捧ぐ

廃村にて

先ほどまで、かやぶき屋根を濡らして降っていた雨が止んだ。

僕は、フレーミングを考えながら、カメラのファインダーをのぞいたまま歩いてきた。幸い、道路は舗装されている。軽トラックやトラクターを走りやすくするためだろう。しかし、一步、脇道や農家の敷地内に入ると、たちまちぬかるんで、履いていた長靴はすぐにどろどろになってしまう。

僕と、同じゼミのクラスメートである三葉のふたりは、この梅雨の真っ最中に、山奥のある廃村にいた。写真を撮りに来たのだ。……まあ、少なくとも、僕は。

廃村にて
大学で写真部に所属している僕は、恒例の夏の展

覧会を目前にして、どうにも、良いモチーフが見つからず困っていた。そんなところへ、三葉がこの村のこゝとを教えてくれたのだ。

三葉は、ぼくの知り合いの中でも一番の変人で、どこで調べてくるのか、訳のわからない情報をいろいろ知っていた。カルトで、キッチンユで、ついでにカウチポテトな奴だった。

もうすぐダム湖の湖底に沈む村がある、住民は全員移転した後だ。「どや？　そういうの」と、彼は頼みもしないのに、情報を「売り込み」に来た。

とにかく、せっぱ詰まっていた僕は、ふと魔が差して、それを「買う」気になってしまった。

交換条件は、彼が現場に同行するための費用を、半分負担すること。(駅からはタクシーを使ってるので、貧乏学生には、これが結構きついわけ。)

ようするに、彼は、自分がここに来たただけだったのだけれど。

とは言え、実際にやって来てみれば、期待に違わず、ここに、僕の創作意欲をかき立てるものがあつたのは

事実である。

村には、人々の生活のぬくもりが、まだそのまま残っている。にもかかわらず、すでに荒廃の臭いは強く漂い、いたるところで、典型的に田舎臭い風景と、うち捨てられた、まだ真新しい今日的なデザインの家電類が、妙なミスマッチを作り出していた。そこに、降っては止む陰鬱な梅雨の雨が重なって、自分の技量さえ考えなければ、こりゃ絶対「現代を鮮やかに切り取る」傑作が撮れるに違いないと、感じさせるものがあつたのである。

僕は、雨よけのポリ袋でぐるぐる巻きにした、自分にとって唯一の財産であるニコンのシャッターを、夢中で押し続けた。

一方、三葉は、安物のポケットカメラで、時々風景を撮しながら、廃屋になった家に入り込んで、なにかごそごそと、残された家具類をあさっていた。一度などは、大昔のテレビアニメの「ソノシート」(一)を大量に見つけ出して、太った体を揺らしながら、嬉々として自分のザックの中に詰め込んでいた。その姿

に、ぼくは、死肉をついばむハゲタカを連想せざるを得なかった。

それは、ちょうど僕が、路肩の生け垣からしたたる雨粒に、ピントを合わせていたときだった。突然、ぼくの脇腹のあたりに、何か大きくて柔らかいものが、激しく衝突してきたのだ。

不意をつかれて、僕はバランスを失い、道路に転がった。カメラをぶつけないように守るのが精一杯だった。

驚いて、顔を上げると、僕の脇には、一人の子供がしりもちをついて、わんわん泣いていた。

「おーい。三葉あ。ちょっと来てくれえっ」

僕は怒鳴った。

「どないしたん？」

生け垣の裏側から、声が返ってきた。

「ちよっと、こっちへ来てくれ。……俺、子供、苦手なんだ」

「うーん、まだ、移転すんでない家が、残ってたんや

なあ」

推定年齢六歳の子供を前にして、三葉がうなった。

「君、家はどこ？」

子供は、髪をきれいにおかっぱに切りそろえていて、けっこう高そうな、たぶんレインウェアなのだろう、金属的な光沢のある派手な色使いの服を着ていた。性別はちょっと不明。どうも、泣きながら走っていたので、ぼくに気づかずぶつかって来たようだ。

その子は、何か言っているのだが、泣きやんでいないこともあって、僕にも、三葉にも、よく聞き取れなかった。

「ツカイ、ツネ……、ツドリイ……、ヌキ」

「えっ、何？ もっかい言ってみ」

「アカイキツネト、ミドリノタヌキ……」

僕たちは顔を見合わせた。

「今、『赤い狐と緑の狸』って言ったよな」

「ああ、そう聞こえたな。でも何や、妙な訛りがあるて良うわからんわ」

「もしかしたら、腹減らしてんのかなあ。でも、カッ

プ麺なんか、下の町まで降りてかないと売ってないし」

「いや、俺、持ってるよ」

「え？」

三葉は自分のザックをこそごと探ると、ミニサイズのカップ麺を取り出した。

「お前……」

「俺、旅行するときは、必ずこれ持ってくるの。いつ腹が減るかわからんやろ。でも、狐の方しかないよ」

僕は、すっかりあきれた。

「お湯は、どうすんの？」

「んー……、それは、これから考える」

子供が、また一段と、声を張り上げた。そして、三葉が差し出した「赤い狐」のミニカップを、右手で思いつきり、はねとばした。

「おっ！ 何するねん」

三葉は、慌ててカップを拾い上げた。

その三葉に、その子供は、いつの間にも手にしたのか、一見「光線銃」のようなものの銃口を向けていた。

「あれ、ようできてるな。そんなん、どっから出した

ん」

三葉も、僕も、思わず笑顔になった。子供の無邪気が可愛い。

その上、三葉はこういう玩具に目がなかった。よく見てみようとしたのだろう、子供の方に一歩踏み出した。

その子は、涙を目尻に残したまま、キッと三葉を睨み付け、そしていきなり、引き金をぐいと引いた。

バリバリと激しい空電音が響き、閃光が走った。

呆然と立ちつくす三葉の周囲に、いくつもの火柱と煙が上がった。

「お、おい……」

「……本物だ」

「アカイキツネット、ミドリノタヌキノウチツ」

子供は、毅然として、叫んだ。

三葉が、ヘタリと、濡れたアスファルトの上に座り込んだ。

判然とはしなかったが、どうやら、その子の要求は、

「赤い狐と緑の狸の家」へ自分を連れて行け、ということらしいと解ってきた。

子供はしっかり、自分の立場が優位になったことを理解していて、もう泣きもせず、上機嫌だった。

例の「光線銃」は、服の袖にホルスターがついているらしく、するするとしまい込まれたまま、もうどこにあるのか、外から見てもわからなかった。

恐ろしい武器で自分たちを脅迫する六歳（推定）の子供の手を引いて、人気のない村の中を歩いているというのは、実に奇妙な気分だった。

「それにしても、『赤い狐と緑の狸の家』っていうのは、なんなんだ」

「そやな。普通に考えれば、食料品店とか雑貨屋、コンビニなんか、カップ麺を置いておる家やないかと思うわな」

「そんなの、どうやって探す？」

「ま、たいてい、そういう店は、人通りの多いところにあるな」

「人通りって言ったって」

廃村の中は、しんと静まり返り、何の物音もしなかった。

「いやいや、こういうところでは、バス停の前が一番の繁華街なんや。だいたい、そういうところに雑貨屋とかがあるはずや」

「バス停ね。いや、バス停の周りには、何にもなかったぞ」

朝、僕たちを乗せてきたタクシーの運転手と、夕方迎えに来てもらう打ち合わせをしたとき、バス停跡で待ち合わせるといことになった。もう路線バスは廃止されていたが、集落に一つだけあったバス停の標識だけは、撤去されずに残されていた。運ちゃんはわざわざ一度バス停前に車を止めて、ここですからと念を押したのだった。

「あのまわりには、確か、ちっちゃな鳥居とかがあっただけで、他は雑木林と畑しかなかったよ」

「ううむ、そうか。……そやっ、それなら」

「なんだ」

「赤井キツネさんと、緑野タヌキさんが同居している

家」

「……」

「まあ、そんな顔すな。うーん、何かの暗号かもしれないな」

三葉は、ポケットから、手帳とボールペンを取り出して、なにやらしばらく書いていたが、うれしそうに顔をあげた。

「どや、これは。簡単なアナグラムや」

三葉は、手帳のページを破って、僕によこした。

「アナグラム？」

「綴り換えのことや。『赤い狐と緑の狸』をローマ字で書いて、そのアルファベットを入れ替える」

破れたページには、まず、

AKAI KITUNE TO MIDORI NO TANUKI

と書いてあって、次の行には、

DOI MITSUO NO UTI KARA KITA NIKEN

と、書かれていた。

ぼくはアルファベットを一文字ずつ目で追ってみた。確かに文字はきれいに並べ替えられている。

『土井ミツオの家から北二軒』。土井ミツオという人の家の、北側へ二軒目の家が、その目的の場所や」

「ホントかよ」

「……さあ、どやろな」

「おい、おい」

「とにかく、表札をよう見て歩きいな」

疲れがどっと出る。

「それにしても」

「なんや」

「ようするに、この子は、ただの迷子なんだよな」

「ああ。ただ、人殺しの道具を隠し持っただけのな」

ふたりは、どちらともなくため息をついた。

それがわかったのかどうか、子供が可愛らしく、う

ふふと笑った。

当然ながら、というか、そうそう都合のいい表札は、見つかるはずもなかった。

三葉は、ひょこひょこ駆け回っては、無人の農家の軒先に入り込んで、表札を見て回っていた。この子のそばにはあまりいたくないらしい。

僕は、子供の手を取りながら、ゆっくりと村の中を歩いていった。

ふとなにげなく顔を向けたとき、ある庭先に、小さな小屋のようなものがあるのが目に入った。

通り過ぎながら、今のは何だったのかなあとぼんやり考えていたが、あっと気づいたことがあった。

僕は、子供を引きずるようにして、今来た道を駆け戻り、庭先に入ってしまった。

思った通りだ。

「おい！ 三葉！ わかったぞお！」

その大声に、三葉が駆けつけてきた。

「何がわかった」

「これだ。よく見てみる」

「なんや、これは、祠みたいやなあ。あつ」

そう、この庭先にあつたのは、小さな祠。お稲荷さんだった。

祠の中には、狐の像がまつられていた。よく見れば、祠の前には、小さな鳥居も立っているではないか。

「この村は、稲荷信仰が強いんだ。よく見てみると、こういう祠を建ててる家はけっこうあるぞ」

「それじゃあ、赤いキツネって言うんは……」

「たぶん、朱塗りの狐を祭ってある家があるんだ」

「よしっ、探してみよう」

三葉は再び駆け出していった。

僕と子供が、何軒かの家を見ている内に、彼は、早くも、目的の家を探し当てた。

「こっちゃん！ 来てみい」

僕たちは、三葉の声を頼りに、一軒の農家の庭先に入っていた。

三葉は、にこにこしながら、僕たちを待ちかまえていた。

「これや」

彼の前には、小さな祠があつた。僕は、子供の手

を離して、そこに駆け寄り、中を覗き込んだ。確かにそこには、朱に塗られた狐が、鎮座ましましていた。

「でも、『緑の狸』ってのは？」

「あれや」

三葉が指さす先は、庭の一隅で、何本もの庭木が植えられていた。ちょっと暗くて、初めはよくわからなかったが、よくよく見てみると、そこには相当に古い、信楽焼の狸の焼き物が置いてある。

狸の表面は、半ば苔におおわれて、まさに「緑」だった。

子供は、すでに記憶がよみがえったらしく、屋敷を回り込んで、どたとと裏側の方に駆けて行くところだった。

僕たちもつられて、その後が続く。

広い庭と、縁側があつた。

子供は、縁側の上へ駆けあがって行った。靴を脱いだようには見えなかったのが、ちょっと不思議だったが。

そこに僕たちが見たのは、思い思いの恰好をしなが

ら、何か興奮気味にしゃべりあっている十数人の人間だった。年齢も性別もバラバラ。その言葉は、なんとなく日本語のようにも思えたが、よく意味の解らない、不思議な言葉だった。

皆、あの子供と同じ様な、金属光沢のある服を着ていた。

縁側に続く畳敷きの部屋の奥から、一人の中年女性が飛び出してきて、走り込んでいった子供を抱き止めたのが見えた。

次の瞬間には、その女性は、(何を言っているのかは良く聞き取れなかったが)強い口調で、子供を叱り始めたようだった。

と、子供が、僕たちの方を向いて指さしたものだから、そこにいた人々の視線が、全部、こちらに向けられた。

びたり、と、話し声が止んだ。緊迫した空気が、ぐっと流れて来るのがわかった。

「何となく、ヤバいとちゃう?」

「これって、もしかしたら、蛇頭が手引きした密入国

者の集団かも……」

僕たちは、無意識のうちに、じりじりと後ずさりしていた。

その時、奥の方から、人々をかき分けて、一人の男がゆっくりと前に出てきた。

その男は、ごく普通の背広を着て、にこにここと笑っていた。

「いやあ、とんだところを見られてしまいましたなあ! や、ま、どうぞ、どうぞ、遠慮なさらず、こちらへお上がり下さい」

その男の言葉と笑顔に、何か魔法をかけられたかのように、僕たちは、ふらふらと、縁側に引き寄せられていった。まるで蛇に睨まれた蛙だった。

「ほお、あなた方は、靴を履いてるんですね。じゃ、そこらに脱いどいて下さい。いや、なにね、ここにいらる人達は、一種の力場を発生させて、直接地面に足を接触させない方式を使っているんで、いわゆる靴は履いてないんですよ」

「あ、あんたたちは何者なんだ」

気がつくくと、一卵性かと思われるほど顔がそっくりの、がっしりした体つきの大男が四人、目の前にいた。彼らは全く無表情に、僕と三葉の両肩をそれぞれつかんで、軽々と縁側に引き上げた。長靴が、ばたばたと脱げ落ちた。

引きずられるように、部屋の中程まで連れて行かれると、背広の男の前にはうり出される。

男は愛想良く言った。

「子供を連れて来ていただいたそうで、ありがとうございます。ちょっと、目を離したすきに、勝手に表に出てしまったもので。遊ぶのは庭先だけと言っていただいたのですが」

彼は自分もあぐらをかいて座りながら、どうぞと、座布団を勧めた。

「遊ぶって。子供にあんな武器を持たせて、危いじゃないですか」

「武器？ はて？ もしかしたら、玩具の光線銃のことですか」

「玩具やないやん。ちゃんと、撃ってたがな」

「ああ、あれは、ホログラムです。立体映像が映るだけですよ」

背広の男は、子供の母親から、光線銃を借りると、無造作に引き金を引いた。

バリバリッという音とともに、畳のあちこちに火柱が上がった。彼はついでに、自分の膝の上も撃って見せた。激しい爆裂光が輝いた。

「うわっ！」

「あはは。驚かせてすみません。でも、よく見てください」

僕たちは、火柱が上がった畳の上を見てみたが、なるほど、確かに破れたり焼けこげたりした跡は、どこにもなかった。もちろん、男のズボンもなんともない。

「なんなんや、これ」

「まあ、ご不審のことと思いますが。ここは正直に言っちゃいましょう。嘘も隠しもなく、我々はただの善良な観光旅行者なんです」

「……あの、そうすると、やっぱり、外国の方ですか？」
なんとなく、言葉遣いがいいいになってしまふ。

「あ、いや、外国というのは、正確に言うところと違いかもかもしれません。もっとも、国家という概念は、皆さんの時代とは大分変わっています」

「『時代』って？」

「あっはっは。そうです。この人達は、時間旅行のパック・ツアー客で、私は旅行会社の現地案内人なんです」

「えっ？」

「私、学校で古代語と、古代文化を専攻しまして、今ではこうやって、古代社会に溶け込んで常駐しながら、ツアーのお客様を受け入れる仕事をしておるのです」

僕たちは、声も出なかった。

「現代では（もちろん、あなた方にとっては、未来ですが）、環境破壊のために、地上の砂漠化が進行してしまっていて、なかなか雨や植物を見ることが出来ません。このツアー・ポイントは、情緒のある原始の世界が体験できるというので、大変、人気のあるスポットなのですよ。」

「しかも、現地に発見される可能性も低いので、小さい子供連れや、お年寄りでも、気楽に来られるんです。というのも、過去の人間との接触は、歴史改変を引き起こす危険があるので、厳しい制約がつけられているんです。少しでも歴史を変えてしまったら、全員極刑ですからね、気を使いますよ。」

「まあ、今回のようなアクシデントは、ほとんどないと思っていたんですが。ご迷惑をおかけしてしまったようで、まったく、面目ありません。」

「ま、でも、ご安心下さい。我が社では、こういうときのために、すみやかに記憶を部分削除する技術を、すでに開発してあります」

僕と三葉は、いつの間にか、ふたたびあの無表情な男達に、両側から、がっちりとつかまえられていた。

こいつらは、おそらくアンドロイドなんだろう。

「おいっ、ちょっと、待……」

叫ぼうとしたが、大きな手が口をふさぐ。

背広の男は、笑顔で言った。

「大丈夫ですよ。私達と出会った記憶だけを、ちょっ

と削らせてもらうだけです。後遺症は残らない……と
思います、たぶん。

「もちろん、少し肉体的な苦痛も伴いますが、その
苦痛の記憶も、一緒に消してあげますから。あっはっ
は。大丈夫、大丈夫……」

じたばたしながら、引きずられていくと、奥のふす
まが、さっと開いた。

しかし、そこは、絶対にこの廃屋の中ではなかった。
いや、この時代でさえないのだろう。暗い部屋の中に、
ぎっしりと並べられた様々な機械が、冷たく光ってい
るのが見える。

その時、ぼくらの背後で、ツアー客達の歓声が、
一斉にあがった。

山の廃村に、雨が、再び降り始めたのだ。

(了)

1998/01

なぜかこの作品には作成日以外の記録が残つ
ていない。自分自身の記憶もあいまいで、初出
が何だったかを明示できない。ただ、これは確
か「赤い狐と緑の狸」というお題で書いた小説
だったと思う。

おつかれさま

その日、起き抜けにテレビをつけると、どこかの局で特別報道番組をやっていた。第二次世界大戦後、ずっと続いていた中東地域の敵対国同士が、突然、無条件完全の和平合意を果たしたのだという。まさに、青天の霹靂であった。

もっとも、僕が目覚ますのは、だいたい昼近くな
ってからだから、世の中ではもう朝から騒いでいたの
だろう。

僕は、いわゆるフリーターで、と言えば聞こえはい
いが、ようするに不況で若年リストラに遭い、バイト
をしながら次の勤め口をさがしている、二十七歳独
身、貯金三十八万三千四円、美青年（水虫付）であ
る。

万年布団の上をどたどた横切り、冷蔵庫から缶コ
ーラを取り出していると、テレビは「引き続きニュー

スをお伝えします」と言っていて、さっきと同じアナウ
サーが、「本日午前の閣議で内閣は……」と始めた。
「政府は、失業率の上昇に対処するため、希望する
人全員を国家公務員として採用する方針を固めまし
た」

なにっ？

希望する全員だって！

耳を疑う僕だった。

バイト先でも、話題は、この際公務員になった方が
いいかどうかで盛り上がり、皆、なんとなくそわそわ
した気分だった。

夜、僕は先輩の下宿を訪ねた。先輩はシナリオ・
ライター、と言えば聞こえはいいが、現実には怪しげ
な自販機雑誌に怪しげなでっち上げ手記を書き散ら
したりしている、三十二歳独身、推定所持金一万七
千五百円、アル中（無精髭付）である。

区画整理からびったりとはずれてしまった四車線道
路沿いの木造二階建てアパート、その西向きの二階

が、先輩の部屋だった。「むさ苦しい」というのを造形アートにすれば、これこそまさにそのものだと思わせる六畳間で、先輩は缶ビールをすすりながらテレビを見ていた。

「これって、やっぱり選挙に向けた空約束の公約なんでしょうか」

先輩は、じっとテレビを見たまま、うーむと重たくなっていた。

テレビでは、万年最下位球団が、奇跡の連勝をおこしていた。相手側の常勝チームも、試合は負けたが各個人記録は着実に伸ばしていて、野球場を埋めた観客はウェーブを作って大喜びしていた。

翌日、ニュースの話題は、時効がせまっていた凶悪連続殺人事件の容疑者の電撃逮捕に集中した。捜査員の汗と涙の苦労話が、新聞紙上に大きなスペースを割いて掲載された。

同じ社会面の隅の方には、ベタ記事で、どこかの国で多くの人が一斉に恐竜を目撃したという噂が、

おもしろおかしく取り上げられていた。

さらに数日間、世界中で和平合意や難事件の解決が続き、また、キリストを見たとか、ナポレオンや西郷隆盛が歩いているのを見たなどという話が、次々と報道されては忘れられていった。

政治評論家や心理学者、社会学者達はマスコミの売れっ子となって、あれこれと好き勝手な解説をして回り、景気も上向き、なにやら街行く人々の顔にも、笑顔が多くなってきたように見えた。

僕が再び夜中に先輩の下宿を訪ねると、しかし、先輩は相も変わらず重苦しい顔で、ビールをすすっているのだった。

「バイト先で、正社員に雇ってもいいって言ってくれてるんですけど、公務員になるとどっちがいいんでしょうかねえ」

先輩は、ごろんと仰向けになって、好きにしろよとつぶやいた。

「どうせ、もうそろそろだ」

「何ですよお、何が、もうそろそろなんですか？」

先輩は、がばと身体を起こして、僕の目をにらんで言った。

「お前、これが解んないのか？ 全ての事件が大団円、主要キャストの紹介カットも流れ初めてるんだぞ。もうすぐ……」

その時、外の道路で人々が騒ぐのが聞こえた。

ぼくは、窓から顔を出してみた。大勢の人が歩道に集まって、空を指さしたりして、興奮している。僕もおもわず空を見た。

夜空をおおって浮かんでいたのは、巨大なエンドマーク。

プシュツ、先輩がもう一本缶ビールを開ける音が聞こえた。

(了)

(Creative Synapse 1998.7.12 版)

Happy Xmas

(War Is Over)

乾きても乾きてもなお降り注ぐ冬の世界にレノン優し
く

57秒。

58秒。

59秒。

標準時12月24日19時00秒。

Dickはいつものように時刻のチェックを続けていた。ただ彼は、12月24日の19時ちょうどという時刻には特別な意味がある事にすぐ気づいたので、サイコロを振るった。

とは言え、彼は本物のサイコロを転がしたわけでは

ない。彼はサイコロを持っていなかったし、第一、サイコロを振ることのできる腕も持っていなかった。

実際に彼がやったのは、乱数を発生させて、そこにある定数を掛け、出力された結果の中から、ある桁の数値を抜き出すということだった。Dickはコンピューターだったのである。

次にDickは求められた答えと、プログラムに指定されている数値を比較してみた。一致する数値が発見された。当たり前。今年のイヴは何年かに一回出る当たりになったのだ。

しかし、Dickはあわてずに（もっとも、ここまでの処理に要した時間は千分の一秒に満たなかったが）、艦内の状況をチェックした。艦内に非常事態が起きているときは、いくら「当たり前」でも無視されなくてはならない。

そう、Dickは超大型宇宙艦のメイン・コンピューターだったのだ。

1万人の乗組員が相当の長期間に渡って生活して

いける完全循環型の環境を有した宇宙艦、と言えはその大きさが解るだろうか。それは宇宙艦船というよりは、むしろ可動式の宇宙都市と言った方がよいかもされない。

この宇宙艦はかつて、外宇宙の調査探索用に開発された。しかし、太陽系内で大きな戦乱が起きると、迫害され戦火に追われた人々の脱出のために転用されることになったのである。彼らの大半はなんの力も持たない一般の民間人であったので、戦い続けるほどの勢力も彼らを積極的に保護しようとはしなかったし、全面戦争の時代ではどこにも隠れる場所はなかった。彼らは決断した。太陽系外に逃れていこうと。

こうして難民船は、新天地を目指す開拓船として、外宇宙を目指して果てしなく遠い旅に出発したのだ。た。

オール・グリーン！

Dickが認識する限り、艦内に異状を示す兆候はなかった。宇宙艦は通常航行中であった。もっとも、

老朽化した宇宙艦は、いくつかのシステムがすでに稼働しなくなっており、回路が切断されていたのだけだ。ど。

もちろんDickに認識できない以上、それは問題になり得なかった。彼はプログラムに従い「クリスマス・イベント」ルーチンに入った。

Dickのメイン・プログラムを組んだ人物は、ユーモアのセンスを持ち合わせており、なによりも敬虔なキリスト教徒であった。茶目っ気を出して、クリスマス・イヴの晩になると、ある確率でアトランダムにコンピューターが勝手にささやかな祝祭を行うようなルーチンを、プログラムに仕込んだのである。

Dickはまず、居住区画で特に混乱が生じないと考えられる場所を選んで、照明を15パーセント落とした。人々が「あれっ」と思う程度である。続いて、非常照明用のスポットライトを一齐に点滅させる。イルミネーションの代わりだ。

続いて、艦内放送に回路を開く。年輩の落ち着いた男性の声になるように音声を合成し、メッセージを

出力する。

「みなさん。メリークリスマス！そして新年おめでとう！ 私たちは大きな試練を受け、苦しい旅を続けています。しかし、はるかな昔、モーセ達は一致団結して困難な出エジプトの旅を達成しました。そして今、私たちの旅は、戦乱や迫害や差別や抑圧の無い、新しい社会を創造する長い道のりの第一歩として、開始されたのです。

「どうか、みなさん、互いに愛し合い励まし合いながら、協力して、この宇宙規模の移住を、エデンの楽園を見つかる旅を成功させましょう。

「みなさんに、神のご加護がありますように」
言葉は、もちろんインプットされたとおりのものだったが、このメッセージには、プログラマーのかすかな危惧が表れてもいた。

事実、この旅が始まって数年のうちに、艦内ではいくつかのいさかいが起きていた。

目指すべき方向、限りのある生活物資の分配方法、意志決定のシステムなど、問題はたくさんあった。ひ

とたびそうした問題が生じると、それはなぜか本質的な問題点からそれはじめ、人種・習慣・宗教・イデオロギーなどの問題にすり替えられていってしまうのだった。

いつの間にか、なんとか主導権を握り、艦内を完全に管理しようとする人々や、自分たちは抑圧されていると感じる人達が発生していった。

Dickは続いて、再度「サイコロを振って」データバンクから、一曲の歌を選び出し、艦内放送に出した。

それはとても古い歌だった。ナイーブな声の男性の歌で始まり、やがて素人のような女性の声、子供達のコラスが続いた。

歌は、「世の中にはいろいろな問題があるよ、でも今日はクリスマスを祝おう、ねえ、そろそろ争いはやめないかい？」と呼びかけていた。

曲が終わると、Dickは居住区画の照明を元に戻し、プログラムのメイン・ルーチンに戻った。すぐに、

もう何事もなかったかのように生真面目に通常の監視作業に専念した。

19時09分30秒。 31秒。 32秒。

艦内標準時は、航行の加速の影響などもあって、今や、地球の標準時とはなんの関連も持っていないかったのだけれど。

艦内は、再び静寂に包まれた。もはや何の音もなかった。ずいぶん以前に、乗り組んだ人々の間の対立は極限にまで高まり、武器・兵器を使うほどの争いにまで発展した。誰かが致死性のガスを艦内に散布した。その真意はもはや解らない。ただ、誰一人ガスマスクにも解毒剤にも間に合う者はいなかった。

宇宙艦は、すでに未知の星系にさしかかっていた。人類がまだ見たことのない、驚異的な星々の壮大なパノラマが、宇宙艦の全周囲に広がっていた。もし、それを見ることの出来た人がいたら、宇宙最大のクリスマス・デコレーションだと感じたかも知れないほどの。

宇宙艦は、音のない星の祝祭の中を、深宇宙へ向かって、厳かに落ちていく。

水々と輝く星に照り返り宇宙機もまた星の一粒

Creative Synapse 1998/12 初出

誕生パーティーへいらっしやい

ただ、今日の残業は特別だ。麗子さんの仕事だから。

「鬼之江。また残業か？」

芋野先輩がネクタイをゆるめ、上着を肩に掛けた格好で近寄ってきた。

「いやあ、すぐ終わりますから」

「お前だけは、8月病はないだろうな、その元氣なら。ま、がんばれよ」

あっさり言うのと、先輩はドアを開けて出ていった。

室内に残ったのは、ぼく一人だけだった。

ぼく鬼之江定男は、今年入社はまだ新人だけれど、この会社では、どういうわけか8月になると、急に黙って会社をやめてしまう者が多いのだと言う。社内ではそれを「8月病」と呼ぶらしい。

別に仕事がおもしろいとも思わないが、何とか潜り込んだ会社だし、辞めるつもりはない。そうかと言って、他人より頑張るつもりもないのだが。

昼過ぎに、ぼくの机の脇を、書類束を抱えた麗子さんが通りかかった。

「困っちゃったなー」

小さなタメイキ混じりの声が聞こえたので、すかさずぼくは、

「どうかしたんですか？」

と、声を掛けた。

麗子さんは誰もが認める社内一の美人。美人、と言うよりむしろ妖艶と言った方がふさわしい、フェロモン全開のとびきりの、もうなんというか、アレなのだ。(デレデレ) この会社に入って良かったと思ったのは、麗子さんがいたことだけだと言っても良いくらい。「これ明日までに入力しなくちゃならなくなっただけ、あたし今日は開発の方で仕事が入ってるの。困ったわ」

「なんだ、それならぼくやりますよ、入力」

さほどの仕事量とは思わなかったので、点数稼ぎに気楽に引き受けたのだが、どうしたわけかケアレスミスを連発してしまい、妙に時間がかかってしまった。おかげで残業。バイオリズムのせいなんだろうか？ 厄日なのか？

会社を出たのは、たぶん最後だった。守衛さんに嫌な顔をされながら、腰を低くしてオフィスを出てきた。駅に向かって歩いてみると、後ろから声が出た。

「定男くん。まだ仕事してたの」

驚いて振り返ると、そこにいたのは、なんと麗子さんだった。

「あ、阿久先輩」

「なによ、麗子でいいわよ。あたしの仕事で残業になっちゃったの？ ごめんなさいね」

「いえ、そういうわけでもないんですが。先輩…これ、麗子さんは？」

「え？ ああ、開発の方で手間取っちゃって……。ご

飯まだでしょ。お詫びにおごるわ。うちにいらっシャいよ」

「えっ！ でも、それは。そんな」

ぼくの目の前は、桃色に染まった。

「今日はね、あたしのお祖母ちゃんの誕生日なの」

ラフな服に着替えた麗子さんは、リビングのテーブルにハムやチーズや生野菜を運んできた。ぼくはソファに緊張して座っていた。

「とりあえず、それ食べて。……毎年あたしのところで誕生祝いをやることになってるの。田舎から、お祖母ちゃんや親戚がいっぱい来るのよ」

ぼくはサラダを口にした。

「辛いつ」

「あら、ごめんなさいね。おばあちゃん、味の濃いのが好きなのですね」

キッチンから再び出てきた麗子さんに聞かれてしまった。

「いえ、大丈夫です。ぼくも味の濃い方が好きですか

ら」

麗子さんはグラスにワインを注いでくれた。

ぼくは口直しのつもりで、がぶりと飲んだが、味は最低だった。麗子さんって見かけによらず、案外と味音痴なのかもしれない。

どこかでピーピーと電子音が聞こえた。

「あら、お風呂が沸いたみたい。先に入って」

「ええっ！ でも……」

「さ、こっちよ」

麗子さんは、ぼくをバスルームに連れていった。

ぼくは頭の中を混乱させながら、シャワーを浴びた。

これはどういう展開なのだろう？ お祖母さんの誕

生パーティーと言っているが、こんな時間になっても誰

も来ている様子がない。それに、むりやり風呂に入

させるのもかなり変だ。これは、ひよっとすると、パ

ーティなんて口実で、実はぼくのことを……。

（ぼく食べられちゃうのかなー、とか、でっへへへっ。）

なんかもう、どうなってもいい、って気分。

驚いたことに、バスルームを出ると、ぼくの洋服が

無くなっていて、替わりに洗い立てのナイトガウンが置いてあった。

仕方なく、ぼくはそれを着て、リビングに戻った。

「麗子さん、これは」

「ごめんなさいね。お祖母ちゃん、けっこう潔癖なの」

「？」

なにか、胸騒ぎがした。おずおずと、麗子さんの向かい側の、壁際のソファに腰を下ろしたとき、遠くで放電音のようなものが聞こえた。かすかにオゾン臭が漂う。

「あら、来たわ」

麗子さんが、ぞっとするほど美しい笑顔で言った。

放電音はだんだん近くなり、生臭い臭いが混じってきた。

いくつもの笑い声がした。ぼくの背後から。

ぼくは、テーブルの上に置いてあるワインのラベルをそっと見た。

『調味用』だった。さっき麗子さんは、サラダに味

付けしたのではなくて、ぼくに味付けしたのだとわかった。

何か、ぬめぬめしたものが、ぼくの頬に触れたが、ぼくは硬直したまま動けない。

「いらっしやい。お祖母ちゃん！ みんなも元気そうねえ。今年も生きのいい御馳走を用意しておいたわよ。お誕生日おめでとう！」

(了)

(1999.9.25 Creative Synapse 版)

タフな男

俺が艇長を務める火星航路の宇宙貨物艇「デジャールソリス」が、地球外周軌道に乗ったとたんだった。突然、コクピットを激しい衝撃が襲った。

フロントパネルが爆発し、俺は顔面を炎で焼かれた。

「艇長！ 大丈夫ですか！」

機関長が駆け寄ってきた。

「目をやられた。何が起きたんだ？」

「流星か宇宙のゴミが衝突したようです。電気系統がイカれています」

もうひとりの乗組員である見習い航宙士が、包帯を持ってきて俺の頭をぐるぐる巻きにした。

俺は二人に船外服の着用を命じ、自身も見習いに手伝わせて宇宙服の中に潜り込んだ。機関長は被害状況を調べるため、機関区域と貨物区域に降りていった。

再度の衝撃が起きた。

「メイン電圧が急速に低下しています！ 酸素発生装置停止！ 機関区域オールレッド。機関長の反応ありません！ き、機体が回転してるっ……！」

見習いが次々と叫ぶ。

二次爆発だ。おそらく外壁の一部は吹き飛んでいるだろう。

「全隔壁閉鎖。操縦区域の他は電源供給を停止しろ。自動システム解除、非常システムに切り替え。それから宇宙管制センターを呼び出せ。落ち着くんのだ」

事態を報告すると、統合宇宙管制局は即座に第一級遭難事件に指定してくれた。これで少なくとも労災にだけは認定される、という意味以上ではなかったが。

さらにありがたいことに彼らは、この船がドッキング予定の宇宙ステーションの軌道とは全く高度がずれてしまっていること、というより、すでに地球の引力に引かれて落下が始まっていることも教えてくれた。

「脱出用シャトルで本体から離脱できますか？」

妙に声の質の明るい男のオペレーターが訊いてきた。
た。

「機体が回転していてタイミングが難しい。下手な方向に飛び出して、軌道補正にシャトルの燃料を使いすぎると地上に戻れなくなる。地球側に向けてしまったらそのまま大気圏に突入して、こんな小さなポッドはすぐ燃え尽きてしまうだろう」

「現在そちらに接近して救助活動の出来る宇宙船はありません。貨物艇本体が地上に落下して被害が生じる可能性を考慮すると、管制局としては30分以内に誘導ミサイルで貴艇を破壊せざるを得ません。なんとかそれまでに脱出して欲しいのですが」

絞首刑と電気椅子、どちらでも好きな方を選べるというわけだ。

「了解、脱出する」

「艇長、ぼくらもうダメなんですか…」

若い見習は半べそをかいている。

「そんなにビビるな。最後に生死を分けるのは精神力だ。俺は何度も死ぬ目に遭ってきたが、こうやって生きている。」

「一度なんか、船外服のまま、木星の外の宇宙空間を20時間以上漂流したこともあるぞ。その時俺がどうしたと思う？ 眠ったんだ。酸素の消費量を抑え、体力を維持しようと思ってな。」

「俺は普通のパイロットみたいに睡眠薬は使わん。目をつぶってゆっくり数を数えれば眠れるように訓練してきたんだ。どんな状況でも眠れる。いいか、タフな精神があればどんな問題も乗り切れる。がんばれ」とは言ったものの、事態は最悪だった。生きてるだけ、より悪いとさえ言える。

俺は見習いに、船の回転状況や脱出システムの作動チェックなど、必要と思われるあらゆるデータを読み上げさせた。問題は脱出用エンジンの噴射のタイミングだ。目の見えない俺のキャンだけが頼りなのだ。

見習いがロケット点火ボタンを、俺の手に押し込んだ。
だ。

「いいか、20秒間だけ時計をカウントしろ。そのあと5秒に一回Z軸方向の回転角度を読み上げるんだ。俺がタイミングを計って脱出ポッドを発進させる」

「はい、いきます。00分00秒、1、2、3…」

俺は頭の中に時計の秒針を描き出した。

「18、19、20」

(…21、22、23°)

「回転角、176.5° … 181.0° … 185.5」

(48、49、50、51…°)

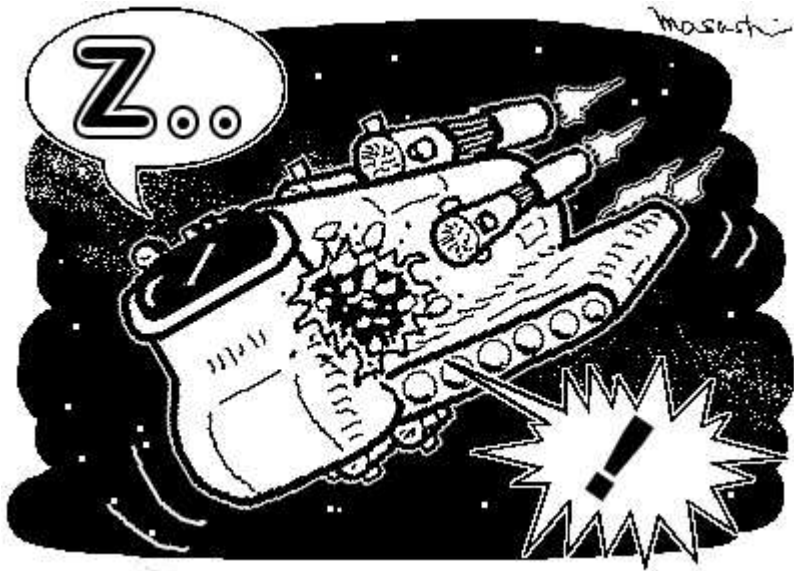
「199.0…、艇長？ 艇長！ しっかりして下さいっ

!!」

俺が重大なミスに気づいたときには、すでに頭の中に綿が充満した感覚だった。習慣は恐ろしい。俺はあつという間に深い眠りの中に落ちていったのだった。

(了)

(1999.9.25 Creative Synapse 版)



宿敵（ライバル）

警察署の取調室に、どんよりとした朝の光が射し込んでいた。

中年の刑事が不機嫌そうに窓を開け、窓枠にはまった鉄格子を神経質に眺めた。やおら手を出し、夜中に張られた蜘蛛の巣の中央から、小さな蜘蛛をつまむと、窓際の小机のティッシュボックスから一枚抜いて、そいつを堅く丸め込んでゴミ箱に投げ込む。

上を向きながらしゃべるのは、今度は部屋の天井の隅をぐるりと見回して、他に蜘蛛の巣がないか点検し始めたからだ。

「なんで、俺がこういうヤマを担当しなきゃならねえんだ」

「ぼくに八つ当たりしないで下さいよ」

中央の机の脇に座って書類を調べていた若い刑事が、にらみつけるようにして答えた。相性が良くない。

蜘蛛を執拗に探し出しつぶしていく姿に虫ずが走る。

「取材記者、増えてたか？」

「あ？ええ。もう玄関前はごった返しですよ。そりゃ、通り魔殺人ですからね」

「ふん、モーニングショーの時間だしな。みんな楽しんでやがるのさ。自分にやテンから無縁だと思ってるんだ」

さも心残りがある風に視線を天井から引き下げると、中年刑事は椅子に腰掛け書類をめくる。

「午後六時半の駅前。多数の目撃者のいる前で被害者の頸動脈をサバイバルナイフで一切り。交番から駆けつけた巡査におとなしく逮捕され、直後の取り調べにも落ち着いていて、氏名、住所、職場など身上の供述は正確で協力的。しかし…動機だけはあいまいだ。薬物反応は？」

「まだ、科研に資料送ったばっかっすよ」

「ようするに、これなんだろ」

中年は頭の横で人差し指をぐるぐる回す。

開け放したドアの外に人の気配がした。

「64番連行しました！」

おとなしそうな男が制服警官に促されて、取調室の中に入ってきた。薄青い囚人服を着せられている。おそらく大量の返り血を浴びた私服は、証拠として押収されてしまったのだろう。

男は言われるままに椅子に腰掛けた。

「どうだ、留置場の独房は。眠れたか？」

「おかげさまで。さすがにちょっと疲れてみたいで、ぐっすり眠れました」

ちよつと肩をほぐすように首を回しながら、男は悪びれない調子で快活に答えた。

「…ま、いいだろ。さて、悪いがもう一度、何が起ったか話してみてくれ」

「いつから話せばいいんです？」

「とりあえず、昨日会社を出たところからでいい」

「昨日、仕事は定時で終わって、いつもどおり電車に乗って帰りました。途中寄り道はしてません。電車に揺られていると、ふとヤツが、敵かたきがいるのがわかっただけです」

「そういうカンがしたと…?」

「カンじゃありません。そういう能力があるんです。というより、ヤツを見つけたす能力があるからこそ、ヤツとの長い腐れ縁が続いている訳なんですけどね。」

「それで途中で、普段来ることのない方面の電車に乗り換えて、この町の駅で降りました。駅前ではらくじっと待っていると、案の定ヤツがやって来ました」

「ヤツというのは、あんたが斬りつけた芋野浅士だね」「その人のことは知らないんです。初めてあった人なので。でも、あれは間違いなくヤツでした。で、ここで逃がすと、必ずまた会える保証はありませんし、たぶんまだヤツは目覚めてないだろうと思いましたが、絶対ここで決めてやろうと、走って近づき一気にとどめを刺したのです。」

「え? ええ、ナイフはいつも持ち歩いています。いつヤツに会ってもいいようにね」

二人の刑事は困惑して、ちらりと顔を見合わせた。「ねえ、おじさん。あなたの言ってることは支離滅裂

だ。被害者と面識がないと言いながら、昔からの敵だとも言う。もうちょっとわかるように説明してもらいたいね。嘘つこうとしてもダメなんだよ！」

「嘘だなんて。だって、わたしだってヤツに殺されたんですよ、シジミチヨウだった時に……」

若い刑事は、ばんっと机を叩いた。

「いいがげんにしろっ！」

「まあまあ。とにかく話の続きを聞こう」

中年刑事は、若いのをなだめながら、男を促した。

「わたし前世は蝶だったんです。ただ本能のままに暮らしてました、なにせ蝶ですからね。ある日、花壇のヒヤシンスの花に近づいた瞬間、カマキリに捕まってしまうました。」

「むしゃむしゃとやられたところで初めて覚醒したのです。それでわかりました。ああ、このカマキリがヤツなんだと。その時にはもう身体ほとんどを喰われてましたがね」

「それじゃ、なにか？ 被害者は前世であんたを喰ったカマキリの生まれ変わりだったというのか？ それ

を恨んで殺したと」

「いえいえ。なにもそれを恨んでるってだけでもないんです。なぜって、蝶になる前、わたしイカだったんですけど……」

若い刑事は椅子をひっくり返して立ち上がった。中年刑事は彼を目で制した。

「イカというのは、御存じ無いかもしませんが、海の中では相当にすばやい捕食者なんです。目に付いたものにはなんでも食らいついてましたね。」

「それがあつ時、ふいに覚醒したのです。自分に宿敵ライバルがいることを思い出したんです。わたし必死に探しましたね、ライバルを。さっき言ったように、いつでもヤツがいる方角は自然とわかるんです。」

「そのときは、ヤツは鱈でした。すごい群の中にいたんです。でも、わたしにはわかりましたね。狙い違わずガシッと捕まえてやりましたさ」

「……前世は蝶、その前はイカ、じゃ、その前はなんだつたんだよ！」

「ムクドリでした」

若い刑事は絶句した。

「いいですか。われわれは、もう何十億年にも渡って、いろんなステータスに生まれ変わりながら闘ってきたんです。—そう、初めはプランクトンでしたよ。

「これが宿命なんです。何故かって？ だってそうでなきゃ、なんで生まれ変わるたびに覚醒して前世の記憶を取り戻すんでしょうか…。ねえ刑事さん、わたし死刑になりますよね？」

「なんだ、人を殺しておいて自分が死ぬのが恐いのか」「いえ、そうじゃなくて。なるべく早く死刑にして欲しいと思ってるもんで」

「なんだと」

「その…。なるべく早く転生したいんです。ライバルよりもなるべく早く生まれ変わるのが、勝利のカギなんです。相手が覚醒する前に自分が目覚めていた方が絶対に有利なんです。まあ、寿命の短い生き物に生まれる場合など、必ずしもそう言えるわけでもないのですが。なんにしても、なんとか早く殺して下さい。

敵
宿
お願いします」

容疑者が去ったあとの取調室には、不快な空気が漂っていた。

「やっぱり、精神鑑定つかね。完全にイかれてるのか、そういうフリをしてんのか」

「うん。確かにやつはおかしい…。早く死にたいのなら、なぜ死刑を待つ？ 相手を殺したあと、すぐに自殺すればよかったのに」

「え？ ああ、そうですね。やっぱりフリなのか」

「それとも、自殺すると次の転生で高いステータスに生まれ変われないという法則でもあるんだろうか？」

「うーん、どうですかね。自分は宗教とか詳しくないんで」

「ただ…」

「はい？」

「やつの言ってたことで、気づかされたこともある」「？」

「ライバルが自分と同じステータスに生まれ変わって

いることもあるということだ」

「????」

「俺は前世は蠅だった…」

「ちょっと、やめて下さいよ、先輩」

「ところがあるとき、蜘蛛の巣にひっかかっちゃったんだ。蜘蛛の野郎にすぐさまグルグル巻きにされた。悔しいことに、その時になってやっと覚醒したんだ。この蜘蛛がライバルだったんだってな」

「…」

「そして、俺は人間に生まれ変わった。覚醒したのははた^{はたち}二十歳を過ぎてからだだったがな。それが、ここ数年、すぐ近くにライバルがいるという強い勘がするようになってきた。

「いったいやつは、どんな生き物に生まれ変わったのか？ はっはっは。盲点だったぜ、まさかやつが自分と同じステータス人間だったとは、思いもよらなかつた」

「…先輩、今日はちょっと休んだ方がいいですよ。疲れてるみたいだ」

中年刑事はニタリと笑った。

「おまえ、まだ思い出さないのでか？ 自分が蜘蛛だったときのことを…」

数発の銃声に驚いて、取調室に駆けつけた警官たちが見たのは、血の海の中に倒れている若い刑事と、その姿を満足そうに見下ろす中年刑事の姿だった。

彼は、一瞬なにかにためらったあと、やって来た警官たちの驚く顔を楽しそうに眺めながら、手にした拳銃の銃口を、ゆっくり自分のこめかみにあてがっていた。

(了)

「つきのまほう」 36号（二〇〇〇年一月下旬）初出

王

この付近一帯は、古代小さな王国であったという。マンソンジユ村には、シャトウ・ド・ルージユと呼ばれる小山が残っているが、村人はここがかつての王ユイサンの居城跡であると信じて疑わない。この王、伝承によれば若い頃は気に入らないブフォン(王侯に仕えた道化)を処刑するのが趣味だったとか。物騒な人ではある。ただ、王のちには大変温厚になり善政をしいたという話を……(以下略)

『仏蘭西田舎の赤恥泥酔紀行』おなみ・ゆう著
一九七四年

…foolの語源はラテン語のフォリス *foliis*(へいいご)の意(で、道化の無内容な言葉をへ風)にたとえたと思われる。他にも類語は多く、貴族・富豪の痢宴に伴食したブフォン *buffoon*(これもへ風)

を意味するイタリア語 *butta* に由来する)、…(中略) : 固定的な秩序へのおどけた批判者、思考の枠組みの解体者という役割は、あらゆる分野の道化に共通して見られる。

『CD-ROM 世界大百科事典 第2版』「道化」の項 日立デジタル平凡社

道化虚なれば是実。王実なれば是虚。

(『虚言』与田聡)

* * *

王の寝室にて、王の御書記役、筆記す。

すでに諸君は気づいているように、私は、もう永くない。

諸君、動揺する必要はない。なぜなら、私は諸君らの王たるユイサン王ではないからだ。私は実は王ではないのだ。……さら、動揺するなどおるのに

……。

そうだ。たれか行って、私が四十余年前に封印を命じた一番奥の地下牢を開けてみよ。そして、そこに何を見たか報告せよ。また、残っている品物があれば、ここに持ってくるように。

さて諸君、しばらく我が数奇なる運命の物語を聞いてもらいたい。

確かにある意味では、私は王たるべき男であったとも言える。というのも、私の祖父はどこかの小国の王位にあったという話で。

しかし、私が生まれた直後、謀反が起こり、父も祖父も討ち取られたそうだ。

私は皇太子妃であった母とともに間一髪、ひそかに城外に逃れることが出来たらしい。それが幸いであったのか、それとも最大の不幸であったのか、私には未だに解らぬ。

結局、母は流浪の貧民に身をやつすこととなり、いつか旅芸人一座の下働きとなった。(もともと庶民

の生まれであったことが幸いだったようじゃ)

物心がつくと、私は子役として舞台上に立つようになった。母は私がまだ幼いうちに亡くなったが、私は一座の者達に育てられ、いろいろな芸も身につけた。得意は三つの球やピンを交互に投げ上げて回すジャグリング(お手玉)だった。

城から城、村から村、国から国を回っていく旅芸人には、危険も多い。

ある国境の森の中で、私のいた一座は野盗に襲われてしまった。皆でんでに逃げちりぢりになった。

まだ年若かった私は、どこへ行くともあてがなかった。もし縁故があるとすれば、それは我が祖父の国であったが、幼くして母と死に別れた私はその正確な場所も国名も憶えていなかった。ただおぼろげに、どこらあたりの地方だったかということだけは知っていたので、しかたなくその方角に向かって行くことにした。行く先々では、やれることはなんでもして、なんとか食いつないでいった。苦しい旅ではあった。

やがてたどりついたのが、このマンソンジュの城下だった。

もうそのときには、錢も食料も底をついていた。なんとかして、食べ物と、できれば屋根のあるねぐらが欲しかった。

そのとき目に留まったのがお城の布告だった。

『芸人は王の劇団係のもとまで申し出ること。才能を認めれば採用する。』

私はすぐに王城に参上した。王様付の芸人ならば安楽な生活も出来よう、と思ったのだ。うまくいったなら、この地に根を下ろすのもいい。

係はその場で私にいろいろ芸をさせた。軽業、パントマイム、ジャグリング、手品、楽器、歌、踊り、芝居。私はそのどれをも、そこそこにやってのけることが出来た。

私は即刻、王の劇団に登用された。

すぐに知ったことだが、マンソンジュのユイサン王は大変な暴君であり、かつまた、芸を見る目も持ってい

た。だから、どんなにすばらしい才能を持っている芸人でも、ちょっと芸がつまらなくなったりすると、たちまち城を追放されてしまい、おかげで劇団はいつも欠員を補充し続けなければならなかったのだ。

劇団とは言っても、我々はいろいろなことをやらされた。とにかくお城への来訪者を喜ばせて、王を満足させることが出来れば良かったのだ。

王の劇団員には衣食住こそ豊富に与えられたが、自由はなかった。ほとんど城の一角に軟禁されているようなものだった。自分の意志で脱退することは出来なかった。城から出るには王の怒りを買って丸裸で追放されるか、死体になって出ていくより他はなかったのだ。

もっとも、戦乱と不作と高い税に日々苦しめられてる下層の人々にとっては、憧れの暮らしたのだらうけれど。

さて、王の劇団員の一員ではあったが、別格に扱わ

れる者がいた。

王の道化である。

王の道化は、いわば王のペットであって、いつでも王の側に仕えて御機嫌をうかがう役であった。

それだけに待遇もさらに破格で、立派な個室まで与えられていた。しかし、その一方で、絶対に失敗が許されない過酷な役割でもあったのである。

ある王の道化などは、あまりにも芸がつまらないというので、城の晩餐会の時に大きな樽の上に細い板を渡した上に立たされた。王や来賓が問いかける言葉に、当意即妙に応えるよう命じられ、もしつまらなければ、王達がその板を木槌で力一杯叩くというのだ。

青ざめた道化は緊張すればするほど舌がうまく回らず、板は容赦なく叩かれた。その姿がおかしいというので、晩餐は多いに盛り上がったが、最後に道化は足を踏み外して、樽の中に落ちてしまった。

やんやの喝采の中で、道化は絶命した。樽の中には毒蛇が何匹も入れられていたのだから。

王の道化が死んでしまったので、次の道化が選ばれることになった。

ユイサン王は私を指名した。

劇団の中には同情と嫉妬の入り交じった空気が流れた。しかし、誰も王の命に背くことは出来ないのだから、どうになるものでもなかった。私は荷物をまとめると、王の間近くの部屋へ移動した。驚くほど立派な部屋だった。変な話だが、この部屋の立派さを見たときに、初めて私は言いしれない恐怖感を感じたものだ。

ユイサン王自らが指名しただけあって、とりあえず私は王の気に入られていたのだと思う。

私は一年中けばけばしい衣装を身につけ、王の行く先々にびったりと付いていった。

王のお好みは、なんと王その人の物真似だった。

王が堅苦しい公式行事に臨むとき、その直前か直後に私がしゃしゃり出て、王の仕草を大げさに真似し

てみせる。その私を王が杖でぴしゃりと打ちつけ、人々が笑って場が和めば上々。

打たれ方だって芸がある。大げさに痛がったり、ときには額から血が出ていても涼しい顔をするのもあった。いろいろな場で気の利いたことを言うためには、王の政治や庶民の意識、歴史や文学の知識も学ばなければならなかった。だが私は、たかが道化師の分際。堂々と何かを勉強しているわけにはいかない。

いつでも、何かに耳をそばだて、神経をとぎすましながら、私は知識と知恵と強い意志を身のため込んでいた。それが生き延びていく唯一の方法だったから。

やがて、私は王の政策を茶化すことまでするようになった。それを王はナンセンスなギャグと受け取ったのか、それともひとつの警句と受け取ったのか、なんにしろいつも、おもしろがってはいた。私を打ち据える杖の力は、前にも増して強くなったが。

王
ある夜のこと。

私は王の部屋で、王とふたりきりでいた。私は無意味な古典の引用をべらべらとしゃべりまくっていた。王が寝室に入ってしまったか、私に下がれと命令するまで、私は王の道化でいなければならなかったのだ。

だんだんにネタも尽きて、次に私は王を茶化し始めた。

―さて、ユイサン王というのは愚かで困る。周辺諸侯と張り合うために兵隊の数ばかり増やし、若者を片端から徴用してしまう。ついには粉をひくのも鹿を狩るのも年寄りばかり。おかげで、城の食卓に上る食べ物ときたら、モミがらの混じったパンとよぼよぼの獣の肉ばかりだわ。

―黙れ、道化が。

―黙れるものか。どうせ戦わぬ兵ならば、いっそ年寄りを兵隊にとつて、兵舎を養老院の代わりに使えば一挙兩得。どうせなら、ユイサン王御ん自らが養老兵舎に入ればよからう。

―こやつめ！

王はいつものように、王杖を振り上げて、私の眉

間めがけて振り下ろしてきた。

どういう魔が差したのか。私はおもわず体をかわし、それを避けてしまったのだ。

王は初め怪訝そうな顔をしていたが、やがて顔色を変えた。

—おまえ。王の杖を避けおったな。

王の声は低く響き、ただごとならない雰囲気を漂わせていた。

—避けたがどうした！ このよぼよぼの腰抜け王よ……。

しくじったとは思ったが、ここはいつもの道化のスタイルで切り抜けるしかない。そう判断した私は、毒舌を返してもう一度王の杖が飛んでくるのに身構えた。しかし、声が震えるのはどうしようもなかった。

王は私の予想に反して杖を投げ捨てると、腰の剣をゾロリと抜いた。

私はおもわず飛びすきった。

—道化。おまえは取り返しが付かない間違いをしでかしたぞ。

王はじりりと間合いを詰めてきた。

—よいか。道化は打たれるために在るのだ。下郎どもがさまざまに持つ王への不満、恨みつらみを公然と言いつつ権利は道化だけに与えられておる。なぜか？ そのような放言を放つものは直ちに王によって成敗されるといふことを、あらゆる者どもにいつも繰り返し見せつけるためじゃ。さすれば、道化の言葉が辛辣で、下々の現実の不満に近ければそれだけ、王がそれを打ち据えることの意味が増す。

私の背中を冷たい汗がひとすじ流れていった。

—おまえは、今その一番肝心なところで全てをひっくり返してしまったのだ。王の批判者が王の制裁をかわしたら、いったいどうなる？ それは謀反に他ならぬではないか！

王は大剣を振り上げると勢いをつけて、私の頭めがけて振り下ろしてきた。

私は夢中で逃げた。

王の剣は宙を切り、たまたまそこにあった木の縁に深々と刺さった。王は、それを渾身の力で引き抜こ

うとした。

その時、私の目に入ったのは壁に掛けられた戦斧だった。何も考えられなかった。私は本能のままにそれをひったくると、王の背中へめがけて振り下ろしたのだ。

私はその後のことをよく憶えていない。

物音を聞きつけたのか、総理大臣がひとりやってきたのは確かだが。

大臣は部屋の様子を一目見て、何があったのか悟ったようだった。大臣は言った。

―道化、命が惜しいか？ このままいけば、おぬしは八つ裂きじゃ。じゃが、わしの言うことを聞けば命だけは助けてやろう。

私はただ惚けたように頷くしかなかった。

大臣は、どこからか油紙と大きな麻袋を抱えてきた。(あとから考えれば、王の間の控え室から持ってきたのだろう。) 大臣に促されて王の遺体を油紙に包み、麻袋に押し込んでしっかりと口を縛った。

それから大臣は私に、隣の寝室に入って内側から鍵をかけ、なにがあっても絶対に出てくるなと命じた。

ガタガタと震えながらも、王の寝室の壁に耳を付けて様子をうかがっていると、やがて下働きの者が何人か呼ばれてやって来たようだった。ごそごそと物音が聞こえ、それも静かになり、やがて朝が来た。

私はつかの間床の上で寝入ってしまったらしい。人の気配に驚いて飛び起きた。

大臣が合鍵で入ってきたのだった。豪華な朝食の盆を手にしていた。

大臣の説明は概ねこうだった。城の下働きに小金を与えて、麻袋は地下牢の床下に埋めさせた。一緒に私の荷物一切も同じ牢に運ばせて、そこを王の命令として封印した。王の部屋の中も密かに片づけさせ、凶行の痕跡を一掃した。さらに今朝、王の道化が夜中に城から脱走したので、必ずや探し出すようにとのお触れを国中に出した。

―下働き達には堅く口止めをしておいたが、いずれ、

王が道化をお手討ちにして密かに埋めさせたと噂が立つじやろう。さて、それでじゃ……

大臣は私を睨みつけた。

—今、我が王国は大変微妙な時期に来ておる。内側では王の横暴に貴族も民も不満を爆発させる直前じゃ。国外にあっては周辺諸国が機会があれば我が国を併合しようと、虎視眈々と狙っておる。そんな時に王が道化に殺されたとあってはどうなるか。

—このような大それたことを、やろうと思つてやつたわけではありません。はすみだったのです。なにとぞお慈悲を。

—よろしい。では、おぬしが今日から王になれ。

—……な、なんと申されました？

—おぬしの芸は王の物真似であろうが。髪と髭を伸ばして少し舞台化粧をしてやれば、遠目からならわかるまい。なに、命令や布告は万事このわしがやる。おぬしは言われたとおりに王を演じておれば良いのじや。

大臣はなかなか巧智に富んだ人で、王は流行病にかかったということにしてしまった。これで私は当分の寢室の外に出なくて良くなった。またどこかの旅芸人の一座を偽物の医師団に仕立て上げて連れてきて、いかにも治療をしている振りをしながら、私をユイサン王へと変身させていった。

幸い妃はいなかったのよかったです、側室や王の近くにいた使用人達には少しづつ暇を出し、やがて聴入れ替えしてしまった。一年後には、私は王として「デビュー」した。

数年間は政治は総理大臣が実質的に運営した。私は木偶として王の顔をしていれば良かった。

しかし、その大臣も病に倒れる時が来た。私は、ついに自分で国を運営せねばならなくなったのだ。大臣は小声で「おぬしならやれる」と言い残して息を引き取ってしまった。

どうしたらいい？

しかし、私はしょせんは道化だ。政治においても道

化するしかないではないか。

それなら今までの王のやり方の正反対をやってやろうと考えた。

貴族よりも農民が、男よりも女が偉いという布告を出した。一生懸命働く者を叱責し、のんびり生きている者を表彰した。

税金は金持ちからより多く取るようにし、戦争は一切やめた。ついには王が政策を指示するのをもやめてしまった。みんな民が相互に選んだ大臣達にやらせることにした。

おかげで、領土は減り、国は貧しくなった。一番没落したのは王と城だ。

ただ、その分、私はずいぶん気が楽になったよ。民もなにやらのんびりと暮らしているようではないか。

ははは。許せ。しよせんは道化の政治だ。戯れの政治だ。

これからは皆の好きなようにするが良い。

王
おお、そうか。地下牢から遺体が見つかったか。それが本物のユイサン王であらせられる。手厚く葬るよ

うに。そして、それが牢に置いてあった箱か。なつかしい。それが私の道化の道具箱なのだ。

* * *

「そちらは、わしの話を信じておらんようだな」

王は、ベッドの中から臣下を目の動きだけで見渡しながら言った。

「さしづめ、王にはかつて殺した道化の悪霊がとりついているとも思っているであろう。誰か、その道具箱を開けてみよ。その中に白い玉が三つ入っていると思うが」

地下牢から荷物一式を運んできた衛兵の一人が、短剣の小柄で箱をこじ開けた。確かにそこには、派手派手しい衣装や、マスクや、カードなどにまじって、色はすっかり灰色に変色していたものの、子供のこぶし大の木製の白球が三個入っていた。

王は体をゆすると、ベッドの上に起きあがろうとした。

すかさず侍従が、その半身を支え、背中にクツションをあてがった。

王は大きく息をついた。

「こちらへ持て」

王の手に白球が渡された。

王は右手に二個、左手に一個を握ると、しばらくその感触を確かめているようだった。

突然、病人とは思われない、はっきりとした声が発せられた。

「東西！ 数々演じて参りましたれど、いよよ王の道化の最後の出し物。三ツ玉のジャグリングでござあい。うまく回りましたらお慰みい！」

王の手から白球が軽やかに舞い上がった。

その球はすぐに次々ぽたぽたと床に落ちていったが、そこに居合わせた人々には、三つの球が鮮やかに宙にぐるぐると円を描いたように思えた。

「おいぼれたものよ」

荒い息の下の王のつぶやきは誰にも聞き取られなかった。

続いて王は、今度は皆に聞こえるくらいの声で、
「しばらく休む」

と言いつき、静かに瞼を閉じたのだった。

(了)

「つきのまほう」 37号（二〇〇〇年四月下旬）初出

Creative Synapse社、非インターネットのネットのネツトサークルだったが、その活動の中ではいくつかの紙ベースの同人誌との交流があり、「月の魔法」はそのひとつだった。そこでは毎回「お題」が出て、それに沿った作品を書くコーナーがあった。ぼくも何作かそうしたテーマ作品を載せてもらった。

日本英雄伝

姉でもある最高神・アマテラスに誤解を受け、神の国タカマガハラから、アシハラの中つ国に追われた若き猛神スサノオは、再び神として復活すべく、伝説の悪蛇ヤマタノオロチを探し求め、苦難の旅を続けていた。しかし、あるとき、死の大王ヨモツカミの策謀によって、死者の世界・根の国の迷宮に落ち込むこととなってしまった。君は、英雄スサノオとなって、この迷宮を脱出し、中つ国を平定しなければならぬ。

ゲームをスタートしますか？

P!

「ナオシ、ナオちゃん。朝よ。八時よ」

母親の声に、直志は目を覚ました。

がばと跳ね起きる。

「なんだと！ 今日七時に起こせといったらうが」

「起こしたのよ。でも、もう少し寝るって言って、また寝ちゃったのよ」

「ふざけるな。起こせと言ったら、ちゃんと起こすんだよ」

直志はパジャマ代わりのトレーナーを頭から脱いで母親に投げつけた。

「ごめんなさいね。なにかやることがあったの？」

「うるさい。関係ないだろ。早く出てけよ」

「ゴメンね。朝ご飯出来るからね。下に来て」

「いらぬ。もう食ってるひまなんか、ないだろっ」

直志は、プラスチック製のくずかごを、部屋から出ていこうとする母親の後ろ姿に投げつけた。

彼はひどく腹を立てていた。ただ、それは本当は自分自身に対する腹立ちだった。

（俺ともあろうものが、こんな大事な日に寝坊をす

るなんて)

直志は学生服に着替えると、部屋のドアに鍵をかけてから、机の鍵を開けた。

一番下の引き出しの中からタオルにくるんだあれを取り出すと、バックパックの底に入れる。さらに一昨日隣の量販店で買ってきたペラペラの安物のハーフコートと、ナイキのキャップを放り込む。

バックパックのストラップを片方の肩に掛けた。

いつものように、登校しなくてはならない。今日はとりわけ平凡に。

どちらに進みますか？

1. 北 2. 南 3. 東 4. 西

P!

行き止まりです。戻りますか？

日本史の授業はたいくつだった。

今時分まだ奈良時代では、来年三月までに、とうてい教科書は終わらないだろう。直志には、教師がだらだらとしゃべっているのが気に入らない。

歴史は暗記科目なのだし、もっとポイントを押さえ、わかりやすくやって欲しい。しかしこの教師は、歴史年表の暗記すら出来ていないのだ。よく間違ってしまう。ようするにおおざっぱなのだ。しかし、それで間違った年号を覚えさせられたら、生徒はたまったものではない。

「奈良時代の文化の特徴として、一番重要なのは、本が書かれるようになったということなんだな。何か知ってるか」

「げんじものがたり？」

(あほ。『源氏』は平安だろうが)

「イイ線行ったが、ちょいハズレ。『古事記』『日本書紀』『万葉集』といったところだ。もちろん、これ以前にもあったはずだが、この辺ではじめて本格的な書物が生まれてきた。」

「『古事記』『日本書紀』は、ほとんど同じような内容が書かれているんだ。いわば歴史の本の第一号みたいなもんだな。初めの方は神話から始まっている。」

「最初に生まれた神様は、イザナギとイザナミというカプルの神様で、この二人が日本を作ったと…」（違う！）

直志は、おもわず声をあげてしまった。

「違います！ 記紀では、初めの神はアメノミナカヌシノカミで、続いてタカミムスヒノカミとカムムスヒノカミが生まれ、次にウマシアシカビヒコジノカミ…」
「あ、あ、わかった、わかった。そうだったかもしれない」

教師は両手を合わせてから、汗を拭く仕事をした。クラスにどっと笑いが湧いた。

「さすが、『血風・神国日本英雄伝』オタク!!」

誰かが叫ぶと、さらに笑いが爆発した。

直志はおもわず下を向いた。顔が熱くなる感じがした。

（ばかやろう！ 俺の知識はそんな低級なテレビゲー

ムから得たんじゃ無い！ 教師もクラスの奴らも、みんなC級の下層民ばかりだ。記紀を読んだこともないこんな奴らに、何で俺が笑われなきゃならないんだ！）
「え、なに？ そんなゲームが流行ってるの？ でも、まあ、それもイイところを突いてるのかもしいね。」
「日本も含めて、神話というのは通過儀礼、つまり、成人になるための儀式や、ある地位を受け継ぐための儀式などを、お話の形で表したものが多くとされているんだ。」

「現代社会では、そういった儀式や風習がどんどん廃れてきて、子供が大人になるケジメがつきにくくなってきている。案外そういうゲームが、疑似体験的に、君たちの通過儀礼の代わりを果たしているのかもしれないよ。話が脱線したついでに、ユングという心理学者の説によれば…」

直志には、もうこんなくだらないオシャベリを聞く気にはならなかった。

かっかとした頭を沈めようと、「今日の計画」をもう一度順を追ってなぞってみようとした。しかし、興

奮した頭に浮かんでくるのは、A級支配階層であるべき自分が、C級の群の中に放り込まれている理不尽への、止めどない怒りの感情ばかりだった。

亡者が話しかけてきました。
話に応じますか？

1. 応じる 2. 無視する

P！

「掃除当番だろ」という声を無視して、直志は教室を飛び出し、自転車にまたがると校門を駆け抜けた。

とりあえずは自宅の方向へ走る。

しばらくして、誰も近くに知り合いがいそうもないことを確認すると、急回転して人通りの少ない路地に飛び込む。さらにペダルを踏み込んで路地から路地へと進んで行った。

日曜日に確認したコースである。

いったん自転車を止めると、学生服の上着を脱いで、ハーフコートに着替えキャップをかぶった。用意してあった車手もはめた。

再び自転車をこぎ始めると、予定通り幹線道路がすぐだった。

人間というのは、あらかじめ不平等に出来ている、というのが直志の考えだった。

勝てる能力の有る人間と、無い人間。

優れた能力を持った人間は、他の人間の上に立って支配し、世界史を動かしていくべき運命を持っている。

直志はこの階層を仮にA級と呼んでいた。

自分の頭で考えることが出来ず、年中くだらない欲望を利根的に満たしている連中もいる。こいつらはC級だ。こいつらは言われたとおりに仕事をしてくれさえすればいい。そして事実、世の中にいる大半の人間は、秩序を守って従順に仕事をしている。

Cの中でも、ちょっと頭がいい奴がB級で、彼らは

A級から出された指示をC級に実行させる管理職の役目を果たしている。そこら辺にゴロゴロいるくだけない政治家や実業家などがこれだ。

そして、それ以外の「アウト・オブ・カースト」。

世の中においても、何も生み出すことのない奴ら。

社会の慈悲だけで生かさせてもらっている奴ら。

お荷物。

ゴミ。

年寄り、障害者、ホームレス、子供。

子供？ もちろん、子供はしかたがない。これは将来の生産性を期待できるのだから、まあとりあえず

準C級とでも言っておこうか。

直志は自分はA級でしかあり得ないと感じる。

特別に勉強をしなくたって成績が落ちることはない。みんなが難しいという本だっただけ読みこなすことが出来る。当然、支配する側に立つべき人間なのだ。

おとなは、福祉だとか自由平等とか言っているけれど、それは建前でしかない。新聞やテレビのニュース

をちょっと見ていけばすぐわかることだ。

この世界は弱肉強食に出来ているのだ。

勝つ力のある強いものが、弱いものを従属させ支配するのだ。

するのだ。

それが不満なら、力をつけて強くなればいいのだ。

弱いものには何を主張する権利もない。弱い奴は永遠に

いじめ続けられてもしかたないのだ。

……イジメ？ それは……。

直志は、ふとよみがえりそうになった自分がイジメ

にあつていた中学時代の記憶を、無理やりに心の奥に押し返した。

しかし、と直志は考える。

こんな風にC級の中に埋没させられていると、とき

どき、本当に自分がA級なのか不安になってくる。

まわりの奴が、直志のことを理解できないのは仕方

ないとしても、少なくとも自分が自分に確信を持って

いなくてはならない。

そのためには、自分自身に対して、自分がAである

ことを証明する必要があるのだ。

どちらに進みますか？

1. 北
2. 南
3. 東
4. 西

P!

家が建ち並ぶ村があります。

幹線道路の歩道をしばらく走っていくと、やがて市境を二つ越えるところまでやって来た。

このあたりでよいだろうと判断して、直志は住宅街とおぼしき方向に自転車を向けた。

静かな住宅街の、なるべく人気の少なそうな道を選びながら、ゆっくりと自転車を走らす。目だけは家々の表札を見ている。

へ多田仁太朗、ハナへ

それが目に入ったのは、もちろん偶然にすぎない。小さな古びた表札だった。

しかし、これが自分の目指していた家だと、直志は直感した。

静まり返った家です。

入ってみますか？

1. 入る
2. 入らない

P!

小鬼が出てきました。

闘いますか？

歴史上の偉人や英雄は、必ず何かしらの苦難を乗

り越えて、成長し認められていく。

だから直志も、何かやらなくてはならないのだ。

C級の奴らにとっては、大騒ぎするような大ゴトかもしれないが、A級の自分にとっては何でもないことのはずだ。

世の中の何の役にも立っていない「アウト・オブ・カースト」をひねりつぶすことくらいは。

用心のため、二区画くらい走って、マンションの陰に自転車を止めた。

何気ないフリをしながら、今来た道に戻る。なぜか、とてつもなく遠い距離のような気がする。出来れば、永久にたどり着けない方が……。

直志は弱気になる自分を叱りつけた。

決めたことは何でもやる、それこそがA級たる資格なのだ。

バックパックを胸の前に抱えるように持ち変える
と、ファスナーを開けて、底の方に手を入れ、周りから見えないように気をつけながら、包丁を包んでいた

タオルをそっと開き、柄をしつかりと握りしめた。

気づけばもう「多田家」の前だった。

いかにも老人の名前だ。

しかも表札は二人だけ。

この名前を見つめて、直志は何度か口の中でつぶやいてみた。

心臓が破裂するかと思うくらい、激しく打った。

ふるえる左手で、玄関の引き戸を開く。

「…、こ、こんにちは」

はい、という声が家の奥から帰ってきて、どたどた、という感じで、太った老婆が現れた。

「はい、なんでしょう」

「…、じんたろう、さん、は、いますか」

老婆はいぶかしそうに直志を見た。

「いえ、あいにく、出かけてるんですけど」

ひとりだ！ 今ならひとりしかない。直志の動悸

はさらに一段、激しさを増した。

「あ、あの」

次の瞬間、ぱつ、と、直志の右手がバックパックの

中から飛び出した。

包丁の刃が鈍い光を放つ。

「ぎゃ」

包丁が相手のどこかの肉を切り裂く感じが、直志の手のひらに伝わった。

「きゃー、助けてー」

老婆はへたり込みながら、驚くほど大きな声をあげた。

続いて、家の奥から軽やかな足音がして、外出着姿の中年の女が現れた。

「おかあさん？ どうしたの……。きゃあ、泥棒！

泥棒！ 誰かー！ 泥棒よー！」

直志は突然現れた女に驚愕した。

なんだ？ これはなんなんだ？

次に気づいたときには、直志はすでに家の玄関を飛び出し、街路を駆けだしていた。

走っている自分に、道行く人の視線が集まっていた。

ふと見ると、右手はまだ強く包丁を握りしめていた。手を開こうとしても、手の筋肉は全くいうことをきかなかった。ハーフコートに血の跡が転々と着いているのもわかった。

こんなところを走っているのは絶対マズイ。

その時、目の前に公園が見えた。あそこだ。直志は低い柵を乗り越えて中に飛び込んだ。

初めから何だろうと思っていた、小さなコンクリート製の小屋に近づいた。トイレだった。直志はためらわず中に入ると、個室に飛び込み錠をかけた。

無人の家です。

周囲に鬼が集まってきました。

1. 出て行って闘う 2. 何もせずやり過ごす

P!

何が起こったのだろう。

ひとりじゃなかった。あのババア嘘をつきやがった。

あれは娘か？

直志は息を弾ませながら、うかつさにやっと気づき、自分を呪った。

「仁太郎」は確かに不在だったが、他に来客があったのだ。

そんなことは、玄関の履き物を見てさえいれば、容易に判断できたことなのに。Aの自分にはあるまじき失敗だった。

急に力が抜けて、直志はへたへたと、汚物がこびりついた大便器の隣に座り込んでいった。

遠くでパトカーのサイレンが聞こえていた。いや、救急車かもしれない。

時間の感覚が全然ない。

トイレの外に、緊張した人の声が、いくつも近づいてきた。

「植え込みにも気を付けろ。間違いなくこの近くだ」

「あー、もしもし、現在、近隣の公園を捜索中…」

「なんだ、ここは。トイレか」

堅く重たい足音がした。

ノブが乱暴に引かれた。

「あ、閉まってるぞ。もしもし！誰か入ってますか？

警察です。誰かいたら答えて下さい」

「ちょっとおかしい。気を付けろ」

「もしもし、いないんですか？」

「かまわん、ちょっと上からのぞいて見ろ。それ、持ち上げるぞ……」

GAME OVER

GAME OVER

GAME OVER

GAME OVER

リセットしますか？

了

「つきのまほう」 38号（二〇〇〇年七月下旬）初出

認識論的存在論・要旨

―今日は「存在」について話しましょう。

―「存在」ですか？ 難しい話は……

―存在とはなにか、あなた、わかりますか。

―いえ、そういう話は苦手です。

―存在というのはね、あなた。つまり、人間によって認識されると言うことです。

―はあ。

―存在と言ったってね、そこに何かが存在しているわけではないのです。

―??

―モノが在るとするのは、まさに、モノが認識されるという意味以外ではないのです。

―それは、ちょっと……。

―例えばですね。これは何色に見えますか。

―白です。

―じゃ、これは？

―それも白ですね。

―あーはっはあ。しかしこれはイヌイットにとっては違う色なのですよ。

―イヌイット……

―いわゆる、エスキモーですな。あなた、このくらい言葉、知ってないと国際社会では笑われますよ。イヌイットには、日本人が白と呼ぶ色にも何種類もあるんですよ。これを日本に置き換えれば、たとえば雨の呼び方ですな。小雨、霧雨、土砂降り、小糠雨、五月雨、わたあめ、べっこうあめ、キャラメル、キャンデー……

―あの。

―いやいや、あっはっはー。ジョークですよ、ジョーク。ジョーク、わからないと、国際社会で笑い者ですよ。……なんの話だっけ？ あ、そうそう。だからね、よその国には、こんなに雨の区別はないでしょう。みんな同じ雨にしか感じないのよ、ガイジンは。ね、つまり、ガイジンにとっては霧雨も小糠雨も存在しない

わけですよ。あなたにとって、白色が一色しか存在しないのと同じようにね。

—うーん。わかったような、わからないような。

—君も、また理解力が低いなあ。

—詭弁じゃないんですか？

—なんだと！ おまえのボケナス頭じゃ認識できることが少なすぎて、脳味噌そのものが存在してないんだよ。スカスカ頭がっ！

—あ、いやいや、よくわかりました。教えてくれて本当にありがとう。……ところで、私、実はあなたに保険を掛けているのです。

—なに？

—しかし、いざとなると殺すに忍びない。ずっと、ためらっていたんですがね。でも、今の話を聞いて大変安心しました。

—君、ちょっと。

—なぜならあなたに死はあり得ないからです。

—あつ、ぐうう。

—認識できないものは、存在しないんでしょう？

—うっうっうっ……

—ということは、自分が死んだ瞬間には、自分が死んだことをすでに認識できなくなっているのですから、あなたの説によれば、あなたに認識できないあなたの死は存在しないのです。そうですね？

—……

—本当に、為になりましたよ。ありがとう。

了

「つきのまほう」 39号 2000/09 初出

オヤジの魔法使い

カカシが言いました。

「私は脳みそが欲しいのです」

「おまえには、もうすでに十分な知恵があると思うがな。しかし、どうしてもというのなら……」

魔法使いは、フスマに釘やピンを混ぜたものをカカシの頭の中に詰め込みました。

「ありがとうございます。なんだかとても調子が良くなりました」

「わしは、心臓が欲しいんじゃ」

次にブリキ男が言いました。

魔法使いは、ブリキ男の胸に小さな穴をあけると、その中に、おがくずを詰めた小さな絹の袋を入れました。

ブリキ男はたいそう喜びました。

「ぼっ、ぼくは、ゆ、勇気が欲しいです」

ライオンが言いました。

魔法使いは、四角い緑色の瓶から、やっぱり緑色のお皿に液体をそそいで、ライオンに飲むように命じました。

ライオンが思い切ってそれを飲み干すと、なんだかとても強くなった気持ちになりました。

最後はドロシーの番でした。

「あたしはカンザスに帰りたいの」

「なんだって？」

魔法使いが聞き返しました。

「カンザス！ カンザスシティよ、あたしの故郷の！」

「はあ？ ああ、わかったわかった、ちょっと待ってくれ」

魔法使いは戸棚から、キラキラときれいに光る小さななにかを取り出して、ドロシーに手渡しました。それはミニチュアの魔法の杖のように見えました。

「ありがとうございます。でも、これはどうやって使うの？」

「髪に挿してごらん」

ドロシーは小さな杖を髪に挿しました。

「……」

「……」

「……」

「……」

「なんにも起きないじゃないのー！ どーなってるのよ、コレ」

「えっ。それで終わりじゃよ」

「なーに言ってるんだよ、このクソオヤジっ」

「ほっほっほ。だって君は言ったろ。カンザステイ、カンザシしてー、カンザシしたい！ ってね。ほーっほっほっほ」

魔法使いは、エイズ葉害訴訟のアベきょうじゅそっくりの声で笑いました。

一分後は、ライオンのおなかの中にいました。

どっとはらい。

(参考文献「オズの魔法使い」ライマン・フランク・ボーム／佐藤高子訳 早川書房)

「つきのまほう」42号(二〇〇一年八月二十七日)
初出

一魂堂人形秘話

蜩二郎、弥生の風に震える

のんびりとした物売りの声が響いてきた。どこかの路地で子供たちが遊び騒ぐ声も風に運ばれてきた。しかし、直造の耳にはもう何も聞こえていなかった。神経は鑿のみの先に集中していたのだ。

ふと気づくと隣間で恵の動く気配がした。

「すまねえ。起こしちまったか？ ラジオでもかけようか」

「ううん、いいの。あたし、あんたの鑿の音を聞いていると、なんだか気持ちがいせいでいいするんだもの。…アイはどうしたの？」

「ああ、さっきちょっとグズりはじめたもんで、隣のおばさんに見てもらってる。さすがに八人もガキ育てただけあって、子供の扱いに慣れてらあ。アイもこんなところ、すっかりなついてるよ」

恵が少し寂しそうな顔をしたが、ほの暗い部屋の中で、直造にはよく見えなかった。

「それはそうと、表通りの町田先生。なんでも独逸ドイツの薬でとても効くのあるんだそうだ。今探してくてるから、お前ももうちつとの辛抱だぜ」

「だめよ！ そんなの！ やめて…」

恵がもがくようにして布団から起きあがろうとしたので、直造はあわてて駆け寄り、恵の上体を抱きとめた。

「おい、無理しちゃいけねえ」

「あたしはもう長くない。それは自分が一番よく知ってるの。ねえ、お願いだから、あたしの薬に使うお金があったら、アイのために少しでも蓄えに回してちょうだい。お願い…」

「わかった。わかったから、横になんな」

「あたし幸せだったわ。あんたと夫婦めおとになれて、アイという娘にも恵まれたし。…：…そうだ、あたしの化粧箱の中にあの簪かんざしが入ってるの」

「なに？」

「ほら、あんたに初めて買ってもらった簪よ。ほんとにあの時はうれしかったわ。あたしね、いつかあれをアイにやろうと思ってた。あたしが死んだらあの子にやっ。あたしの体は無くなっても、あたしの気持ちが残ってあの子を守る気がする。……せめてアイがあ簪を挿すところを見てみたかったなあ」

「お恵」

直造は、おもわず妻の手を握りしめた。

「ごめんください」

さすがに都内有数の超高級高層マンションだった。

珠緒の心配は全く無用で、エントランスホールはもちろん、エレベーターの中も廊下も、入り口ドアも、らくらく三人の大人と二つの大荷物を通すくらいに広かった。

しかしそれにも増して、竹中夫人に通されたリビングがすごかった。

作業服の男二人に荷物を解かしている間、珠緒は

半ば呆然として室内を見回した。今日は、ちょっと丈の短いスカートのスーツを着てきたのだが、ジーパンにしなくて正解だったと思った。もともと、はた目から見たら、リクルート中の女子学生にしか見えなかったが。

二方に大きく開いた窓からは、ごちゃごちゃした東京の町並みが遙か下方に消え、太平洋さえすぐ間近に見えた。このリビングの広さだけでも、佐藤一魂堂の事務所兼工房兼従業員宿舎であるボロマンションの3LDKがすっぽり入って、まだ余裕があるのでないかと思われた。

億は間違いないが、二億？三億？。

それだけあったら、と珠緒は想像した。借金を返して、蛭二郎をクビにし、営業車を買って……。

「どうかしましたか？」

不審に思った竹中夫人が声をかけた。

「い、いえ。な、な、なんでもありませんことよ、オホホ。……そ、それにしても、すてきなおうちですなえ」

「でもねえ、四月で娘も小学校だし、ちょっと手狭かなという気がして。主人にもっと広いところはないか、探してもらっているところなんですのよ」

珠緒は頭の後ろに大きな汗マーク。

夫人が席を外すと、作業服のうちの中年男が、珠緒の前に来てにらみつけた。

「おい、ちっとでも手伝おうって気がねえのか」

「当然でしょ。わたしは経営者、あんたは従業員なんですからね」

「なーにを！ おれは職人だい」

若い作業服の男が手を休めないまま、振り返って叫んだ。

「もお、蛭二朗さんも珠緒ちゃんも、急いでくださいよ。俺も次の仕事入ってんだから」

珠緒と蛭二朗の目の間に火花が散った。

一魂堂は江戸時代から続く人形店の老舗だったが、時代の流れには勝てず、珠緒の父である先代が死ん

だ時には、何人かいた人形職人も雪蛭二朗ひとりになっており、経営も、副業で始めた玩具店の収益に頼っているありさまだった。

そんなわけで、今回の竹中家の「豪華二十段・手作り雛飾り大セット」はひさしぶりの大仕事だったのである。

珠緒にとってもこれだけの仕事は初めてだったが、蛭二朗にしても自分の腕を存分に振るえるとおあって、本心はうれしくて仕方ないのだった。

とは言え、人件費を極力浮かせたい事情では、搬入と飾り付けにも、赤帽の満男ひとりを頼んだだけで、珠緒と蛭二朗がみずから出向いてきたのだった。

「本当にきれい！ やっぱり一魂堂さんをお願いして良かったわ」

リビングの一角に雛人形を飾り付け終わると、竹中夫人は一行をダイニングに呼んで、紅茶とケーキを振る舞った。

「実は私の母方のひいおじいさんも人形師だったらし

いんだけど。戦争でみんな焼けちゃったそうでも何も残ってないんですよ。私のおばあちゃんが死ぬ前にくれた変な人形だけ……、そうだ、一魂堂さん、ちょっと見てもらえませんか？」

夫人は食器棚の上に乗せてあったポリ袋を降ろした。

透明の袋の中には、見るからに古びた人形が入っていた。

「こんな汚いんで捨てようかとも思ったんですけど、お人形っていうのは捨てづらくて。それに、もしかしたらひょっとして珍しい、価値のあるものかもしれない、なんてね」

人形を受け取った珠緒は、隣の螢二朗に手渡す。「確かに、こんな人形は見たことないが」

それは三十センチに満たない粗末な人形だった。

抱き人形の一種なのだろうが、手も足もついていない、いわばこけしスタイルだった。

胴体に柄模様の子きれを何枚か巻き付けて着物に見立てていた。

珍しいのはその頭で、ガラスか石の球で出来ているように色は肌色というよりは赤に近い。そこに目と口が描き込まれている。しかし胴体に比べるとその大きさはずいぶん小さかった。

頭の上には島田を模した髪が載せられていたが、明らかに何度かはがれては付けなおした跡が残っていた。

「うーん、これは」

と、螢二朗がうなったのは、もちろん、こんな二束三文には値段も付かない、という意味だったが、夫人は違う意味にとったようで、瞳を輝かせた。

螢二朗が口を開く前に、珠緒があわてて言った。

「奥様。ちょうど良かったですわ。一魂堂ではただいま『古人形お宝鑑定＋修理サービス・キャンペーン』の期間中ですの。通常の半額で承らせていただきます。このお人形はさっそくお預かりしますわね！」

よくもまあ、とっきの時にこんなデタラメを並べられるものだと、螢二朗はあらためてこの小娘にあきれ果てるのだった。

目覚めると、蛭二郎は、頭の芯と胃袋の奥に、鈍いしびれというか重苦しきを感じた。頭を少し上げると、くらくらとめまいがした。

「あたたた」

毎度おなじみの感覚だった。

昨日は打ち上げと称して、ひとりで行きつけのスナックや飲み屋をハシゴして回り、どうやってポロマンシヨンの二階の部屋へ帰ってきたのか記憶がない。

決意を固めてもぞもぞ起きあがると、水を求めてダイニングキッチンへ這うようにして向かう。

するとテーブルの上に、例の抱き人形とメモ紙が置いてあった。

へ社長命令。雪従業員殿。人形の鑑定書を本日中に作成すること。(出来てなかったら減給するからね!)
ますます胸が悪くなった。

人形をひつつかむと、ふらふらと洗面台に向かった。

洗面台の窓に人形を置くと、蛇口をいっばいに開けて、ザフザフと顔を洗う。

すると、今度はかなり激しいめまいがした。

「おっと」

いや違う。部屋の中までカタカタとものが揺れる音がしている。地震だ。

と、目の前においてあった人形がパタリと倒れた。

それは、ころりと回転すると、すんと窓の外に落ちていった。

「お、おーい」

あわてて狭い窓からむりやり下をのぞくと、人形は一階のひさしの上に落ちていた。

急いでジャージの上下を身につけて、階下へ走った。

管理室で脚立を借りると、隣のビルとの間の狭い路地に脚立を立てる。ひさしの上に顔を出して人形を見つけることは出来たが、手を伸ばしても、もう少しで届かなかった。何か棒のようなものを持ってこないか、と思ったとき、目の前にばさばさと一羽のカラスが降り立った。

おもわずのけぞる。

ところが、カラスはなにを思ったか、人形をくわえると、また、ばさばさ飛び立ったのである。

「ちょっとお！」

脚立から飛び降りると、カラスを目で追いながら走った。

さすがにカラスには重たいようで、ふらふらと力無く飛んでいくので、なんとか見失わずにはすみそうだった。ところが、カラスが向かったのは大通りだった。

通りはいつもながら車であふれかえっていた。カラスは蛍二朗をからかうように車の上を横切っていた。蛍二朗の足が止まった。

いや、しかし。

一度高度を上げたカラスだったが、再びガクリと落ちてきて、その拍子にくわえた人形を落としてしまった。

蛍二朗の目が人形を追う。すると、人形は信号待ちしていた一台の車の上にポトンと落ちた。

「その車、待ってくれー」

蛍二朗がダッシュしようとしたとき、車が次々動き始めた。

文字通り、春は名のみ風の寒さだった。もう日も暮れようとしていた。

どこもしれない小さな公園のベンチで、蛍二朗は薄いジャージ一枚で震えながら、手に持った人形に語りかけていた。その姿は、見ようによっては完全に「変質者」だったが。

「まったく、ずいぶん走らせしてくれたよなあ。ま、おかげで酒はすっかり抜けたけどな」

幸か不幸だったのかわからないが、道路が適度に渋滞していたおかげで、走って走って追いかけて、やっとのことで人形を乗せた車に追いつくことが出来たのだ。しかし、ここがどこだか見当がつかなくなってしまうた。

と、ふと顔を上げると、目の前に見覚えのあるビルがあることに気がついた。

「おまえ、まさか」

竹中家が入っている超高級高層マンション。

「自分の家に帰ろうとしたのか？ そうか……。わかった大丈夫だ。帰してやるよ。でもその前に、ずいぶ

ん汚れちまったら？俺のところであつと化粧直ししてから帰ろうぜ、どうだ？」

人形がにっこりほほえんだように、螢二郎には見え
た。

「申し訳ありませんが、この人形に値段は付けられ
ません」

珠緒に無理やり着せられた慣れないスーツ姿の螢二
朗が言った。

「そう、やっぱりね」

リビングのソファに寄りかかりながら、竹中夫人は
いかにもがっかりした様子だった。

「いえ、そういう意味ではないんで。というか、この
人形は奥さんが持っておられないと意味がないもので
すから」

「それはどういう？」

「昨日、修理がてらに、こいつを解体したんですが、
こんな書き付けが出てきました。いや、これはコピー
で、本物は元通り中に入れましたが」

竹中夫人はちょっと顔をしかめながらコピーを眺め
た。

「筆書きなんで読みづらいですが、たぶん奥さんのひ
いおじいさんにあたる直造という職人が、自分の娘（つ
まり、奥さんのおばあさんですね）のお守りとして、
亡くなった妻の形見の簪を埋め込んで人形を作った、
ということが書いてあります」

「まあ」

「確かに、この人形の頭は簪の飾りをそのまま使って
いました、珊瑚のようですが。串の部分が胴体の芯に
なる形で埋め込まれています。……そういうわけで、
これは特別な人形なんです。この家以外に置いても意
味ありません」

その時、玄関チャイムが鳴って、どたどたと子供が
駆け込んできた。

「あ！ケイちゃんだ！」

その女の子はリビングテーブルの上に置いてあった
抱き人形を見つけると、素早く手に取った。
「これっ！愛香。お客さんがいらっしやっているでし

よう。ごあいさつなさい」

「こんにちは」

子供の後から、きりっとした若い女性が入ってきた。

「ただいま戻りました。愛香様は今日もお元気で、幼稚園でも変わったことは無かったそうです。卒園式のためのお遊戯をなさったとのことですよ」

「ごくろうさま。明日もよろしくお願ひしますね」

夫人の言葉を待って、若い女性は部屋を出ていった。

「こちらが、お嬢さんですか」

珠緒が訊いた。

「そうなんです。おばあちゃんから一字もらって名前を付けたんですよ」

愛香は人形を抱きしめながら、雛飾りを見せてやっているようだった。

「この人形はケイちゃんって言うんですか」

「なんですか。幼稚園前くらいまではこの人形が大のお気に入りです。いつの間にか勝手にケイちゃんって名前を付けたんですよ。しばらくほったらかしていたから忘れたのかと思ったら、昨日幼稚園から帰ってきて

急にケイちゃんがないーってグズりまして」

「二十一世紀の名匠、大正の名匠に会う、ってことだな」

「なによ、それ」

並んで歩きながら、珠緒が螢二郎にちゃちゃを入れた。

「俺という現代の名匠がいなかったら、直造って大正時代の名匠は埋もれたまんまだったんだぞ」

「どこが名匠よ」

「おいおい。自分の家に帰ろうとするほど魂の入った人形を作ったんだぜ」

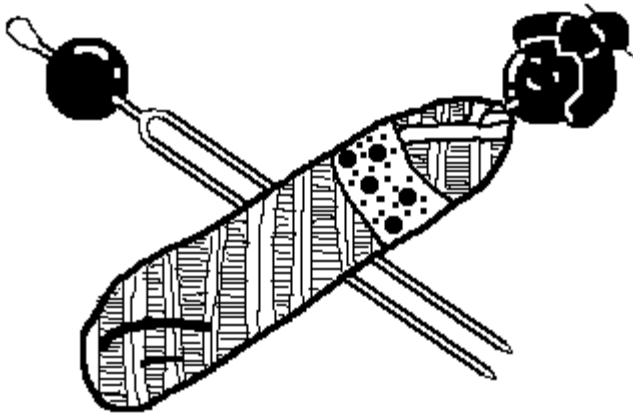
「なーにが。だいたい、もし本当に人形が家に帰ろうとしたんだとしても、それは娘を思うお母さんの気持ちが強かったからでしょ。人形師の力のせいじゃないわ。あーあ、あたしは魂が入るより、お金が入る方がずっといいわー。……あ痛っ！」

突然、珠緒が頭を抱えて歩道にしゃがみ込んだ。
「ど、どうした。大丈夫か」

「大丈夫じゃない。鑑定料と修理代、請求するの
忘れたのよおー！」

— 了 —

初出 「つきのまほう」42号（二〇〇〇一年八月二十七日）



madashu

最期の夜に

深夜、真津子は薄暗い豆電球のついた六畳間の布団の中で、激しい発作に襲われて目を覚ました。

不運なことに今晚、弟は夜勤で戻ってこない。寝たきりの母は、隣の四畳半で薬を飲んで熟睡している。

「今度は死ぬかもしれない」と真津子は苦しい息の下で思った。調子が悪くなっているのは自覚していたが、母の治療費が大分かさんできたこともあって、仕事を減らすことが出来ず、この数ヶ月医者に行っていないかった。

意識が薄れてきた。

と、そのとき、布団のかたわらに白い人影が立っているのが見えた。

「もう楽にして良い。おまえの罪は許された」

その人が柔らかな口調でそう言うと、ふっと真津子の発作が収まった。

「おまえは若い時から病弱な母と幼い弟の面倒を見てきて随分と苦勞をした。知っていたかな、神は常におまえと共にあったのだよ」

その人は白いふわふわした服を着た金髪の若い男で、青い目をしたヨーロッパ人だった。

「さあ、苦しみは終わった。私は天使である。主に命じられて、おまえを永遠なる安らぎの国へ連れに来たのだ」

真津子の心の中に暖かなものが流れ込み、今まで暗い天井があったところに黄金に輝く荘嚴な扉があるのが見えるようになってきた。真津子は天使に向けて右手を持ち上げ……

「ねえね、カノジヨ、ちょっといい?」

突然、明るくて爽やかな声が聞こえた。

今度現れたのはノーネクタイのスーツ姿の青年だった。ドレスシャツの胸元を開け、裾はパンツの外に出して、栗色の髪はサラサラ、前髪を目にかかるくらいのところまでカットしている。顔はバタくさいけれど明らかに東洋人だった。

真津子と天使は青年に目をやったまま固まった。

「あのさー、キミ、えっと真津子ちゃん。アナタうち『ラッキーガール得々キャンペーン』の特別優待者選ばれちゃったのよ。これってさ、うちのミレニアム記念特別大企画で、ほんっと、スゲエ特典の付いた超超ラッキーなサービスでさ。もうコリヤもらい得なってもんじゃないのよ、ほんとスゲエんだから。ちょっと説明すんねー。一度会員になるとサービスは一生涯受けられて、しかも年会費免除！ つまりタダなことね。んでもって、このサービスっていうのがすごい。健康から金銭、恋愛、仕事、野望、欲望、もう何でもありとあらゆるアナタの希望を、すべてかなえてあげるっていうのよ。これ、すごいしょ。もうなんでもOK、オールマイティカード、バトルポイント最大、もう最高最強ってなもんよ。それに手続き簡単、今ここで一回サインするだけで全部OK。よかったねー。ホント世界まるごとラッキーガールだねー。はい、これ契約カード。はいはい、ペンも用意してありますよー。あ、ごめん。インク忘れてるわ。オレってドジ。

ゴメン悪いだけさー、ちょっとキミの血をインク代わりにいいかなー」

「な、なに。これ」

やっと我に返った天使が叫んだ。

「気を付けろ！ こいつは悪魔だ。何をしに来た。

すぐさま失せよ、サタンめが！」

「あーあ、熱くなっちゃって。ねーえ真津子ちゃん、落ち着いて考えてみた方がいいよ。その白っぽい奴はあーだこーだ言って、結局キミを殺そうとしてるんだよ。それに比べてウチはキミの寿命まで健康と幸せを保証しようって言ってんの。どっちが得かすぐわかるでしょ？」

「真津子、悪魔の誘惑に乗るな。悪魔に魂を売れば永劫に地獄の業火に焼かれることになるんだぞ」

「地獄って、アンタねえ…。ウチはオタクの神様から信者を引き離して、こちらの会員にすること自体が目的なんだから、せっかく獲得した会員をイジメたりはしてないよ。死んだあともこの世と同じ環境でいてもらおうとしてるだけっしょ。貧困だの戦争だの虐殺

だの暴力だの差別だの、この世にあるものを再現して
るだけよ。まったく、タメのくせして偉そうにさー」

「タメ？なの……。天使と悪魔って」

「そうそう。もともとオレらは神様があんまり横暴な
んで、大天使ルシフェル同志の指揮の下で決起した一
派なのよ。いわば革命派天使。まあ、結局負けて天
を追いつき出されちゃったんだけど。スローガンは『人間
性の回復』よ」

「言わせておけば、不遜なことを」

「なあ、アンタ古すぎんだよ。もうこの五百年くらい
は人間主義がトレンドなんだぜ」

「こんなひどい世の中が人間的だというのか！」

「じゃ、アンタの天国は人間的なのかい？ 戒律に縛
られ、何の事件も起きないことが最良とされる世界な
んで、いわば精神の荒野じゃないのかい」

「この悪魔！」

「なんだと原理主義者！」

「ちょっとお！ いい加減にしてよ！ ひとが死にか
けてるときにい！」

「ゴメン、ついついね。とにかくキミが決めてくれ」

「そうだ、おまえはどちらを選ぶのだ」

「そうねえ……」

真津子は少し考えてから決断を下した。

「今日から改宗するわ、仏教に」

「つきのまほう」(二〇〇二年九月) 初出

2002/9

〈夢見亭・落書きノート〉より

黒猫とぼく

黒猫と蟬とヒヨドリ

ぼくが、冷房のきいたデパートの喫煙コーナーでベ
ンチに腰かけて居眠りしていたら、肩をぐいぐいと揺
すられた。

「もしもし、ここで眠っちゃだめですよ」

空色の制服を着た、ガードマンだった。

ぼくは、薄目を開けて、ぼんやりと彼の顔を見上
げ、そして、また、目を閉じた。

「だめだったらあ」

今度は両肩を揺すられる。

仕方なく、ぼくは胸に抱きかかえていたアタッシェ
・ケースを降ろして立ち上がり、うーんとひとつ伸び
をした。

昼食を食べるとどうしても眠くなる。次のお客との
約束の時間までしばらくあったし。背広の背中の上を
を伸ばし、ポケットにつっこんであったネクタイを取
り出して、首に巻き付ける。

ガードマンは疑り深そうな顔をしながらも、リノリ
ウムの床にコツコツと足音をたてて、向こうに立ち去
った。

そのとき、風がさわさわと吹いて、すぐ目の前の
草の茂みの中に、真っ黒いのが一匹、白っぽいがよく
見ると薄い金色をしたのが数匹、柔らかそうな毛皮
に包まれた小さな獣達が、ひょこひょここと体を揺すっ
ていた。

黒いのは目があってしまった。そいつはじいっとぼ
くを見つめてきた。よく見ると黒猫だった。

だれとかさんが、お待ちですので、四階、紳士服コ
ーナーまでおいで下さい、とか何とか、独特のイント
ネーションの、鼻にかかった若い女性のアナウンスが
聞こえた。

「猫の作法では、お互いの目を見てはいけないことに

なっているんじゃないのかい？」

思わず、ぼくは言ってしまった。

「おまえの方が、先にこっちを覗むという不作法をはたらいたんだぜ」

と、猫は、クイツと視線をそらしながら早口で言った。

「そりゃどうも」

エスカレーターでは、男の子と女の子がステップの動きと反対の方向に降りて行っは、また登ってくるという、小さな冒険に夢中になっていた。

ぼくは、猫を無視することにして、アタッシュエ・ケースを持ち替えると、下りエスカレーターの方に歩き始めた。

「どこ行くんだい？」

黒猫が聞いてきた。

「お客さんのとこ。ぼく、営業マンなんだ」

ぼくは、なるべく関わりたくないなど思いながら、答えた。

「ふーん」

黒猫達は、ぼくの後を追ってきた。どうやらしばらくはつきあわなくてはならないようだ。仕方がないか。

「そっちの白っぽい連中は何？」

「何？」

「その、少し金色がかった毛皮の……」

「あー、これ？ テンだよ」

あいかわらず、視線をそらしながら、面倒くさそうに猫が答える。

「テンってこんなんだったっけ」

「何。俺の言うこと疑うの？」

猫は、ぼくの方はわざと向かないで、左手の藪を鋭く見つめたまま、小さな声のものすごい早口で言った。

ぼくはエスカレーターに足をかけながら、やはり小さな声で、

「そんなことないけど」

と、答えた。その時、思いがけず突然、猫はぼくと跳ねて、ぼくのネクタイに飛びかかってきた。実際に器用に背広の内側に手を突っ込むと、何かを爪に

引っかけて、また、ぼぼぼーんと、飛び跳ねるように「テン」達のいるところに戻っていった。

「おい、ちょっと」

黒猫は、どうやったのか、背広から抜き取った名刺入れからぼくの名刺を引き出して、頭をかしげながらそれを眺めた。

「株式会社クリア・エコ……。何の会社だい？」
「家庭用浄水器とか、空気清浄機とか、そんなものを扱ってるんだ」

「ふーん。俺には関係ないな」

ぼくはぐるりと周りを眺めた。どこまでも続く緑の丘陵。ところどころに点在する森と林。青い空と真っ白で巨大な入道雲。

「たしかにね」

ちょうど、エスカレーターの終わりだったので、危うく転びかけてしまった。

「名刺入れ、返してくれよ。それがないと仕事にならないんだ。得意先の人からもらった名刺もはさんであるし」

「俺、チョコ・スフレ食いたいんだけど」

黒猫は、前足で顔を洗う仕草をしながら言ってくれた。

「このっ」

ぼくはやむなく、エスカレーターを乗り継いで、地下の洋菓子売場まで降りていった。こんな猫のご機嫌を取るのもしゃくだが、だいぶ油を売ってしまったので、お客さんとの約束の時間が迫ってきていたのだ。

ぼくがケーキを買っている間（それが、チョコ・スフレというお菓子なのかどうか、ぼくには本当は自信がなかったが）、黒猫は黙って顔を洗い続け、テン達は落ち着きなく、起こしたからだをくねくねと揺すっては、周りを見回していた。

「ほら、スフレ……」

「……っもう、やかましいなあ。あいつら、今日という今日は絶対焼き殺してやる！」

黒猫は、ぼくの差し出したケーキの小箱なんか、全然見向きもしないで、突然遠くを睨み付けた。

「え？」

ぱっと、優雅な身のこなしで体を反転させると、猫はものすごい早さで走りはじめた。テン達も毛皮を柔らかに光らせながら、その後をいっせいに追った。

「ちょっと、ちょっとお」

ぼくはあわてて彼らを追いかけた。荷物を両手にぶら下げて、狭いショーケースの間を走るのは大変だ。ついつい前から歩いてきた、きんきらきんの太ったおばさんとぶつかってしまった。

おばさんは、顔を真っ赤にして、わなわなと震えている。「すいません。これはお詫びのしるし」

ぼくはとっさに、ケーキの箱をおばさんに押しつけると、猫とテン達を見失わないようにと、（おばさんが何か言わないうちに）再び、たつたと駆け出した。

ぼくが、階段を、二階と三階の間まで、息を切らして駆け上ったところで、黒猫はやっと立ち止まった。

壁の部分のほとんどが窓ガラスになっている踊り場に、ビルの谷間から、強烈な直射日光が差し込んでい

た。

猫はちょっとした岩の上に登って、ずっと先の方を睨みつけている。テン達は岩の下の草の中で、よほど疲れたらしく、せいぜい言って転げ回っていた。

「どうしたんだよ。急に」

「あれが聞こえないのかよ。あのうるさい音が」

えっと思っ懸命に耳を傾けてみると、さやさやという風の音に混じって、遠くの方からジューツという蝉の声が聞こえてきた。

「蝉……」

「まったく、あいつらときたら、毎日毎日ジューツとうるさい騒音を出しやがって、今日という今日は勘弁しないからな」

そういうえば、蝉の声は猫が顔を向けている方向にある小さな林から聞こえてくるらしい。

「そんなにうるさいというわけじゃ……」

「あんたとは違って、」

猫は、わざとゆっくりとした口調で、人を小馬鹿にしたように言った。

「俺は『でりけーと』なんでね」

ほらよ、と言って黒猫はぼくの方に名刺入れを投げ
てよこすと、まっすぐ林に向かって駆けていった。そ
のしなやかな姿は美しいといっても良かった。ぼくは、
ちょっと見とれてしまった。

「まったく」

ぼくが追いついたとき、猫とテンは一本の木の下に
たむろしていた。黒猫はじっと座り込んだまま、獲物
をねらっていた。

確かにここまで来ると、蟬の鳴き声はもう、話も
聞こえないほどの大きさになっていた。

ぼくは、猫の耳元に怒鳴って言った。

「ねえ、蟬っていうのはさあ、何年も土の中で暮ら
して、やっと地上に出られたんだよ。それも何日も
生きちゃいられないんだ。少しぐらい勘弁してやりな
よ」

猫は、ぼくの方を振り向きもしないで、

「それなら、なおさら許せないね。わざわざ死ぬ前に
俺に迷惑をかけるためノコノコ這い出してくるなん

て。生涯地面の下にいればいいものを」

「そういうわけじゃ……」

猫はいつの間にか前足に火のついたマッチを持って
いた。どうやって持っているのかは不思議だったが、
今はそれどころではない。

テン達は忙しげに走り回っては、どこから見つけて
くるのか、枯れ枝や木の葉など、たき付けになりそう
なものをせっせと集めて山を作っている。

「おい、待てよ!」

「今日こそ、焼き払ってやるっ」

と、その時、一羽のヒヨドリがパタパッと飛んで
きて、木の幹にとまった。

ピョーオと一声鳴くと、パクッと蟬を一匹くわえた。

「あ」

そして、また一匹。

「ちよっと……」

「あぁう!」

ヒヨドリは、ぼくと猫があっけにとられている間に、
すました顔で、パクッと蟬を、もう一匹食べた。

そして、もういっぺん、ピョーオと鳴いた。

(初出 Creative Synapse 1997.9.12)

猫宇宙

草原を心地よく涼風が吹き抜けた。遠くの森で蟬が鳴いている。

ぼくは仰向けに寝ころんだまま、閉じたまぶたの中に、真っ赤な太陽を感じていた。

というより、太陽にさらけ出した顔全体が、じりりと焼かれていたのだが。

ぐるりと、体を反転させる。背広の背中が窮屈につっぱらかった。夏物なので、生地が薄い。破けたら困る。けど、そんなことを考えるのさえ面倒くさい、今は。

太陽の熱は、今度は後頭部から背中、尻、ふくら

はぎまでを均等に暖め始めた。

さあさあという音がかすかに聞こえ、風がこの丘陵地のどこかを気まぐれに走っているのがわかる。

「ねえ、そういえば君の名前なんていうの」

ぼくは目をつむったまま聞いてみた。あごが地面にくっついているので、声がかくぐもる。

応えはない。

風の音と蟬の声。土と草の匂い。

頭だけ横にまわして、重たいまぶたを開けてみる。

黒猫はまったく無防備に腹を太陽に向けて眠っていた。さすがにヒトのように、きれいな大の字（この場合、しっぽがあるから木の字かも）にはなれないように、前足がカモメの羽の形に曲がっている。あんな恰好で苦しくないのだろうか。野生の緊張感がまるでない。

「たるんでるなあ」

おもわず言葉を漏らしてしまう。

もう一度、目を閉じる。

と、

「誰がたるんでるって？」

ゆっくりだが、どことなく電流を感じさせる声が出た。

びっくりして、おもわず目を開く。

しかし、目の前の猫は、さきほどと寸分違わない恰好のまま、動いていなかった。

「おい、起きてるのかい？」

静寂。

「おいってば！」

「あああああー、俺ねえ、昼寝じゃまされるの、一番嫌いなね」

黒猫は仰向けになって全身を弛緩させたままの姿勢でしゃべった。かろうじて口だけは、動いているのがわかったが。

ぼくのまぶたは、自動的にぱちくりした。

「……ごめん」

「だいたいさ、たるんでるのはどっち？　ワイシャツからはみ出しそうなくらい贅肉つけてさ」

ちょっと、顔が熱くなる。このごろお腹の脂肪がつ

きすぎてるのが、少し気になってきてはいたのだ。

ぼくは猫の言葉を無視して、話題を変えることにした。

「いや、君の名前、なんていうのかなと思って」

「俺は俺。名前だなんて」

猫はぐるんと体を回して、向こう側に四本の足を投げ出した。

「でもさあ。呼び名くらいあるでしょ、いくら野良でも」

黒猫のしっぽがピクッと動いた。わずかに頭が持ち上がり、糸のように細いまぶたの間に、何かきらりと光ったような気がした。

「たわけが」

黒い影が走ったような気がした。

「いててっ！」

一瞬の間に猫の鋭い爪がぼくの顔面を切り裂いていた。

「俺はこの世界に唯一の存在なのだ。野良ニンゲンといっしょにするな。」

「それがどういうことか分かるか？ 唯一の存在は区別されるべき対象を持たないのだから、名前が付けられる必要はないんだよ。名前なんてのは、お前らの不完全な世界における幻想的記号に過ぎないのだ。俺のこの完全な世界には、幻想も記号も必要ないのだ」

「す、すみません」

ぼくはハンカチで傷を押さえながら謝った。おもわず起きあがっていた。でもまあ、思ったほどひどく引っ掻かれたのでもなさそうだ。それにしても、思ってたときには、もう疑問が口を吐いて出ていた。

「だけど、あいつらに名前はないの？ ほらあの金色のきれいな毛並みの連中……」

猫はわなわな震えたみたいだった。しまった。「きれいな」は禁句だったのだ。黒猫が自分より美しい者の存在を認めていないのは明らかだった。

しかし、猫は今度は怖いくらい落ち着いた声で答えてきた。

「ひょっとして、あのウンコ色のドブネズミたちのことを言ってるんじゃないだろうね？」

ドブネズミだって。前は自分でテンだと紹介したくせに。もっともぼくは連中のことを、テンというよりはミンクに近いと見ているのだが。

「あいつらには……」

と、猫が目線をすつと向けると、そこに黄金色に輝く何匹ものテンが、固まりとなつてうねうね体をくねらせていた。

「脳みそがないんだ。頭蓋骨の中には空気が詰まっているのさ。何も考えることをしない。思考力ゼロの奴に個性は存在しない。個性のない奴には名前もない。あいつらはただのへあいつらでしかないんだ」

「ふうん」

「あいつらは俺の命令を聞くためだけに存在しているんだ。つまりは俺の一部なのさ。……おい、お前ら、ここは暑い、何か日除けを持ってこい」

猫の声を聞くとテンたちは慌てふためいて右往左往し始めた。お互いが前をよく見ていないので激突しあうのもあちこちにいる。

転がるように草原の四方に散らばって行った彼ら

が、しばらくして集めてきたものときたら。

一番使えそうなのが大部りの蓮の葉一枚という始末。

黒猫は、ふーっとうなると毛を逆立たせた。

「○×◎□△◇ーっ!!」

テンたちは一瞬ビクッと体を硬直させると、わらわら猫に駆け寄り、彼を抱え上げると蓮の葉の上に載せた。それからんでに蓮の茎をくわえて森に向かって走り始めたのだ。

「そーだ、そーだ。俺のことを森の木陰まで運ぶんだ」
ここは起伏の強い場所なので、猫と猫を載せた蓮の葉とテンたちの姿は、すぐに見えなくなってしまった。ただ黒猫の声だけが響いていた。

「よしよし、その調子、……おい、ちょっと待て、待て、待てッたら!」

小さな水音がした。

* * *

「森との間に川が流れていたとはねえ」

テンたちに小川の中に引きずり込まれ、まさに自分自身が「濡れネズミ」になってしまったショックと屈辱から、黒猫はほとんど放心状態で午後を過ごしたようだった。もっとも今日の強い日差しのおかげで、毛皮はすぐに乾いたようだが。

ぼくはぼくで、当然ながら自分の世界では熱波の中で外回りをしたりしてきつい夏の一日を過ごし、どうやら帰路につけたところ。

丘陵地ではすでに日が落ち、澄んだ群青色の空にダイヤの星がきらり、きらりと光っていた。ぼくは仰向けに寝ころびながら、あまりにも鮮明なその光に見とれた。

「もし君が溺れて死んでたら、君のこの完璧な世界は無くなってたのかなあ」

と、ぼくは猫に訊いてみようと、よっぽど思ったのだが、もちろん口には出さなかった。

「俺はこの世界の絶対者なんだ」

ふいに猫が口を開いた。

「あーあ、しんき臭え風景だな」

猫が投げやりに言ったとたん、夜空に煌々と照りかえる満月が現れた。

ぼくはおもわず手のひらで目を覆った。

猫は横目でそんな狼狽したぼくのことを見ていたようだ。

「分かっただろ。これは俺の世界なんだよ」

猫の声音にはほんの少しだけ勝利を喜ぶニュアンスが混じった。

みやーお、みやーおと、猫は何度か鳴いた。

ぼくはずっと目をつぶっていたが、猫が調子に乗って何をしたのか分かっていった。

「分かてるさ。だけど……」

そっと目を開けてみる。

「だけど、月がこんなに多くっちゃ、まぶしくて寝てられないよ」

目を細めて探すと、黒猫は腹を無防備にさらけ出したまま、すやすやと眠っていた。

「つぎのまほう」50号(2004.6.21)初出

ぼく

冬の満員電車ほど不快なものはない。

皮膚の表面は冷蔵庫に一日入れられたスライスチーズみたいに冷え切っているのに、身体の外側と内側は魚焼きグリルの遠赤外線炎で焼かれてるみたいに熱せられ（もつとも冷蔵庫にも魚焼きグリルにも入った経験はないのだが）、自律神経ってやつが暴走しそうな予感が迫ってくる。

電車内の空気は乾いているのだけれど、窓は全てが真っ白く曇り、水滴がだらだら流れ落ちている。

不愉快だ。

それなのに猫は草地の一角で、大木と巨岩で風がさえぎられた日だまりという絶好のポイントにうずくまり、うつらうつらしている。

本当に不愉快だ。

客先はぼくの作ったプランをさんざんけなして、ま

あ実にひどい要求をしてくるし、上司は上司で現場の実態も分からないまま、あれこれ指示を押しつけてくる。そんなにやりたきゃ自分でやれよ。

「ぼくは、ぼくなんだ！」

おもわず声が出てしまう。

隣に立っていた人と猫が、同時にぼくの方をちらりと見た。

「ぼくって何？」

もちろん、ものすごく昔の芥川賞作品の題名みたいな質問をしてきたのは、隣の人ではなくて猫の方だ。

「ぼくは、ぼくさ」

「ふうん」

「押しつけられるのは嫌なんだ。ぼくにはぼくの価値観がある」

「だから、ぼくって何？」

「だから……」

「説明してみ。自分のことを」

「だから、ぼくは」

名前は誰それ、年齢は何歳、生まれた場所は某所

で、仕事はこれこれ。

さんざん説明させておいて、猫は鼻で笑ってこう言った。

「説明になってないね」

「どうしてさ」

「同姓同名で、同じ生年月日で、同郷で、同じ職業の人が仮にいたとしたら（というのは、絶対にあり得ない話じゃないという意味だが）、お前の今の説明は何もお前自身を説明したことにならないでしょ。そういう説明を重ねていって、趣味は何だ、ほくろの数はいくつだ、などと言ったところで、同じ条件の人が存在する確率が小さくなるだけで、なんら本質的に自分を説明することにはならないのよ。」

「指紋だって？ ばかだな。今やクローン技術っていうのも現実化したんだよ。お前のクローンが作られるとしたら、お前はそのクローン人間と区別つかなくなっちゃうんだぜ」

「じゃ、ぼくはどうしたら、ぼくがぼく自身だと認めてもらえるんだ」

「教えられないね。自分で考えるんだな」

「なーんだ。どうせ君にも答えは分からないんだろう」

黒猫はあくびを一つした。

「勝手に言ってるな。どうせ俺には関係ない。俺はお前じゃないんだからな」

そう気だるそうに言うのと猫はすうすう寝息を立てて眠ってしまった。

何日か後、もういちど猫に答えを聞いてみた。猫は何か勘違いしているのか、こんなことを言った。

「お前、想像を絶して頭悪いな。ちゃんと教えてやっただろ」

そして、それきり一言もしゃべらなかつた。

「つきのまほう」50号(2004.6.21)初出

クラインの壺

さわさわとカヤが風になびいた。クリーム色の丘陵一面が波のようにさざめき立つ。

もっとも、ぼくが座っているのは、会社の狭い資料室のパイプ椅子なのだが。

本当は外回りをしなくてはいけないのだけれど、今日はそんな気分になれず、資料を作るという名目をつけて、新聞の束を積み上げたまま、コーヒーを啜ってはこうして低く汚い天井を眺めているのだ。

もう一度風が吹くと、近くの岩の上で日向ぼっこをしていた黒猫が、いかにも気にさわるというふうに身体をくねらせた。枯れ草の匂いが心地よい。

猫は黙って毛繕いを始める。

うるさいときには、もう我慢ならぬくらいしゃべりまくる奴だけれど、しゃべりたくない時には、こちらが何を言っても知らん顔だ。

「クラインの壺って知ってる？」

ぼくは猫の顔を見ないで訊いてみた。

「つまんないね」

猫は素っ気なく答えた。そしてまた長い沈黙。

急に資料室のドアが開いて、タバタ君が顔だけ覗かせた。

「尾並さん、ツカゴシから電話ありましたよ。折り返し電話させるって言っときましたから、お願いしませぬ」

タバタ君はそれだけ言うど返事も待たずにボタンと戸を閉めて行ってしまった。

仕様がなかったので、ケイタイを取り出して客先に電話する。

「つまんないね」

もう一度、猫が眠たそうにつぶやいた。

「こないだ友達がね……」

再び天井を眺めながらぼくは猫に話しかけた。

「すごくいい奴だったんだけどね」

無言の猫。

風になびくカヤ。

乾いているが暖かい日差し。

「死んじゃってさあ」

猫の態度は変わらない。

「：彼、学生時代は反戦運動とか、そんなことやってただけだね。学校出てからもずっと闘ってたみたいなんだよ。」

「いつも敵をしっかりと見定めていてさ、世の中を変えなきゃいけないんだって熱っぽく語ってたな」

猫は肩が凝ったとばかり、目をつぶったまま首をぐるりと回した。

「しばらく音信がなかったんだけど、いきなり死んだって連絡が来てさ。：自殺だったんだって。」

「詳しい話は聞く気になれなかった。ホントすごくいい奴だったんだ。」

「彼の遺書ってのが残ってて、ぼくも読ませてもらったんだけど、そこにクラインの壺って」

みやおうと猫が一声鳴いた。

「うん。『いくら闘っても訴えても世の中は変わらない

かった。クラインの壺の秘密を知ってしまった今、もう自分はどこに向かっていいか分からない』って書いてあったんだけど。

「何のことなのかな、君、分かるかい？」

黒猫は体がふくれるくらい大きく息をして、それから、ひとをばかにした口調で話し始めた。

「クラインの壺ってのはもちろん、表面と裏面がつながった形をした壺のことだろ。もっとも三次元空間では本当には作れないとも言われているが。

「簡単なことさ、裏と表に区別はない、絶対的正義も絶対的悪もない、あー自分は正義を絶対だと思ってきたのにどうもそうじゃないらしい。なんてこったってえ訳さ」

「まあ、それはそうかも知れないけど…。『秘密』っていう言い方にひっかかるんだ」

「なんだアタマ悪いなあ、お前。じゃ自分で壺を作ってみろよ」

「壺を？」

「粘土があるとするだろ。まずコネてみるんだな。ど

うなる？」

「丸い固まりになるだろうね、いびつだけさ」

「まあ、不器用なんだからしょうがない。この粘土の固まりの表と裏はどうやって区別する？」

「裏も表もないよ」

「それじゃ、粘土のどこかを指で軽く押ししてみな。どうなった？」

「窪みが出来ただけ。ますますいびつになるけどね」

「じゃあ、その窪みをどんどん大きくしていきな」

「…」

「どうだい、そいつはいつか碗型になり、コップ型になり、いつしか壺の形になるだろう？ いったいどの時点で裏と表が出来たんだい」

「それは…」

「これが『秘密』さ。クラインの壺は三次元空間で作れないどころか、逆に三次元空間に実在する壺は全てがみんなクラインの壺だったのさ。

「特別なことじゃない、お前らの世界に属する物はなにもかも表と裏がつながって同じ側なんだよ。あ

まりにも簡単で当たり前のことなのに、お前たちは気付かない、いや、気付きたくないんだ。バカなんだ、お前ら。そのあまりのバカさ加減に気付いた時には死にたくもなるだろうよ、本当に」

エアコンの掃除をしていないせいなのか、カビとホコリの臭いが混じった温風がぶおおっと吹き出してくる。喉の奥がいがらっぽくなって、ぼくはゲホゲホ咳き込んだ。

ぼくには猫の言うことが分からない。分かるような気もするが…やっぱり分からない。ただ、友人が死んだ、彼とは二度と会えないのだということだけは、動かしがたい事実として、理解の外側に重苦しく存在していた。

「お前らの世界ってのは、ホントにもう…つまんないね」

ぼくはおもわず、そっちの世界に移住させてくれなやかな、と猫に頼みそうになったが、口にするのはやめた。猫の発想には、そんな選択肢は絶対無いに違いない。

猫は今までペラペラしゃべっていたのを忘れたように、黙って毛繕いを始めた。

ぼくは天井を見上げた。
カヤがまた、さわさわ、さわさわと風になびいた。

「つきのまほう」 50号(2004.6.21)初出

—了—

自分が書いたものの中で、この「黒猫と蟬とヒヨドリ」が一番好き。

迷った家族

すっきり晴れた、とは言い難い曇り空ではあったが、気温もちょうど良くなってきて、散歩に出かけようという人が増えてもおかしくない気候だった。それに比べてこの公園管理入室はいつものように暗くガラんと、しかもかび臭くシンと静まりかえっている。もともと俺はそういうところが性にあって気に入っているのだが。

特にやることもなく、いつも通りに受付窓口の前のカウンターにもたれながら、たぶんうとうとしていたのだと思う。呼びかける声に我に返った。頭を上げ目をしばたかせると、ぼんやりしていた視界がはつきりして、家族らしい三人連れが見えた。

「…すみません」

父親らしい男がもう一度声をかけてきた。

「あ、これはどうも失礼しました。何か御用ですか」

「すみません。実は迷ってしまいました」
困り顔の父親の向こうに、薄く微笑む母親らしいきれいな女性と、真ん中に退屈そうな顔の小学校低学年に見える少年がいる。

「それはお困りで。どうされました？」

「児童遊具の広場で子供を遊ばせてから、小動物園を見てまわったんですが、そこからよくわからなくなってしまうって…」

「はあ。それでどちらに行かれるんですか？」

「実は迎えが来ることになってまして、その待ち合わせ場所に行かなくちゃならないんですけど、その場所が…」

「なんとという場所ですか」

父親はますます困った顔になった。

「それがよく思い出せないんです。どういうわけか考えれば考えるほど…」

「あなた…」

母親が不安そうな顔で父親を見る。

「何かご病気、ということはないんですよね？」

と俺。

父親はうつむいて、黙って唇をかみしめた。少し震えている。

「あ、あの。落ち着いて下さい。大丈夫ですよ、たぶんわかります」

父親が俺の顔を見る。俺はとっさに窓口の窓から半分身を乗り出した。別に危ないとは思わない。慣れているのだ。

「この…」

と、俺は左手の方を指さした。親子連れが一斉にその方を向く。

「この先がちょっと小高い丘になっていまして、そこにコンクリートの塔が建っています。この公園でお迎えの待ち合わせと言ったら、まず間違いなくそこに決まっています」

「ああ、よく見えます。ランドマークなんですね」

「まあそうです」

「でも、確かあそこは…」

「子供劇場！」

突然、子供がうれしそうに叫んだ。

「そうだね。よく子供向けのミュージカルとかやってた」

母親も懐かしそうに言った。

「残念ですがもう以前に劇場は無くなりました。今はモニUMENTになっています」

「そうだったのか。それで混乱したのかなあ」

父親が少し照れくさそうに言った。

「あら。ちょっと失礼」

母親がどこからか携帯電話を取り出して誰かと短く話をした。

「やっぱり待ち合わせはその塔の下だって。待ってるから早く来いって。…どうもすみませんでした。お騒がせして」

「いえいえ、いいんですよ」

親子連れの顔が皆明るくなった。もう大丈夫だろう。

「よかったですね。迷われてお疲れになったでしょう。落ち着いたらゆっくりお休みになって下さい」

親子連れはもう何も言わず、すーっと丘に向かっていった。俺には夜の闇で全く見えなかったが、彼らにはよく見えるのだろう。やがて親子連れは三つの人魂になって、やがて消えた。

俺は窓から身体を抜いて、窓口の朽ちかけた椅子に深く座り直した。

この公園が廃園になってもう何年になるだろう。それは子供劇場で爆弾テロがあり大勢の大人と子供が犠牲になったのがきっかけだった。劇場跡には慰霊塔が建てられたが、結局公園は再開されなかった。テロの実行者が誰かも未だにわからない。反政府勢力の名前が挙がると、次には政府の謀略論が唱えられ、そのあとまた別の容疑者の名前が挙がるといった具合で、だんだんとテロ事件そのものも風化してしまった。社会状況は悪くなるばかりで、俺のようなホームレスもどんどん増えている。俺にとってはこういう放棄された管理人事務所などはねぐらとして最高ののだが、ほとんどのホームレス仲間が、「出る」とか怖いとか気持ち悪いとか言って近寄ることがない。だが俺

にとっては別になんということもない。迷っている人たちと俺との間にどれほどの違いがあるものか。むしろ彼らには「お迎え」があるだけ、俺よりずっとマシンなのかも知れない。

今夜は雲が晴れそうにない。音もなく暗い管理室内で、俺はもう一度眠りにつくのだった。

—了—

(2015/11)

(未発表作品)

二〇一五年に自分が住んでいる団地で文芸部の設立に誘われた。この作品を含めた数編は、そこへの掲載を念頭に久しぶりに書いた小説である。

流星雨の夜

「だから今日の夜、流星雨があるんだってば！」

と、ぼくはついつい大声で話していた。机のまわりに集まっていたタツちゃんやキンジが食いついてきたからだ。

「何時?! 何時?」

「えっとねー… 十時ころかな…」

ぼくはチャリとななめ前の机で本を読んでいる佐野君を見た。本当は何時ころなんて全然知らない。ただ「今晩は流星雨が見られます」と朝のニュースで言っていたのを、あわててご飯をかきこみながら聞いていただけだったのだ。佐野君はクラスの中で一番頭が良い。特に理科は得意分野だ。たぶん今も何かの図鑑ずかんを読んでいる。もし佐野君がぼくの言葉を聞いていて、急にこちらをふり返り「いやいや、それはまちがってるよ」なんて言ったらと思うとヒヤヒヤする。

でも佐野君はただだまっていた。

「よっちゃん、今晩流星雨見るの? 夜寝ねないの?」

キンジがちょっとおどろいたような顔でぼくを見た。

キンジの家では夜十時を過ぎたら寝なくてはいけない決まりがある。

「だってめずらしいんだぜ、流星雨。見のがす手はないでしょう」

「そんなにすごいのか?」

タツちゃんが聞いてくる。どうなんだろう? テレビで言っているんだからすごいんじゃないだろうか。

「すごい…と思う。…ほ、ほら、流れ星に願いをすと願いがかなうって言うじゃん。雨みたいに流れ星が流れるんだから、それ見たら、ものすごく願いがかなっちゃうんだよ」

「ふーん」

とは言え、タツちゃんは夜寒い中、わざわざ外に出ていって流星雨を見るというキャラじゃない。絶対に見ないだろう。しかし遠藤先生が教室に入って来たのでこの話はそのまま終わった。

正直に言って、ぼくもそんなに流星雨が見たいわけではない。どちらかと言えば、自分が知った知識をひけらかしたくて言ってみたようなものだ。よく考えたら、ぼくだって冬の夜中に家の外に出るのはつらい。家の窓から見えたらいいなくらいに思っていたのだ、その時はまだ：

その日は図書委員の昼の整理当番だったので、ぼくは給食をソッコウで食べて図書室に行った。返ってきた本を棚たなの決まった場所にもどす役だ。理科の本を入れる場所を探していると、後ろから声をかけられた。

「宇埜君」

ふり返ると佐野君だった。

「宇埜君、今晚、流星群観測するの？」

「え、やっぱりさっき聞いていたんだ。ぼくはちょっと動揺どうようした。」

「えっ、そんな観測って言うほどのことは……。ちょっと見てみようかな、くらいの」

「そう……。宇埜君は今までに流星群を見たことあ

る？」

「ううん、ない」

「そうか。ぼくもまだ見たことないんだ。八月のペルセウスの時は台風が来ちゃって」

「そうなの？」

「おたがい初心者ってわけだね。でもうれしいな。同じクラスに天文学に興味のあるやつがいるなんて。これからも情報交換じょうほうこうかんしていこうよ」

「う、うん。そうだね」

情報交換だって。ぼくは冷や汗あせをかきそうだった。

「今日はお父さんと観測に行くことになっているんだ。」

明日また話をしよう」

佐野君が純粋じゆんすいに仲間を見つけたと思って喜んでいいのか、それとも何かをたくらんで言っているのか、ぼくにはわからなかった。どちらにしてもちょっとめんどろな話になってしまったかもしれない。ぼくはその日、放課後までなるべく佐野君に近づかないように過ごした。

その日は教室のそうじ当番だったので、タツちゃんたちは先に帰ってしまい、ぼくはひとりで校門を出た。すると学校の角の十字路を過ぎたところでだれかがぼくの名前を呼んだ。まわりを見回すと電信柱の所に立っていたのは鶴風露かんふうろだった。びっくりした。風露は同じクラスの女子だけれど、無口な子で、クラスの男子はもちろん、女子ともあまり話をしているのを見たことがない。もちろん、ぼくもほとんど口をきいたことがなかった。

「鶴さん…」

「宇埜君、きょう流星雨見るんでしょ？」

「え、それは…」

また流星雨か。あんな話クラスでしなればよかった。

「ねえ、どうしたら流星雨見れるの。教えて」

そんなこと聞かれても、実はぼくも知らない。困って口ごもっていると風露はいらいらしてきた。

「なによ。教えられないの？ わかった。今日、宇埜君のうちに行く。宇埜君といっしょにいたら流星雨見

れるんでしょ。ええと夜十時だっけ。それじゃ九時に行く。九時ならだいじょうぶだよね」

「そんなこと言ったって、鶴さん、ぼくのうち知ってるの？」

風露の顔が一瞬いつしゆんすこしくもったような気がした。

「知ってるわよ。じゃ、九時にね！」

風露はそう言うのとタッタとかけていってしまった。いやそんな、一方的に。困ったことになったぞ！

どうしたらよいのだろう。ぼくは急いで家に帰って新聞をひっくり返してみた。思った通り今晚の流星雨の話がのっていたが、どうやら夕方から明け方まで一晩中見えることは見えるらしい。ただ夕方は見える位置が地上に近いので、夜おそくなった方が見やすいという。ぼくはいいかげんに十時と言ったのだが、それほど外れていたわけではなさそうだ。それだけでなく新聞には防寒着や懐中電灯かいちゆうでんとうが必要だとも書いてあった。そう言われてみればそうなのだろうが、本当のところ流星雨を見た経験が無いので、なんだかピンと

こない。

もっとくわしく知りたいけれどどうしよう。ぼくはひとつだけ方法を思いついた。しかしそれには相当の勇気がいる。どうしようか、どうしようかと、ぼくは何度も自分の部屋と電話の前を行ったり来たりした。でもどうしようもない。時間が無い。ぼくは思い切って佐野君の家に電話をかけた。

電話には佐野君が直接出た。ぼくはちよつとつばを飲んで「流星雨を見るにはどうすればいいのか教えて」と、なんとか言うことができた。佐野君は別にいやなことと言わず、親切に何をどうすればよいか教えてくれた。

ぼくが知ったのは、このあたりでは、まず周りに灯りのない開けた場所に行かないと、なかなか流星を見ることができないと言うことだった。家の窓から気楽に見られるようなものではないようだ。佐野君の言っていることには難しすぎてよくわからないところもあったけれど、流星をただ見るだけなら特別な道具はいらないらしい。とにかくあせらず空全体をずっと見続

ける、それだけだった。佐野君はお父さんの車で大福川の向こう側の田んぼが広がったあたりまで行って、寝袋ねぶくろに入っておお向けに寝ながら観測する予定だと言う。それから最後に、カイロや温かい飲み物、防寒用の毛布などがあつた方が良くともアドバイスしてくれた。

ぼくは台所で夕食の支度をしているお母さんに、なるべく何でもなさそうな感じで、

「今晚、友達と流星雨を見に行きたいんだけど」

と試してみた。だけど、お母さんは即座そくざに、

「子供だけで夜出歩くなんてダメに決まってるでしょ。

家の窓から見るんじゃないか？」

と言った。ぼくはあれこれ説明して、外に行かないとダメなんだと言っただけけれど、お母さんは最後まで許してくれなかった。

さてどうする？ 九時になったら風露が来てしまう。電話して断ろうかと思っただけれど、そう言えばぼくは風露の家の電話番号を知らない。それにこうなっ

てくると、ぼくもだんだん流星雨を見てみたくなってきた。

ぼくはそこでまたひとつ良いことを思いついてしまった。流星観察に必要なものを一度にそろえる方法がある。お父さんが何ヶ月か前に買ってきたリュックサック型の「防災袋」だ。あの中には懐中電灯もあるし、うすいけれど性能抜群というアルミ製の毛布が入っている。確か使い捨てカイロも入っていたと思う。あとできれいで返しておけば、お父さんもぼくが勝手に持ち出したことに気付かないだろう。

ぼくはお母さんの目をぬすんで玄関に置いてある防災袋を取りに行った。ついでにスニーカーも持ってくる。自分の部屋の中でふくろの中身を全部出し、スニーカーと必要そうなものだけをもう一度防災袋の中につめ直すと、ついでにおこづかいを入れてある小銭入れもつこんだ。自動販売機で暖かい飲み物を買うのもいい。

今日もお父さんはおそくなると思うことで、お母さ

んと二人で夕食を食べると早めにお風呂に入り、宿題をするからと言って自分の部屋にこもった。テレビを見たいと言わなかったので、お母さんは「めずらしいわね」と言ったが、別にあやしんでいる風ではなかった。時計を見るとまだ八時だ。しばらく本当に宿題をやったが、八時四十五分になったのでダウンジャケットを着て、毛糸の帽子をかぶり、手ぶくろをして、防災袋を背負って部屋を出た。お母さんの気配をうかがいながら、灯りが消えている台所の勝手口から外に出る。防災袋の中に入れておいたスニーカーをはいて、家の外をぐるっと回り、玄関前に置いてあった自転車のところまでたどり着いた。

となりの家の塀の前の街灯の下まで自転車を引いていき、そこで自転車にまたがって風露がくるのを待つことにした。外に出るとどんどん体が冷えてくる。自然に自転車をゆらしてしまふ。風露はなかなか来なかった。本当に来るんだらうか。もしお父さんが帰ってきてこんな姿を見られたら確実におこられてしま

う。まだか、まだかと思っていると、向こうからライトをつけた自転車がすごい勢いで走ってきた。

自転車はぼくの前で急停車すると、息を切らせた風露が「ごめん、おくれたー」と言った。街灯の明かりに風露の息が白く舞った。風露が厚着をしてこなかったらどうしようかと心配していたが、ちゃんとピントのダウンジャケットと長い耳当てのついた白いニット帽、マフラー、手ぶくろもしていて完全装備だった。

「弟がなかなかご飯食べなくて……。それでどうするの？」

「鶴さん、いそがしいんじゃないの？ 出て来てもらいじゃぶだった？ 本当に流星見る？ 寒いしけっこう大変かもしれないよ」

「えー、見るよー！ 一所懸命に来たのにい」

風露がおこったように言うので、ぼくも決心した。

「わかった。この辺じゃ灯りが多くて見られないんだ。だからもっと暗いところに行かないとだめなんだ」

「そっか。じゃ、どこ行こう。原町の方？」

「そうだね、行ってみよう」

ぼくは自転車を反転させて、原町方面へとこぎ出した。

ぼくが前になってしばらく自転車で走ったのだが、どこまで行っても町灯りは無くならない。広い道路沿いではだめだと思い、ときどき横道に入って自転車を停め空を見上げるのだが、まわりの灯りがまぶしくて星がよく見えない。畑の周りならと思ったのだが、そういうところはかえって遠くの灯りまでじゃまになる。たまに大きな家の間のようなところで周りの照明がかくれ、星がきれいに見える場所もあるのだが、そういうところは今度は建物のおかげで空がせまい上に、ゆっくり星を見ていられるようなスペースがなかった。

気になるのは、ぼくがなかなかいい場所を見つけないことに風露がおこっているんじゃないかということだ。だいぶ引っ張り回してしまった。コンビニがあったのでとにかく一休みすることにした。

風露は別にきげんが悪いようには見えなかったが、

何しろ女子の気持ちはなかなか読み取れない。

「何か買う？ 温かい飲み物とか」

「ううん、わたしはいい。気にしないで宇埜君は買って」

もしかすると、風露はお金を持ってこなかったのかも知れない。ぼくは缶かんのホットレモネードを二本買って、一本を風露に差し出した。風露は何度もいらな
いと言ったが、もう買っちゃったし、飲まなくてもポ
ケットに入れておけば暖かいからと、むりやりわたし
た。

結局、ホットレモネードはコンビニの駐ちゆうしやじよ車場で、
ふたりで飲んでしまった。体が温まって少し余ゆうが
できたせいか、向こうの方に他の所に比べて明かりが
少なく黒々とした場所があるのに気がついた。あそこ
に行ってみよう。ぼくはちょっと迷ってから防災袋の
使い捨てカイロをふたつ取り出し、ひとつを風露にわ
たして出発した。これはあとからこっそり買い直して
防災袋にもどさなくてはいけない。

自転車で一走りして近づいてみると、そこはこんも

りとした森のような場所だった。

「ここ、地域総合公園じゃない？」

と風露が言った。そうだ。ぼくも見覚えがある。こ
のなら良いかもしれない。ぼくたちは駐ちゆうりん輪スペース
に自転車を停めると、公園の中へ入っていった。野球
場の裏側にまわると、ちょうど木々のかげに照明がか
くれる。ぼくはここだと思つて防災袋の中から懐中電
灯を出した。いけがきの暗がりの中に小道がある。こ
の植えこみの向こうは芝生しはふの広場のはずだった。

ぼくは寒くなってきたこともあって、小走りに小道
に入つていった。ずんずん歩いてみると、後ろで風露
があつと小さな悲鳴を上げた。ふり返ってみると、懐
中電灯の光の中に風露が四つんばいになっているのが
見えた。

「宇埜君、行くの速すぎ！ 転んじやつたよ…」

「だいじょうぶ？ ケガした？」

「だいじょうぶ」

そうだ。風露は懐中電灯を持っていない。ぼくが先
に行きすぎると足元が見えなくなるのだ。

「ごめん」

ぼくは手を差し出して風露を助け起こした。そこからは右手に懐中電灯、左手に風露の手をにぎってゆっくり進んだ。ふたりの手袋の厚さを通りこして風露のぬくもりが暖かかった。なんだかわからないが、ぼくはどきどきしてしまった。

小道はすぐに右側にカーブして、目の前が開けた。芝生広場だ。ぼくは風露の手をはなして芝生の上に降りてみた。電灯で照らしてみるとけっこう芝^{しば}が枯れていて、ところどころ土が見える。それもなんだかちょっとぬれているみたいだ。ここに寝転ぶのはいやだなあと改めて、周りを見てみるとちょうどすぐ近くにベンチがあった。

「あそこに座ろう」

ぼくたちはベンチに座った。懐中電灯の明かりを消すと広い空にポツポツと星が見えた。

「なんか、思ったより星少ないね」

風露が言った。

確かにこれだけ周りが暗いのに星がよく見えない。

なんとなく空全体が白っぽくも見える。…雲だ。雲が出て来て空をおおっているのだ。せっかくここまで来たのに、なんてことだ！

「くもってきちゃった…」

「どうするの」

「ちょっと待ってみよう。晴れてくるよ」

ふたりはだまって空をながめた。

悲しいことに、雲はどんどん厚くなっていくようだった。少し見えていた星もすぐに見えなくなった。それでも空を見ているしかない。

ぼくは自分の体が冷え切っていることに気づいた。ブルツとふるえてしまった。カイロもたいして役に立たないんだな。

「そうだ。アルミの毛布があるんだ」

ぼくは懐中電灯で防災袋の中を照らすと、小さな銀色の包みを見つけ出した。ふくろのはじを歯でかんで引きちぎると折たたまれたアルミのシートが出て来た。広げてみるとそれは思ったよりうすかったけれど、くっついて座ればふたりのひざから肩^{かた}までおおえ

るくらいの大きさがあった。

「これ、かけよう」

風露が体を寄せてきたので、ぼくはアルミシートのはじを風露にわたした。ばさばさと音をさせながらなんとかぼくたちはアルミシートにくるまることができた。すぐに暖かくなってきた。

またふたりはだまりこんだ。

「また宇埜君に起こしてもらっちゃったね」

しばらくして風露が沈黙を破った。

「また？」

「宇埜君、おぼえてないんでしょ？ 二年生の時。

下校の時に雨が降っちゃって、わたしカサを持ってなかったから走って帰ろうとしたの。そしたら途中^{とちゆう}で転んちゃって。それを宇埜君が助け起こしてくれて、宇埜君の家まで連れて行ってくれた。宇埜君のお母さんも仕事でいなくて、宇埜君がタオルを持ってきてふいてくれたけど、泥^{どろ}なんか全然とれないの。それでわたしが泣いちゃって、宇埜君が自分のカサと長ぐつ

を貸してくれて、自分は大人のカサを差して、わたしを家まで送ってくれた」

ぼくには全然記憶^{きおく}が無かったが、確かに時々お母さんが笑いながら、ぼくが以前いたずらをしてタオルを泥だらけにしてしまったという話をするところがある。それはそのことだったのだろうか。

「だから、わたし宇埜君の家を知ってたんだよ」

ぼくは何か言いたかったが、何を言ってもよいかわからなかった。

「いいんだよ宇埜君は忘れてても。私がおぼえてるから」

「なんか、ごめん」

その言い方がおかしかったのか風露はけらけら笑った。

ちらりと目のほじに光の筋が見えた気がした。あわてて探すと空の一点から放射状に星がすいすい流れはじめた。それはあつという間に数を増し、まるでシャワーの水を下から見ているように激しく降り注いでき

た。すごい、すごすぎる、鶴さん、ほらすごい…

「宇埜君、寝ちゃだめだよ」

風露の声ではっとした。どうやら知らないうちにウトウトしていたらしい。雪山で寝ると死んでしまうと言う話を思い出してこわくなる。あらためて見てみると空はまだくもったままだった。

「ねえ、懐中電灯貸して」

「何か落とした？」

「トイレ」

「ああ」

ぼくは懐中電灯をポケットから出して風露にわたした。風露が立ち上がると急にアルミシートの中に冷気が流れこんできて寒くなる。ぼくも急におしっこがしたくなった。

「あ、ぼくも行く」

あわてて風露の後を追う。風露は余ゆうがないのか止まってくれない。足元が真っ暗な中、なんとか風露の電灯の後を追って、野球場のところまで出た。ここまで来ると、街灯も明るいし、トイレの電気もついて

いる。

風露が足早に女子トイレの中に入っていったので、ぼくも男子トイレで用を済ませた。そうするとまた寒くなってきたので身体をゆすったり、軽くジャンプしたりして風露が出てくるのを待った。自分はこんな真冬の夜中に公園のトイレの前で女の子が出てくるのを待っているんだなあとと思うと、何だかとても変な事をしているような気がしてきた。でもそれがなんだか、くすぐったいというか、なんだかちょっと楽しいような気もする。ぼくはちょっと変なのかな。

風露はトイレから出て来ると、

「もう、だめだね。帰ろうか」

と言った。ぼくも寒いしもういいかと思った。

「宇埜君、リュックは？」

そう言えば、あわてて風露を追いかけたので防災袋とアルミシートをベンチの所に置きっぱなしにしていた。

「ちょっと取ってくるから少し待ってて。懐中電灯貸して」

「わたしも行く」

それでぼくたちはもう一度芝生の広場にもどった。ベンチのところでアルミシートをたたもつとしたが、最初のようにうまく小さくはたたためず、仕方がないで丸めるように大きっぱにたたんで防災袋の中につめこむしかなかった。あとで何とかなるだろうか。

そのとき風露が、
「星、見えてるよ」

と小さな声で言った。

えっと顔を上げると、たしかに空の一部の雲が切れて、そこに星々がキラキラまたいた。

その時そこに、ほんの一瞬、白い光のつぶがスツとななめに飛ぶのが見えた。あまりに瞬^{しゅんかん}間的だったので、ぼくは本当に見えたのかどうかさえ自信がなかったほどだ。

「見えた」

と風露が独り言のように言った。

「見えた」

とぼくもくり返した。

ところが、すぐにまた雲が動いてきて、その奇跡^{きせき}のような空のすき間をうめてしまった。空はまた何もな**い**ぼんやりした白^{やみ}っぽい闇に変わった。

「飛んだね」

「飛んだ」

「何か願ひ事した？」

ぼくは風露に聞いた。

「ううん、できなかった」

「ぼくもできなかった」

風露はため息をついて「しかたないね」と言い、「でも一個見えたからよかった」と言った。

帰りはまっすぐ中学校通りと呼ばれている広い道を走った。この道路には広い歩道があって、そこに自転車レーンがあるので夜でも走りやすい。ぼくはだまっていただ**一**所懸命に自転車のペダルをこいだ。

流れ星は一個しか見えなかったし、ただ寒**い**ばかりだったけれど、自転車をこいで身体が温まってくると、今夜、流星雨を見に来てよかったという気分になった。

あとで風露に、またいっしょに流星を見に来ようねと言おう。

家まで半分くらいのみ所まで来たとき、後ろから一台のバンが速度を落としながらやって来て、短く何度もクラクションを鳴らして通り過ぎた。バンはちょっと先のガードレールの切れたあたりで停車した。あのクルマ、あれは……

バンの運転席からケイタイ電話をかけながら降りてきたのは、お父さんだった。クルマはやっぱりうちのクルマだった。ぼくは自転車を停めた。

「好夫！ どこに行ってたんだ！ みんな心配してるぞ！」

と、お父さんはぼくに向かってどなった。

お父さんに言われるままに、ぼくと風露はバンに乗りこんだ。ふたりの自転車はお父さんが後ろの荷台スペースに持ち上げて乗せた。

「こんなおそくに子供だけで出歩いちゃだめじゃないか。お母さんは心配して達也君のことか、遠藤先生ののことか、いっぱい電話かけて探したんだぞ。も

う少しで警察に電話するところだった」

お父さんは運転しながら、ぼくのことをしかった。

「そっちの子は？」

「鶴風露さん、同じクラスの」

「風露ちゃん？ 家はどっちの方？」

「安井町の方です。商店街の手前あたり」

「ああ、あの辺か……じゃ、先にうちに寄らせて。それからすぐ送るから」

風露は身を固くして、おしだまるばかりだった。

家の前につくと玄関の前にお母さんが立っていた。

ぼくが降りると、お父さんはすぐにクルマを出してしまった。出むかえたお母さんの顔はあまりにもこわくて、ぼくは風露にさよならを言うのも忘れたほどだった。

お母さんは、

「お風呂をわかし直したから、とにかく暖まりなさい」

とだけ言った。ぼくは素直に従った。お風呂から出ると、もうおそいから今日は寝なさいと言うので、ぼくはそのまま部屋に行きベッドに入った。目をつぶっ

たらとたんになむりに落ちてしまった。

翌日、起きたときにはもうすっかり明るくなっていた。時計を見るともう学校が始まっている時間だったので、びっくりしてダイニングにかけ下りた。

お母さんはテーブルで新聞を読んでいた。ぼくの方をにらみつけると、

「朝食、食べちゃいなさい」

とだけ言った。テーブルにはラップをかけたハムエッグが乗っていた。お母さんは新聞を置くのと台所に行つて、ご飯をよそった茶わんとみそしるの入ったおわんを持ってきた。いつもなら、ぼくは「ご飯よりパンがいい」と一言言うのだが、さすがに今日はだまってお食べた。

ぼくが食べ終わるのを見計らつて、お母さんはぼくの前にドシンと座った。ぼくはおそろおそろ、

「もう学校始まつてるよね」

と言つたが、お母さんは、

「それはいいから」

と言つて、そこから長いお説教が始まった。

学校で二時間目が始まつたころ、やつとお母さんは、ぼくに学校へ行く支度をしなさいと言つた。ぼくが支度をしている間に、お母さんはめつたに着ないスーツに着がえて、手早くお化粧を直した。

「じゃ、行きましょう」とお母さんは言つた。昨日のことを謝りにいっしょに学校へ行くという。ああ最悪だ。だがどうしようもない。

教室の前に着いた時、まだ二時間目の最中だった。お母さんがここで待つと言つたので、教室の前の方かではばらく親子でだまつて立っていた。授業が終わつて生徒がばらばらと出て来ると、みんなぼくとお母さんを見て怪訝けげんそうな顔をする。やつと遠藤先生が出てきて、お母さんは「ご迷惑をおかけしてすみませんでした」と何度も頭を下げた。先生は、

「宇野君は教室に入って次の授業の準備をして。お母さんはどうぞこちらへ」

と言つてお母さんを一階に連れて行つた。ぼくはか

けこむようにして自分の席についた。けれどもやっぱり、ぼくの周りには人ばかりができてしまった。タツちゃんキンジがかわりばんこに、昨日何があったのとか、お母さんは何で来たのとか聞いてきたが、ぼくはずっとあいまいに答え続けた。ただ別に心配するよいうなことは何もないということは、何べんも言わなくてはならなかった。もちろん風露のことは言わなかった。

佐野君はその時は何も言わなかったが、後になってぼくが図書委員の当番の時に図書室に来て、

「流星群は見えた？」

と聞いてきた。ぼくが流星を一個だけ見たと言ったら、くやしそうに

「えーいいいな！ ぼくの方は雲が出てきたんでお父さんが観測を中止しちゃったんだ。全然見てないよ」

と言った。佐野君にとっては本当に流星が見えるかどうかが問題で、ぼくがさわぎを起こしたことや、その時ぼくがだれと何をしていたのかなど全然関心がないう様子だった。佐野君は佐野君でたぶん実はいいやつ

なんだなと、ぼくは思った。

その日は、三時間目の授業に先生が少しおくれれて来た以外は、あっけないほど何事もなく過ぎた。お母さんもすぐに帰ったようだった。クラスの連中も放課後までにはもうぼくに対する興味を失っていた。ただ風露は欠席していて、その日学校に現れることはなかった。

そうじ当番を終えて帰ろうとした時、ろうかです遠藤先生に呼び止められた。先生はぼくをだれもいない階段のわきに連れて行き、

「夜中に子供たちだけで外に出るのは、ものすごく危険だよ。わかっている？」

と、確認するように言った。

「はい」

「もうこんな事しちゃだめよ。もしどうしても何かしなくちゃならない時には、お父さんかお母さん、そうじゃなきゃ先生に相談するのよ」

ぼくはうなずいた。

「それならよし。まあ、だけど本当を言うと先生は
今度のこと……うーん、まあいいわ。今日は寄り道
しないで早く帰りなさいよ。じゃ、以上」

先生は何かを言いたそうだったが止めてしまった。
くどくどお説教されなかつたので、ぼくはほっとした。
もつとも、その夜は今度はお父さんからダメおしでし
かられたのだけれど。

風露は翌日も学校を休んだ。そしてその翌日も。

結局、風露が一度も学校に顔を見せないまま、十日
ほどで学校は冬休みに入ってしまった。クリスマスだ
の大晦日わおみそかだのお正月だの旅行だのと、あつという間に
冬休みが過ぎ、あつという間に新学期が始まった。風
露のことはもうすっかり頭の中から消えていた。

ところが新学期の初めの日にとつぜん先生がこう言
った。

「鶴さんは、ご家庭の事情で急に転校になりました。
クラスのみなさんにあいさつできず残念だけれど、こ
れまで仲良くしてくれてありがとうと言っていますまし

た」

ぼくはおどろきすぎてお腹がぎゅゅつとなつてしまっ
た。いったい何があったのだろうか。

クラスの女子たちの話を遠くで聞いていると、どう
やら風露のお父さんとお母さんが離婚りこんをして、風露は
お母さんに連れられて引っこしたらしいと言う。で
も別の子の話では、そうではなくてお父さんに付いて
いったのだとか、また、お母さんはもうずいぶん前か
らいになかつたと言う子もいた。でも、確か風露の口ぶ
りでは弟がいたはずなのに弟の話はどこにも出てこな
いから、どの話も本当ではないのかもしれない。

風露の引っこし先を知りたいと思つたけれど、先生
に聞くのも女子に聞いて回るのもちょっと気後れして
しまい、とうとう何も知らないままに時が経ち、やが
て風露のことを思い出すことも少なくなつた。

だけど、ぼくは今でも時々ふと思ふことがある。
風露はなんであんなに流星雨を見たがったのだろう。
あの夜、空が晴れて流れ星がたくさん見えていたら、
そしてぼくたちが願い事をしっかりとすることができて

いたら、何かが変わっていたのだろうか。もしかしたら本当にもしかしたらだけど、鶴風露はまだこの町にいられたのかも知れない。何となくそんな気がすることもある。

ぼくはあれから夜空を見上げることが多くなった。佐野君とも少しずつ話をする機会が増えて、佐野君とお父さんの天体観測に時々連れて行ってもらえる仲にまでなった。これはお母さんも許してくれている。

天文学なんて自分とは関係のない難しい話だと思っていたが、宇宙のことを知るのがおもしろくなった。今の夢はいつか自分で新しい星を見つけること。もちろんいつになるか全然わからないが、その星の名前だけはもう決めている。その名は「ふうろ」だ。

—おわり

(2015/11)

(未発表作品)

ハッピー軒の夏

最後の客のテーブルに餃子の皿を置いたのは、そろそろ午後八時という時刻だった。もう客は来ない。このハッピー軒に来る客は、ほとんどが近くの団地の住人で、ということは何年寄りが大半である。もちろん昔は若かったのだがどんどん高齢化が進んでしまった。年寄りは夜が早い。不眠症の人も多いらしいが、だからと言ってそういう人がこんな寂れた夜のラーメン屋にあえて来てくれるわけでもない。

のれんを外そうと思ったとき、この時間には珍しく客がひとり入って来た。その客は黄色いジャケットにチェック柄のシャツ、ニットタイに黒縁眼鏡と、少なくともこの辺ではあまり見かけたことのない派手な格好をしていた。困った。今落とした火はつけられればよいが、飯はもう無い。

「あ、もうご飯ものはできないんですが、いいですか」

「あ、いいですよ」

お客は涼しい顔でテーブル席にどんと腰を下ろした。まあいいか。北島靖はコップに水を入れてお客の前に置いた。

客はメニューを手にとってじっと眺めたかと思うと、今度は壁に貼ってあるメニューをゆっくりと眺め始めた。

「お決まりになったら、声かけてください」

靖はカウンターの裏に入って、寸胴のコンロに火をつけた。

「すみません、ラーメンもらえますか？」

たっぷり時間をかけて店で一番安いラーメンを選んだか。しかし靖にもその方がありがたかった。もう面倒な料理は作りたくない。

「はい、ラーメンです」

出来上がったラーメンを新しい客に運んだタイミングで、先の客が清算をして出ていった。後片付けをしていると、残った客が声をかけてきた。

「あの、このお水は特別なものですか？」

「いや、ただの水道水なんですけど…」

「ほお…」

客はコップの水をわずかに口に含むと高い音を立ててすすった。

「なるほど」

「何か変なものが混ざってましたか？」

「あ、いやいやそういうことではなくて… このラーメンがあまりにも美味しいので、水が関係しているのかと」

「え？ いや、そんなこと言われたのは初めてです」

「このお店、だいぶ古いですか」

「そうですね。父の代からやってまして。だいたい四十年くらいかな。私が継いで十年ほどです」

「老舗ってことですねえ」

「いや、そんなことは…」

客はちょっと間を開けてから口を開いた。

「…本当にぶしつけなことを訊きますが、だいぶ繁盛してらっしゃいますか？ 失礼ながらちょっと見にはひなびた感じがするんですが」

“ひなびた”だと。ものは言い様だ。

「いえ、もう本当にさっぱりで。正直に言って客もほとんど減ってますし、赤字続きでもういつ廃業するかっていう感じです」

お客はびっくりして声も出ないという表情で、靖の顔を見つめた。

「冗談ですよ。こんなに良い味なのに」

靖は首をひねった。

「そんなこと言われたことがありませんよ。父のころは団塊の世代が働き盛りで、バブルもあって、その団地も活気があったんですよ。昼は出前の注文、夜は店に人が集まってだいぶ景気が良かったんですが、今は駅前にも国道沿いにもいろんな店が出来て、若い人たちはみんなそっちに行っちゃうし、年金暮らしの人たちは節約でお金使わなくなっちゃったし。もう人を雇う必要もなくなっちゃいました」

「そうなんですか。これも時代的悲劇と言うべきなんですかねえ…。実は私、この店のひなびた感じは演出なのかとちょっと思ったものだから。こういう、昔

ながらの味を守る頑固親父の店というコンセプトでイメージ戦略されているのかと…。あの、ぶしつけいでお伺いしますが、I M Cはどちらを使われていますか？」

「あ、あいえむ？ 何ですかそれ」

「ようするにマーケティングの総合的なプランニングや、展開、実行などをどこのエージェントさんに委託されているのかと…」

「マーケットなら、だいたいハナガサとか業務マートとかですね。品揃えもまあまあだから」

「はいええ、仕入れの話では無くて。えーと、宣伝はどうされていますか？」

「宣伝なんてしてませんよー。金無いし」

「そんな！ それじゃ売れるものも売れないじゃないですか。店のコンセプトが昭和だからって、経営まで昭和じゃ生き残れるわけがない。もう二十一世紀なんですよ。I TとC Iの時代なんです！」

「え、えーと…」

「ああ、すみません。つい興奮してしまって。実は私、

マネジメント・プランナーをやっているんですが、今日はこの近くのお店に呼ばれてお話をうかがってきたところなんです。そこもこちらと同じようなタイプのお店なんです。なんとか業績を立て直したいということ。

「そちらも経営のやり方が時代遅れになってしまって、今のまま行ったらつぶれてしまうでしょう。それで建て直し戦略を請け負ってきたんですが、はっきり言ってかなり大変です。と言うのも、ここだけの話、出してるものがメチャ不味いんです。やはり経営うんぬんの前にまずは商品の質ですから。

「その点でこちらのお店は全く話が違います。これだけのクオリティの商品があるんですから、少し手を入れればすぐに『行列の出来る店』に変わるはずですよ」

お客様の言っていることは、靖にはちんぷんかんぷんだったが、しかし何か急に不安になってきた。

「その店って…」

「いえ！ それはもちろん言えません！ …でも、お

そらく御主人がご存じの店だと思えます。お心当たりがあるでしょうか？」

「どこだろう。国道裏の洋食屋か、郵便局の並びの天ぷら屋か、どちらも靖の店と同じ頃に同じように出来た店だった。あんな店でも「まーけていんぐ」とか「あいてー」とかやる気なのか。」

「押しつけがましく聞こえたらすみません。どうでしょう。私にお宅のビジネスプランニングをやらせていただかせませんか……えーと、つまり売り上げを上げるお手伝いをさせてください！ ぜひとも」

「いや、そんなこと急に言われても……」

「私は何も商売っ気で言っているんじゃないありません。こうなったら私の報酬はいりません。必要経費の実費だけでけっこうです。会社を通さず直接私個人との契約と言うことでどうでしょう。この店は貴重です。私はこの店に惚れました。この店は絶対につぶしちゃいけない。いやそれどころか、この店の味を広く世間に知らせなくちゃいけない。今や日本食は世界遺産だ。世界中からラーメンを食べるために外国人がやって来

る時代です。大きなことを言うようですが、貴重な日本文化を発展させるためにもぜひ、ぜひ！」

「急に壮大な話を振られて靖は混乱した。日本文化と言うのはさすがに大げさだが、何かしないと店の展望が見えないと言うことは今までも薄々感じていた。これがひとつの出会いというものなのかもしれない。絶対のチャンスなのかも、そう思えなくもない。靖がとまどっている間に、どんぶりに半分以上残ったラーメンは伸びきって冷たくなっていた。」

客は柳生誠一と名乗った。渡された名刺には何やらカタカナの社名が書かれていた。住所は東京、肩書きは課長代理。ただ柳生は会社に知られるとまずいからと言って、会社の電話番号にバッテンをつけ、名刺の裏に自分個人の携帯だという電話番号を書き込んだ。

靖がイエスともノーとも言わないうちに、柳生は一方的にしゅべり尽くしたまま、終電があるからと言って帰って行った。あつけにとられた靖はラーメン代を

もらうのも忘れたくらいだった。

何だか狐につままれた気分のまま、翌日もいつもと同じように店を開け、昼のお客が帰って一息入れていると、昨日と同じ格好の柳生が店に入ってきた。

「企画書を作ってきましたよ」

あいさつも無しに柳生は内ポケットから封筒を取り出した。

「いや、まだ頼むと言っていないし」

「まあまあ、話だけでも聞いてください。話だけならお金はかかりませんよ」

柳生はにやにや笑って言った。勝手にテーブル席に座ると封筒の中から便せんを取り出して広げた。靖もしかたなく柳生の前に腰を下ろした。

便せんには手書きで横書きに難しそうなことがたくさん書き込まれていた。

「すみません、汚い字で。急いだんで打ち込む時間が無かったです。まず最も重要なことは…」

柳生は便せんの文字を指でたどりながらあれこれと説明してくれるのだが、「製品戦略」とか「UPS」

とか聞けば聞くほど意味がわからなくなった。靖にわかったのは最後の方に書かれていた「一年後には売り上げ五倍、二年後には三十倍」という文字だけだった。

「これ本当なんですか」

「もちろん簡単ではありません。やはりテレビとかをうまく利用しないとけませんし。でも逆に言えばそうしたことがうまく行けば可能だと言うことです。実際、私も過去にこういうケースを成功させたことがあります。まあ、宝くじを買うよりは何百倍も確かだと思ってください。…ところで、北島さんはこちらにお住まいなんですか」

「はい。ここが実家なのもので」

「おひとりですか」

「…ええ、まあ」

「じゃ、とりあえず少し資料を見せていただけますか。現在のメニューとか、コストとか売り上げとか、出来れば経営関係の書類全般を…」

いつの間にか「ハッピー軒経営拡大プロジェクト」

が始まってしまっていた。

「とにかくメニューでしょう」

と柳生が言った。このところ柳生は毎日のように店に現れる。書類や伝票を熱心に読み、店の奥に座って水を飲みながらやって来る客のことをさりげなく観察したりしている。

「もちろん、スタンダードなメニューは必要ですが、それだけではどうしても訴求力に欠けますね。何かユニークなポイントを作って差別化を図ることでポジショニングを確定していくと…。つまり新しいメニューを開発したいです」

「もう夏だし、かき氷とか」

「ああ違う、違う。そういうどこにでもあるものではなくて、この店でしか食べられないようなユニークなメニューですよ」

「ユニークねえ」

「…そうですなえ、たとえば超激辛ラーメンとか。この際、味はともかく話題性のあるものがないな。そう

だ、珍しい唐辛子とか使ってみては？ それだけでインパクトがありますよ。私心当たりがあるので仕入れてきましょう」

柳生は翌日にはその世界的に珍しいという唐辛子を持ってきた。テープでぐるぐる巻きにしたポリ袋の中から、一見するとスーパーで普通に売っているのを見分けがつかない青唐辛子が数十本転がり出た。柳生は舌を噛みそうな名前を口にしたが、靖にはとても覚えられなかった。

「今回は無理を言っただけでわけてもらったので、ちょっと高くなりましたが、今後継続して仕入れるなら安くしてくれるそうです」

とりあえず立て替えた代金を清算して欲しいと柳生が言うので、靖は払ったが、その金額は靖が想像していた金額をはるかに超えていた。柳生は金を受け取ると、次のクライアントとの約束があるからとすぐに帰ってしまった。

靖は高価な唐辛子を前に、どう調理したものか思

案した。見当がつかないので、ともかくざく切りにして炒めて具材にしたものと、スープに煮込んだものを作ってみた。まずは自分で食べてみたが、ただ辛いだけで別に特に美味しいと思えなかった。

どうしたものかと考えているところへ常連客の山野がやって来た。山野は正体不明の中年男である。本人はライターを自称しているが、いったいどういう分野の物書きなのかよくわからない。こんな昼間からふらっと店にやってきては、柿ピーをつまみにビールをちびちび飲んでいく。ラーメン屋で柿ピーというのも失礼な話だが、靖は山野のためだけにいつも柿ピーを用意していた。山野ひとりがいるからと言って迷惑になるほどお客が入る店でもないし、客が全然いないよりは枯れ木も山の賑わいだとも言える。それになにより靖はこの小汚いひげ面の男となんとなく馬が合った。

「なんだ、このにおい」

「ああ、ちょっと唐辛子を炒めてたんで…、そうだし、さん、ちょっと試作のラーメン食べてみてくれない？」

靖は警戒する山野に、いま作った二種類の激辛ラーメンを食べさせた。

「すまん、靖。これはダメだ」

山野の言葉は身も蓋もなかった。道のりはまだまだ長そうだった。

「やっぱり夏は『冷やし中華はじめました』でしょ」と、柳生が言った。

「はあ…」

早くも連日の夏日になっているにも関わらず、ネクタイだけは締めているところが柳生らしい。見ている靖の方が暑苦しくなってくる。

「何か戦略はありますか？」

「戦略なんて…。冷やし中華はやりませんが、普通に」

「それじゃだめなんです！」

柳生はトーンを一段上げた。

「うーんと、そうだな… 具材に変化をつけましょう。カニを乗せてカニ冷やし中華、エビを乗せてエビ冷やし中華」

し中華、チャーシュー冷やし中華とか、まあなんでもいいです。店で使っている具材なんでもいいから、とにかく乗せてメニューを増やしましょう」

「それはかまわないけど、そんなお客に頼まれればいつでもやりますよ」

「そーじゃないんだなー！ そうじゃない。キャンペーンを打つんですよ、『夏・の・冷・や・し・中・華・祭・り』」

柳生は宙を見つめて両手で文字を一文字ずつ置くように言った。

「いつもとは違う感を出さなきゃ。今年の夏限定の特別メニューなんです。中身はいつもと同じでもいい。でも、お客にこれは今ここでしか食べられない特別なメニューだと思わせるんです。そうだ各限定五食にしよう！ その方がプレミア感が出ますよ。メニューの開発はまかせました。私はキャンペーンを準備します。ポスターを貼ろう」

「あ、製麺屋から販促の『冷やし中華はじめました』のポスターをもらってるんで、それ貼ろうと思ってた

んですけど」

「だめです！ そんなどこにでもあるようなものじゃ、客のインサイトに届きませんよ。やはり店のコンセプトに沿ったトーン&マナーというものが重要なんです。オリジナルでユニークなものを作りましょう！」

「でも、お金無いし…」

「いやいや、そうおっしゃるけれどやはり初期投資は重要です。ここはがまんしてちょっと頑張りましょうよ。そう言えば、お宅のウェブ 사이트はどうなってますか？ ウェブでも連動してキャンペーンを張りましょう」

「うえぶ？」

「いわゆるインターネットのホームページってやつです」

「いや、俺、パソコンとかああいうの苦手で…」

「え？ PCお持ちでない？ ウェブサイトも無いの？ 今どき？ スマホは？ スマホとかタブレットから

いは持つてるでよ？」

「いや無いです。俺の携帯はこんなんだし」

柳生は靖の携帯電話を見て絶句した。

「ガラケーですか。ガラケー。よくもまあ……。いや、いいんです。いいんですよ。私が全部何とかします。

大丈夫です。まかせてください。おっと、じゃ急がな
くちや。それではメニュー頼みましたよ」

言いたいことだけを言って、柳生は店を飛び出して
行った。靖はジェットコースターに乗っている気分が
した。

柳生は数日のあいだ顔を見せなかった。そのかわり
電話会社がやって来て、店と奥の六畳間の間にある
電話の引き込み口に何か細工をしていた。新しい装
置を置きたいと言われたので靖はしぶしぶ六畳間のタ
ンスの上を明け渡した。その黒々とした小箱は何やら
不気味に緑や赤の光を点滅させた。

その日の午後に現れた柳生は、六畳間に入り込
んでその機械を眺め直し、業者が置いていった書類を
一瞥すると、いいですねと満足そうにうなづいた。

「今日は間に合いませんでしたが、次にパソコンとプ

リントナーを持ってきましょう。これでハッピー軒もい
よいよインターネット進出ですよ！ やりましたね
ー」

その次に柳生は持ってきた手提げ袋の中から紙の束
を取り出して店のテーブルの上に置いた。A4サイズ
の紙の束の一番上はカラフルに描かれた「冷やし中華
はじめました」のポスターだった。ていねいにも店の
名前入りだ。

「まず、店の前に三枚、店の中に四枚、それを夏の
間に二〜三回貼り直しするとして二十五枚、とりあ
えず作りました」

「貼り直し、必要ですか？」

「そりゃもちろん。いつもきれいなポスターで清潔感
を演出します。そこがブランドエクイティというやつ
です」

靖はこっそりため息をついた。

それから柳生はその紙束から別の紙をより分けて
「このバナーは店の奥に貼ります」と言った。それは
それぞれの紙いっぱい文字が印刷されており、それ

を横に並べると「夏の冷やし中華祭り」となるのだ。

柳生は、いいんですよ、いいんですよと言いながら、勝手にテーブルの上に乗って、ぺたぺたとその「バナナ」なるものを貼り付けていき、そのままの勢いで店内外に「ポスター」も貼ってしまった。

まあ冷やし中華の準備は出来ているので別に良いのだが、まだ例のメニューの件の相談が出来ていなかった。ところが柳生は紙を貼り終わると、今日は忙しいのですぐ帰る、申し訳ないが印刷の立替代金だけはおもらっていきたいと言った。靖にとっては疑いたくないような高額だったが、でも特別なものだからしかたないのかもしれない。靖は黙ってその金額を払った。

柳生が出ていった後、ぼんやりと貼り付けられた「ポスター」や「バナナ」を見てみると、でもなんだか店内が明るくなったような感じがした。昔とは違うが、なんとなく活気が戻ってきたような気がした。ただ、柳生の持ってきたポスターが、無料の販促用のとどこがどの位違って特別なのかは、素人の靖にはどうしてもよくわからないのだが。

さて、それにしてもどうしようかと考えたとき、靖は机の引き出しに入れっぱなしにしてある色画用紙のことを思い出した。それを引っぱり出してハサミで短冊形に切り、マジックで「限定！☆エビ冷やし中華」と書いてみた。続けて「カニ」だの「チャーシュー」だのと何枚か書き、「限定品につきご注文に応じられない場合があります」という但し書きも一枚書いてみた。実際のところ、具材が足りるかどうかはともかく、各メニューにつき五食では普段の冷やし中華の注文数をはるかに上回ってしまう。ここは靖にとってのリアリティというところだ。書きあがったメニューを店の奥の「夏の冷やし中華祭り」バナナの下に貼ってみる。なかなか賑やかになるじゃないか。

日が落ちてから山野が店に顔を出した。「ビール！」と注文するより前に、

「なに？ 靖、とうとうやる気出ちゃった？」

と皮肉な笑いを浮かべた。

靖はビールを出しながら、

「今日は冷やしがよく出るよ」

と、うれしそうに返した。

「じゃ、俺、メンマ冷やし中華もらおっかな」

「はい注文入りましたー！ メンマ冷やし一丁お！」

ただし、山野は帰り際、「俺、やっぱり普通の冷やし中華でいいかも」とぼそりと漏らした。

店で冷やし中華を頼む客は確かに増えたものの、客の数自体が増えたわけではない、ということをし、靖は柳生に訴えた。

「わかってます、わかってます。ですから、ここからネット展開ですよ。ウェブを活用してカバレッジを広げるんですよ」

「もっとわかりやすく言ってよ」

「まあ、とにかくホームページを作りましょう。ホームページならチラシを作るよりずっと簡単に素早く宣伝が出来るんです。チラシを見ない人でもネットは見るとい人もいます。今ではその辺のごく普通の店でもホームページを持つのが当たり前になってるんですよ」

確かにそうらしいことは、靖もなんとなく知っていた。最近はどこを見ても「http」とか変な四角いモザイク模様の「QRなんとか」が書かれている。テレビのコマーシャルもみんな「続きはネットで」と言っている。

「この前、送った荷物は届いてますか？」

昨日、着払いで届いた重たい段ボール箱は六畳間に置いてある。

「じゃ、これからセッティングをしますから、しばらく待ってください」

と柳生が言うので、靖は店の方で雑用と客の対応に専念した。そうこうするうちに夕方の客がやって来て、いつの間にか夜も八時をまわった。店を閉めて六畳間に行ってみると、むわっとする熱気の中で柳生は机の上につつぶして熟睡していた。

「柳生さん、大丈夫ですか」

柳生はバタッと身体を起こすと、きよろきよろ周りを見渡した。

「あ、すみません、すみません。昨日は終電を逃して

しまつて、公園のベンチで寝てしまつたものですから。ちよつと寝不足で」

柳生はだいぶ疲れているようだったが、すぐにいつもの柳生に戻つた。

「ま、詳しい説明はまた折々にしますが、とりあえず今日は、いくつか設定をやつてしまひましよう」

と言つて、靖を机の前に座らせた。机の上には、たぶんノート型パソコンというやつと、いくつかの機械が乗つていた。これがプリンターで、これがなんとかで、と柳生は説明してくれたが、さすがにすぐには理解できない。柳生はパソコンを開いて自分であれこれ操作すると、これがハッピー軒のホームページだと言つて画面を見せた。

のれんと同じ黄色い色の画面に、どんぶりに描かれている雷文という四角い渦巻き模様があしらわれ、左上に「伝統・昭和のラーメン ハッピー軒」と書かれていた。中央辺りには「ただいま限定 夏の冷やし中華祭り開催中!」とあつた。

「これはすごいですね。もう出来ているんですか。柳

生さんがやつてくれたんですか?」

「ええ。：いや、事前に知り合いのデザイナーに作ってもらつたんですよ。なかなかいいでしょう」

「お金もかかつたんでしょうか?」

「まあ、仲の良い知り合いなので今回は必要経費だけにしてもらいました。ただパソコンやプリンターを購置しましたので、そちらに少しかかります。それから、インターネットの申し込みに費用がかかりました。それだけです。あとは毎月の接続費用がかかりませんが、それはまあ少額なので、請求が来たらそのつど北島さんの方で直接払つていただけますか」

それから柳生はひとしきり、今回購置したパソコンの性能がいかによいかとか、接続業者が信頼できる一流のところだとかと説明してくれたが、もう靖の頭に入る隙間は全く無かつた。結局理解できたのは、今回かかつた経費があわせて数十万円になるので、数日以内に現金で用意してくれという話だけだつた。

その夏、その後も柳生は度々店に現れ、靖に新し

いメニューの開発をせかし続けた。ふたりは一緒に「ユニーク」なメニューに頭を絞った。寄せ鍋にラーメンを入れたラーメン鍋を試作したが、山野の意見は「夏に食うものじゃない」だった。一番斬新だったラーメンパフェにいたっては現物を見せる前に拒絶された。

ある日、

「フォーチュンクッキーにならって、フォーチュン餃子なんてどうでしょう」

と柳生が言った。

「餃子にコインを入れるっていう風習は中国にあった気がしますね。コインの入っているのに当たった人は金回りがよくなるとか」

「そうか、そういうのもあるんですね。それじゃフォーチュンチャーハンは？」

「チャーハンですか」

「チャーハンの中におみくじを入れるんです」

靖はどうだろうと思ったが、もう柳生はやる気満々だった。二日後には何かで一杯にふくれたポリ袋を持ってきた。

「知り合いのデザイナーに作ってもらいました。おみくじです。見てください」

と袋の中から二く三センチの白い棒状のものをひとつ取り出した。それは小さな紙片を丸めてラップで包んだものだった。紙を広げると神社のおみくじに似た感じで小さな文字が印刷されている。目を懲らすと恋愛運とか金運とか書かれている。ただ普通のおみくじと違うのは「大吉」とあるべき所が「ベリー・ハッピー」になっているところだった。

「どうです。ハッピー軒のおみくじだから吉とかじゃなくハッピーにしています」

微妙なセンスだ。

「フォーチュンチャーハンは、出来上がったチャーハンにこのおみくじを埋め込むだけです。簡単でしょう？」

「まあ、試しにやってみましょうか」

それで実はこれを作ったデザイナーに少しお礼をしなくてはならないと柳生は言った。

「今回はけっこう凝ったものを作ってくれたので……」

結局、靖は柳生に二万円渡した。今年の夏は相当な出費だった。だがこれで客足が伸びれば、仮にトントンでもまあ良いのだろう。

柳生が次のクライアントとの約束があるのでと言った。ちよほどその時、強い西日を浴びながら山野が店に入ってきた。

「らっしやい！」

「おう、ビール。柿ピーも。…そう言や、お前、ホームページ作ったんだって」

「うん、この人がいろいろやってくれたんだ」

と靖は柳生を紹介した。

「そおっすか、それはいろいろお世話になって」

山野はまるで身内の礼を言うような口調で言った。

柳生は黙って頭を下げた。

「ちょっと待って、今パソコン持ってくるから」

靖が六畳間のパソコンを取りに行こうとすると、柳生が後ろから、

「それじゃ、また明日来ますんで。続きはその時に」

と声をかけてきた。靖がパソコンをもって店に出て

来たときには、もう姿がなかった。

「いそがしそうな人だな」

と山野は柳生が出ていった扉を見つめて言い、それから靖の持ってきたパソコンに目を移すと、思わず声をあげた。

「こりや、すごいノートだなあ。よく見つけてきたな」

「そうなの？ やっぱすごいパソコンなんだ。柳生さんが今どきこれだけどしりした重量感のあるパソコンはなかなか無いって言ってた」

「ま、それはそうだが…。お前、これ相当古いぞ。よくまともに動いてるな」

山野がいろいろ見てくれた結果、一体何が起こっていったのが明らかになった。

まず、柳生が高級なプロ用のパソコンだと言って持ってきたパソコンやプリンターなどは、もはや値段もつかないほど旧式のもので、たぶん中古店から数千円程度で買ったものではないかという。

「OSもちゃっかりリナックスを使ってやがる」

と、山野が言ったのは、つまりパソコンで使われているソフトも全部インターネットから無料で取ってきたもので、お金は一銭もかかっていないということらしい。

柳生が持ち込んできたポスターとかおみくじも、どう見ても専門家がわざわざ作ったものではないという。これもインターネットで配布されている無料のものを流用したか、柳生自身がパソコンで適当に作ったものだろう。靖が感心したホームページも、無料で作れるブログというサービスを使っただけで、デザインやイラストも全部自動的に出来てしまうものなのだそう。こうなると、たぶん最初に持ってきた「世界的に珍しい唐辛子」というのも普通の唐辛子だったのだろう。

ただ唯一良心的と言うか、インターネットの接続に関する契約などは、厳密に言えば靖本人になりすまして勝手にやったものだから犯罪的ではあるものの、それ自体は特におかしなところはなく一般的で安全なものだった。靖も、もしもと思って銀行口座など

を調べてみたが、別段不審なところはなく、金を引き出された形跡もなかった。とは言え、柳生に教えられた携帯番号にかけてみても、おそらくバレたことに気付いたのだろう、もはや通じる様子がない。

山野の意見では、おそらく靖が柳生に支払ったカネの総額は、実際にかかったであろう経費の二〜三十倍にはなりそう。山野は警察に届けるべきだと強く主張した。靖が躊躇していると、業を煮やして自分で警察に電話してしまった。

やってきた刑事たちはすでに全部わかっているようだった。刑事に見せられた写真は確かに柳生その人だった。

「こいつは本名を安田一郎、別名ゴミあさりの安田というチンケな詐欺師です。ただ、なかなか立ち回りがうまくて…、警察でも手を焼いているんですわ。」

「こいつは他の詐欺師が気にもかけないような、田舎の店とか、業績のふるわない町工場とか、まああまりパツとしないところばかりをカモにするもので、それでゴミあさりって…」

靖の胸がじくりと痛んだ。刑事は気づかない様子で続けた。

「ひとつの地域で何件か同時進行で詐欺をやって危なくなる」とトンズラしちまうんですが、マンガ喫茶とコインロッカーを利用しながらある程度の期間じつくり下見してるから、お宅ももう狙い撃ちだったんでしようね。たぶんこの辺りでまだ何件か被害の通報が出てくると思いますよ」

そう言えば、柳生が一度野宿したようなことを言っていたことを靖は思い出した。

「ただこいつのやっかいなところは、だまし取る金額がけっこう少額で、しかも詐欺か商売かのボーダーなところでやっているので立件が難しいんです。一応、何らかの実質的なサービスは提供してますからね。まあぼったくりには違いないんですが…」

刑事はとにかく被害届を出してくれ、そうしないと捜査できないし、次の被害者を出さないためにも必要だ、後で警察署まで来てもらいたいと言って帰っていた。靖は何か夢の中にいるような、ふわふわした気

分で刑事達が見送った。

「本当に被害届出さなかったのか」

山野がビールの入ったコップを片手に詰問調で言った。開け放った窓からほどよく風が吹きこむ。靖は結局シーズンが終わるまで残しておいた「冷やし中華はじめました」のポスターをはがしながら答えた。

「なんかそういう気分になれなくてね」

「おまえは！ …まあ、確かにおまえも悪い。だいたい客が減るのはおまえの料理がクソ不味いからだ。修行したこともねえくせに新しいメニューをいくら考えたって、そもそもウマくないんじゃないか」
事件が発覚したあと、今後は山野がインターネットやホームページの管理をしていくことになった。意外にも山野は本当にITライターなのだそう。もっともITと言われてもそれが何なのか靖はもう知りたくもないのだが。こんなんでお客が増えるわけがないと文句を言いながらも、山野は写真を使ったメニューを載せて本格的なホームページを作ってくれた。ネ

ツト関連の仕事全部込みで、報酬は店で飲むビールをタダにするということで契約が成立した。果たしてこれは得だったのだろうか損だったのか。

問題の靖の料理の腕については、今から修行というわけにもいかないの、これも山野の知り合いで団地に住む中国人のおばさんが、暇なときに教えてくれることになった。この人は別に料理人ではないが料理がすごく良かった。父親の見よう見まねで作ってきた靖よりずっと美味しいものを作った。むこうの仕事の都合次第のところもあるが、一回二千円のレクチャー料なら高くはない感じだ。

ハッピー軒にとってこの夏の出費はかなり痛かったが、しかしそれも授業料だったかなと靖は思う。少なくとも、ちゃんとやっていかないとこの元は取れないぞという危機感を持たせてはくれた。

洗った皿を片付けながらそんなことをぼんやり考えていたら、棚の一番下からポリ袋が転がり落ちてきた。例のフォーチュンチャーハンに使うはずだったおみくじの袋だ。もうこれも捨てなきゃなと思いつつ、何

気なくその中からおみくじをひとつつまみ出して、ラップの包みを開いてみる。靖はおもわず苦笑いした。

—ネクスト・ハッピー 今は嫌なことがあっても運気はだんだん上昇していくでしょう。勤勉はなお吉：

「おい、ビール追加！ いや紹興酒にしよう。紹興酒、お燗で一本！」

山野の調子の良い声が店に響いた。

—了

(2015/11)

(未発表作品)

あとがき

ぼくにとって小説を書くのは「遊び」である。それはぼくにとっては「ひとりカラオケ」のように、自分のためだけに書くことを意味している。「小説」というものの本質は他人に読ませることにあるのだから、これは自己矛盾である。もちろん、そのとき自分が何かを表現したいから書いているわけで、その範囲においては満足し充足している。だが読者の目で考えることができないから、正直言って自分の作品が面白いのかどうか全くわからない。どこまでも「自分の自分による自分のための」創作なのだ。

それにしても、こうしてあらためて自分の作品をまとめてみると、「神（宗教）」と「自殺」をテーマにしたものが多いことに驚く。特に自覚しているわけではないが、分析的に言えば、あらがえない運命と究極の自己選択という問題意識なのかも知れない。

ご託はともかくも、まずはお目通しいただき、まことにありがとうございます。

いまのまさし

掌編小説集

二〇一六年一月八日 印刷発行 (Ver:1.2)

著者・発行者 いまのまさし

編集 一太郎 (ジャストシステム)

印刷 DCP-1925N (ブラザー)

※住所・略

※電話番号・略

Email : m_imano@nifty.ne.jp



いまのまさし

1959年東京生まれ。

幼少時に埼玉県鳩ヶ谷市に移る。大学時代より10年以上、新左翼党派活動家として活動。党離脱後は、温泉ホテルのフロントマンを経て、上尾市にて両親と同居しながら、町工場の工員となる。父の体調不良を機に退職。現在は母のサポートをする主夫を本業とする。

